
少女合体サヤナミカ

黒木猫人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女合体サヤナミカ

【Nコード】

N8705J

【作者名】

黒木猫人

【あらすじ】

多分そう遠くない近未来。人類は時折地球に襲来する宇宙怪獣に対し、巨大人型兵器スーパーロボットを駆っては撃退するという日常を繰り返していた。十七歳の少年、自称天才パイロットこと白坂北斗はある日、スーパーロボット開発の世界的権威である姉の罫に嵌められ、合体出来ない合体ロボ、サヤナミカを押し付けられてしまう。「なんと、サヤナミカを構成するのは、三人の美少女であった！中でも沙耶という少女は、たいそう見目麗しく」「趣旨がズレてる、趣旨が！」「つーか、自分で美少女って言うな！」「何

だと貴様！？ 我のこのスレンダーな容姿を愚弄する気か！」「
そうして、ほーやんとサヤナミカはいつまでも幸せに暮らしましたと
さ。にゃんにゃん」「あらすじで話が終わっちゃった！」果たし
て、北斗は三人娘を合体させることが出来るのか！？

ブローグノスーパーロボットな女の子は、好きですか？

俺は天才のはずだ。

天才の、スーパーロボットパイロットのはずだ。

というか、天才でなくてはならない。誰が何と言おうと天才なのだ、俺は。

だから当然、搭乗するスーパーロボットもそれに相応しい機体の必要がある。

だというのに。

「ねえ、北斗くん北斗くん！ 今日日は日曜日だよ。ボクとどこかにデートしに出掛けようよ！ いいでしょ？」

日曜の朝っぱらから、我が家の食卓にて、元気一杯にびよこびよこと上下に揺れるピンクの尻尾が二つ。人は、それをツインテールと呼ぶ。

「ボクは遊園地がいいな。まずはジェットコースターでしょ？ コーヒーカップは必須だね！ バンジーがあるところがいいな。お化け屋敷は欠かせないよね。最後は観覧車で、夜景を眺めて、いいムードになった二人は……えへへ」

「おいコラ、そのツインテール娘。何を勝手に妄想してる」

俺のツッコミなど聞いている様子もなく、向かいの席に腰掛けているピンク髪ツインテールの少女は、テーブルに身を乗り出して、大きく丸い瞳を閉じ、柔らかそうな唇を尖らせて、

「ちゅー」

「誰がするか！」

空風沙耶にチョップを喰らわすと、彼女は唇を尖らせたまま、おでこを擦った。

「ぶー、別に減るもんじゃないんだからしてくれたっていいじゃん」

「うるさいぞ、沙耶」

言ったのは俺ではなく、沙耶の隣の席に腰掛けたライトブルーの髪色をした少女。俺から見て、向かい左斜めの席だ。

「黙って朝食の一つの食べられないのか、貴様は。そんなだから、いつまで経ってもスーパーポロツトと言われるのだ」

腰辺りまで垂らしたポニーテールを揺らし、切れ長の瞳は朝食の焼き鮭に向けられている。白く細い指が規則的に箸やお椀を動かし、食事を口に運ぶ。

切れ長の瞳が不意に俺を睨み、

「第一、この男のどこがいいと言うのだ。口だけの自惚れ屋ではないか。我には全く理解が出来ん」

「おい」

誰が口だけの自惚れ屋か。聞き捨てならんぞ。

ライトブルーポニーテールの少女、海川奈美は「ふん」とそっぽを向く。

「自身のことを天才などと言う輩を信用出来るものか。貴様が博士の弟とはいえ、我らが今までフツて来たどんなパイロットよりも性格が悪い。過去最悪だ」

「それはこつちの台詞だつーの！」

テーブルを叩く。何が悲しくて、天才パイロットたる俺がお前らみたいな小娘共の面倒を見ねばならんのか。

「そつだよ、言い過ぎだよ奈美ちゃん！」

と俺に続けたのは沙耶。

「北斗くんは確かに自惚れ屋で、性格も悪いけど、見た目だけは格好良いんだから！」

「何のフォローにもなつてねえよ！」

またも俺のツツコミを無視し、沙耶は奈美に人差し指を向ける。

「というか、奈美ちゃんは誰がパイロットでも同じことばかり言ってるじゃないか。ワガママだよ！」

「慎重にパイロットを選んでいただけだ。我らは宇宙怪獣と戦う時パイロットに命を預けるのだぞ？ 今までのパイロットは命を預け

るに値しなかった。だからフツた。それだけだ！」

「フラれたの間違いでしょ！ そんな風に可愛げもなくツンツンしてるから、パイロットが寄り付かなくなるんだよ。一人クールぶっちゃってさ！」

「何だと貴様……我を侮辱する気か！」

席から立ち上がった奈美と、沙耶の視線が衝突し、「うゝ」と唸りながら火花を散らす。

先月までの日曜の朝は、もっと、雀のさえずりが聞こえて来るくらい静かで、優雅だったはずなのに、どうしてこんなことになっているのか。

ため息が出る。

「頭が重い……」

というか、物理的に頭が重い。

「おい、未佳」

「にゃあ？」

「そろそろ頭の上から退け。重い」

「えゝ」

先程から俺の頭上にずっと顎を乗せていた金髪の少女が、不満の声を洩らす。

「ほーやんの頭の上はウチの特等席やのに」

「勝手に決めるな。いいから退け」

「にゃゝん、あと五分ゝ」

金髪猫っ毛の陸花未佳は、そのまま猫のような声を出して、ぐりぐりと頭頂部に顎を押し付けてくる。

「あー！」

それに気付いたらしく、沙耶がこちらを見て、声を上げた。

「未佳ちゃんずるい！ ボクが目を離してる隙に北斗くんとスキンシップなんて！」

「だって、さーやんは今、なーやんと話し合ってるんやろ？ そしたらウチは暇やし、せっかくやから、ほーやんと遊んでようかなあ

つて。ウチらことは気にせんでええから、さーやんとなーやんは二人で思う存分話し合ってや？」

「うっ……そ、そういう問題じゃなくて！ ほ、ほら、北斗くんだって未佳ちゃんが頭の上に乗ってて重そうじゃないか！」

「そんなことあらへんよ。なあ、ほーやん？」

ここぞとばかりに必殺兵器を使用する未佳。それは女性ならば誰しも持っているものだが、彼女は中でも人一倍重武装。

未佳は俺の背中に体重を掛け、その豊かな胸を押し付けてきた。しかし、他の男はいざ知らず、色気仕掛けで俺を落とそうなど、笑止千万。

「いや、重い」

「にゃー!？」

裏切られた、という顔をして、未佳はやっと俺から離れる。ようやく肩の荷が下りた。色んな意味で。

沙耶は「北斗くん！」と瞳を輝かせると、ぱあっと表情を明るくして、

「やっぱり北斗くんはボクのこと……後でチューしてあげるね！

ちゅー」

「断固拒否する！」

両腕を組んだ奈美が、未佳に不敵な笑みを浮かべた。

「フツ……胸など所詮は脂肪の塊ということだ。それを使って交渉など、愚かにも程がある」

ぴくりと眉を動かす未佳。

「なんやと？ 自分が貧乳やからって、ひがみかそれは」

「勘違いしないで貰おう。我は貧乳などではない、スレンダーなのだ。一切の無駄を省いた、実的に優れた体型なのだ」

「……なーやん。それだとまるで、ウチが実用的じゃない、無駄だらけの体型みたいに聞こえるんやけど？」

「そう言ったつもりだが？」

こちらの二人も睨み合い、火花を散らし始める。我が家の食卓を

中心に、リビングに漂い始める険悪なムード。

すると、沙耶が「まあまあ」と間に割って入った。どうやら仲裁するつもりらしい。

「胸の話はいいじゃない。未佳ちゃんみたいに大きな胸は確かに魅力的だけど、奈美ちゃんのようにすらつとしたスタイルも魅力的だよ。それにさ、胸があってもなくても」

沙耶は満開のスマイルで言った。

「結局、一番可愛いのはボクなんだから、関係ないよ」

「ふざけんなっ!」

火に油を注いだだけだった。

未佳の猫っ毛がパチパチと電気を帯びて、浮き上がり始める。

「もう我慢の限界や……ウチのこと馬鹿にしおってからに……!」
「同感だな」

そう言う奈美のポニーテールを揺らしたのは、思わず身震いするような冷気。彼女を包むように渦巻き始める。

……って、おい。ちよつと待て。

「未佳、奈美、喧嘩するなら外でやれ! お前らが暴れると」

「にゃあ ツ!」

「おわっ!?!」

未佳が掌から雷撃を放ったのはその直後だった。ターゲットは沙耶ではなく、その隣にいた奈美。

途端、ライトブルーのポニーテールが横一線の軌跡を描く。奈美が飛んで回避したのだ。

雷撃は空を切って、リビングの壁に当たり爆発、ぽっかりと風穴を開けてくれた。ちよつ……どうしてくれんだコレ!?

食卓から離れたところに両足を着いた奈美が、切れ長の瞳を金髪の少女に向ける。

「未佳、貴様……どういうつもりだ」

「なーんは何か勘違いしとるようやけど、ウチが怒ってるんは、なーんに対しても一緒ってことや」

「ふん、よかろう……ならば貴様ら二人、まとめて相手をしてくれる！」

奈美は左手を未佳、右手を沙耶の方に構える。

「えっ、ボクも!？」

「当たり前だ！」

奈美の両腕の横に冷気が集まり、宙に浮く、二つの巨大な氷塊を創り出す。それは水晶の形状に似て、長さは七十センチ程。

「くられ、アイスマシール！」

その言葉を合図にし、二つの氷塊がベクトルを得て、それぞれ沙耶と未佳に放たれる。

猫のような身のこなしでかわす未佳に対し、「うわわっ！」と頭を下げ避ける沙耶。流れ弾となった氷塊がキッチンに突っ込み、今度は冷蔵庫と電子レンジを貫き破壊する。

その光景を見つつ、沙耶は額の汗を拭う。

「ふい〜、危なかつたあ〜」

と、その時だった。

「サンダークロー！」

「ほえ？」

振り返る沙耶の視線の先には、雷撃を纏った爪を振り下ろす未佳の姿。

驚いて目を丸くするピンク髪少女のツインテールの右片方が、ぼろりと床に落ちた。

「ぎゃー！ ボクの大事なチャームポイントがあ ツ!?!？」

未佳が「にゃんと」と唸って、

「さーやん、まさか、咄嗟に身を横に逸らして難を逃れるとは」

「逃れてないよ、大ダメージだよ！ ツインテールがサイドテールになっちゃったよ!？ 何てことしてくれるんだよ未佳ちゃん！」

「知らんわ！ 髪の毛の尻尾の一つや二つ、人間じゃないんやから、それくらい博士に頼めばすぐに直るやる！」

「未佳ちゃんは全然分かってない！ まだ物語の冒頭、いわゆるプ

ロローグってやつだよ!?　そこでメインヒロインの一人の髪型が変わっちゃうってマズいでしょ!　今後ボクは特に描写がない限り、サイドテール娘として勝手にイメージされるようになってっちゃうかもしれないんだよ!?　そしたら未佳ちゃん、どう責任取ってくれるのさ!」

「何の話やねん!」

ゆらりと立ち上がった沙耶は胸の前で両手を重ねる。

「もう怒ったぞ……許さないんだから……!」

沙耶の腕回りを螺旋状に炎が走り、重ねた掌を徐々に離してゆく。やがて螺旋の炎は掌の間に収束、大きさバレーボール程の火球を造り出す。

「ファイアーボール」

沙耶はそれを天井近くまで投げ、ジャンプし、

「スパアアイクツ!」

未佳に向かって思いっきり強打した。

「にゃう!」

襲い来る火球をサンダークロウで横に弾く未佳。行き場を失った火球はテレビに直撃し爆発、テレビ自体はもちろん、爆風でリビングの窓ガラスを全て、粉々に吹き飛ばす。

そんな中、奈美が自らの右腕を凍らせて、沙耶に突撃する。凍らせた右腕の先端は氷柱のように細く尖っており、さながら氷の槍のよう。

「我のことを忘れているぞ!」

「そんな攻撃、当たるもんか!」

素早い連続突きをかわして、沙耶はバックステップ、同じく右手の握り拳に炎を集め、剣を出現させる。

「ふん!」

「てえええい!」

氷の槍と炎の剣が交差し、水蒸気が噴出する。

一方の未佳は、二人が激しい剣戟を繰り広げる横で、両手に雷撃

を溜めている。雷撃は沙耶の造ったファイアーボールのように球形に変化。未佳は両手をキャノンの砲身のごとく突き出し、狙いを定める。

「余所見は……あかんで！」

雷球が発射され、それぞれ沙耶と奈美に迫る。

いち早く反応したのは奈美。舞を踊るように回避する。

「ぶっ、どうした。攻撃が止まって見える」

奈美が再び沙耶に視線を戻すと、沙耶は野球のバッターのように、炎の剣を構えていた。飛んで来た雷球をかつ飛ばし、軌道を奈美の方に曲げる。

「ぶっ！？」

加速のついた雷球に反応出来ず、奈美は顔面に直撃を喰らった。

沙耶は「わーっはっはっはっは！」と高笑いをして、

「ボクのことを忘れていたようだね。油断しちゃいけないよ？ 奈美ちゃん」

「けほっ、けほっ！ ……おのれ、貴様ら！」

咽せる奈美は、顔を真っ赤にして、怒鳴った。

「どこまでも我をコケにしおってからに……絶対に許さん……！ 表に出ろ！ 貴様ら二人、本気で叩き潰してくれろ！」

「別に構わないよボクは？ 未佳ちゃんにもツインテールをサイドテールにされた借りを返さなくちゃならないしね！」

「上等や！ 受けて立つで！ ウチかて胸のこと馬鹿にされて腹が立つとるんや！ 貧乳の腹いせに騒ぐ、誰かさんのせいだな！」

「貧乳ではなくスレンダーだと言っている！」

「奈美ちゃんってさ、いっつもそうやって現実逃避するよね！ クールじゃなくてむしろ格好悪いと思うよ、そういうの！」

「何だと！？ 沙耶、貴様、自分のことを棚に上げて、よくもぬけぬけと……！！ 貴様が何かしら問題を起こす度に苦労させられてるのは誰だと思っている！？」

「それは同感やな！ ウチらが喧嘩するのって、結局いつもさーや

んに原因があると思うで！ それをまるでウチらが悪いみたいと言
つて！」

「それは未佳ちゃんでしょ！ 他人事のフリばかりして、自分は傍
から見てるだけ！」

「もういつぺん言ってみいや！」

言い争いながら、三人の少女の体がそれぞれ光に包まれる。

その直後。

ドッコオオオンッ！！！！

我が家が木端微塵に吹き飛んだ。

屋根がなくなり、あらかた壊れてしまった家財道具の中、奇跡的
に残ったテールブルに朝日が降り注ぐ。近くの電線に留まっていた雀
が驚いて飛んで行く。

しかし、快晴のはずの青空は大きな影に遮られ、あまりよく見え
ない。

そこに、天を覆うように三体の巨大ロボットがそびえ立っていた
からだ。

それぞれ全長十五メートル程。何故こんな所に突然、三体もの巨
大ロボットが現れたのかと言えば、答えは簡単である。

「大体さ、奈美ちゃんと未佳ちゃんは文句ばかり言って、自分か
らは全然行動しないじゃないか！ だからボクが代わりに行動して
るんだよ！ 二人にいちいち文句言われる筋合いはないね！」

三体の内の一機、ピンク色を基調とした機体が言う。黄色いアイ
カメラが輝く頭部には、ツインタールを思わせる飛翔用のウイング
バインダーが二基付いており、名をスーパーロボット・サヤという。
そう、このスーパーロボットこそ、空風沙耶が巨大化した、彼女
の真の姿なのだ。

「我が行動する前に貴様が考えなしに行動するから、いつも失敗す
るのだろう！ 少しは学習したらどうなのだ！」

ライトブルーの機体、スーパーロボット・ナミが腕を組みながら怒鳴る。言うまでもなく海川奈美が巨大化した姿で、頭部にはポニールを彷彿とさせる巨大なブースターが装備されている。

「にゃー！ どうでもええわそんなこと！ 巨大化した以上、力と力で勝負しようやないか！」

陸花未佳が巨大化したレモンイエローのスーパーロボット・ミカが、両手を地面に着けて、四足歩行の猫のような構えをとる。リアアーマーに生えた尻尾と、頭部の猫の耳を模った排熱口が特徴的な機体だ。

「言われなくたって！」

「貴様らごときに負けるこのスーパーロボット・ナミではない！」

「フシャー！」

朝の住宅街のど真ん中で取っ組み合いを始めるスーパーロボット三人娘。

更に言うておくと、あるうことかこの三人娘、巨大化でさえまだ序の口に過ぎず、三体で合体して『サヤナミカ』という超巨大ロボになるというのだから、もはや驚きを通り越して、呆れのため息しか出ない。

「というか」

ちなみに俺は先刻からずっと、現リビングの跡地、奇跡的に残ったテーブルの席で、奇跡的に椅子に座ったままでいるのだが、もうそろそろ言わせて欲しい。

「お前ら、いい加減にしるおおお ツ！！！」

第一章 / さて、問題です

そもそも、『宇宙怪獣』という存在が現れたのは、今から二十七年前のこと。

ある日突然太陽系の外に現れた一匹の宇宙怪獣は、真つ直ぐに地球へと進攻して来た。

もちろん当時はまだ対宇宙怪獣組織である『地球防衛局』は存在していなくて、戦車やら戦闘機やら、従来の兵器はその宇宙怪獣に對し、全くと言っていい程無力だった。

飛行能力を持ち、マッハを超えるスピードで大空を飛び回る事が可能だった宇宙怪獣は、世界各地の主要都市に上陸しては暴れ回り、人類は一度、滅亡の危機に瀕した。

しかし、これまたとある科学者が一つの兵器を作り上げることに成功する。

それが、対宇宙怪獣用人型兵器『スーパーロボット』である。

やがて一匹の宇宙怪獣と、一機のスーパーロボットは、激突することとなる。ここ、東京で。

後に『第一次東京決戦』と呼ばれる、中学、高校共に歴史の教科書には当然のごとく載っている有名な戦い。……結果は、俺がこうしてスーパーロボット三人娘を押し付けられ、しょうもない日常を送っていることから分かる通り、人類が勝利して、今に至る。

とはいえ、決して宇宙怪獣が全滅したわけではなく。

「今日から合体練習を始めます」

雲一つない晴天の青空の下、地球防衛局東京第一支部敷地内の演習場にて、体育座りをしているジャージ姿の沙耶、奈美、未佳を見下ろしながら、俺は棒読みで宣言する。

「えー、日曜日なのー」

「面倒やわー」

「何故我がこんなことを……」

不満を漏らす三人を「黙らっしやい！」と一喝する。

「お前ら、天才高校生パイロットたる俺が、自宅を破壊されてまで、どうしてわざわざお前達の世話役なんかやっていると置いてやがる！」

未だサイドテールのままの沙耶が「はいはい！」と元氣よく手を挙げて、

「運命の赤い糸がボクと北斗くんを引き合わせたからだと思いまーす！」

「うん、それは良かったな。家に帰ったらハサミで切っというてやるから安心しろ、そのツインテールみたいにぶつつりと」

「満面の笑顔で酷いこと言われた！？」

続いて、未佳が手を挙げる。

「はい」

「よし、未佳。言ってみろ」

「ほーやん、どうしてウチらの服装、上下ジャージなん？ このシチュエーションなら普通、半袖とブルマにするもんやないの？」

「しねえよ！ 今時ブルマを採用してる学校がどこにあるんだよ！？ まるで俺がそういう趣味を持つてみたいに言っくんじゃねえ！

つーか、今してる話と全く関係ないし！」

未佳とのやりとりを見ていた奈美が「ふん」と冷たい目で俺を睨む。

「ただでさえ酷いと思っていたが、本当にどこまでも見下げた男だな。まさかうら若き乙女に上下ジャージを着せて愛でる趣味の持ち主だとは」

「言っつてねえよ！ 勝手に人の趣味をマニアックにすんな！ いいからお前らは人の質問に答えろっつーの！」

「貴様……！ つまりあれか、上下ジャージが好きなのではなく、上がジャージで、下はブルマという、いわゆるジャージブルマー派

……！」

沙耶が、ぱつと紅くした頬を両手で押さえつつ、

「北斗くんが望むなら、ボクは別にそれでも……！」

「違えええ　ッ！」

俺は、びしつと三人にそれぞれ人差し指を向ける。

「俺がつ、お前らのつ、面倒なんか見てんのはっ！」

遙か彼方までコンクリートの平面が続く演習場で、俺は声を大にして言う。大きくせずにはいられなかった。

「お前らが合体ロボの癖に、これまで一度も合体に成功していないからだろうがッ！！！」

どうしてこうなった。誰か教えて欲しい。

「まあまあ、北斗くん」

沙耶が偉そうに胸を張りつつ、親指で自分のことを指差し、ウインクをして、

「合体なんて出来なくても、ボク達サヤナミカの結束力さえあれば、どんな宇宙怪獣がやって来ても問題ないよ！」

「格好良さに言ってるけど、今朝家を破壊するくらい大喧嘩してたのは君達だからね!？」

全くもって説得力ゼロである。

と、そこで我に返る。……いかん、つい熱くなってしまった。いつの間にか、またこいつらのペースに乗せられている。俺は天才のはずだ。もつと冷静になるんだ。落ち着け、白坂北斗。

咳払いをして、俺は三人に向き直る。

「とにかく、今日は合体の練習をする。ほら、三人ともさっさとロボットの姿に変身しろ」

未だに「本当なら今日は、ボクと北斗くんの二人きりでデートのはずだったのに」やら「にゃー、今更合体練習したところで、ウチはどうなるもんでもないと思うんやけどなあ」やら「そもそも我は合体など性に合わん。各々に自主練した方がまだ効率が」やら、ぶつぶつと不満を口にする三人。

「いいから合体練習するの！」

「ぶー、分かったよう」

沙耶は口先を尖らせながらも、観念したのか、身体を薄いピンク

色の光で包み込み、片足を軸にして、くるりと一回転する。

「チェンジ、サヤ！ ロボットモード！」

片手を上げると同時にピンク色の光は濃さを増し、巨大化して、力強い直線と、女性的な曲線の入り混じった輪郭を描き出す。

やがて、光が弾け飛び、中からツインテールのスーパーロボットが姿を現した。

「変身完了！」

すると、サヤは膝を曲げて腰を屈ませ、俺を見下ろしてくる。

「ねえねえ、北斗くん」

「何だ？」

「前から一度聞いてみたかったんだけど、ボクのスーパーロボットの姿は……その……どうかな？ 思うことがあったら、言って欲しいなー、なんて……えへへ」

デートの際、彼女が彼女に対して「今日はちょっとオシャレしてみただけど」と自分の服を見せるように、ゆっくりと一回転する巨大ロボ。

とりあえず意見を求められたので、俺は率直に述べることにした。

「サヤ」

「う、うん！」

「お前のツインテール、スーパーロボットになると再生するんだな」「そこ!?!」

やりとりを見ていた奈美が「やれやれ」と首を横に振り、身体をライトブルーの光で包む。

「チェンジ、ナミ！ ロボットモード！」

「しゃーないにやあ、ウチもやったるわ。チェンジ、ミカ！ ロボットモード！」

続いて、美佳もレモンイエローの光を帯びて、スーパーロボットに変身する。

サヤ達が、スーパーロボットから小さな人間の姿 人型インターフェースへ、または人型インターフェースから巨大なスーパーロ

ボットへと自在に変身出来るのは、彼女達の身体を構成する『圧縮ナノマシン』によるものである。それが大きさを変え、パズルのように組み変わるにより、サイズを超越した姿を可能にしているのだ。

演習場に三色のスーパーボットが並んだのを確かめて、俺は地球防衛局の備品である拡声器を手に取り、電源を入れる。

『三体揃ったな。それじゃあ、これから合体の練習に入る。俺がこの腕を捲り、掲げて、手首に付けている機器を見せる。』

『SRコマンダーから合体許可を出したら、三体共、少女合体スタンバイ。以降はメモリー内マニュアルの手順に従って、各々に合体パーツへ変形、合体を開始。タイミングはこちらで指示を出す。いいな?』

「了解!」

「いつでもええぞー」

「いちいち説明しなくても分かっている。来い!」

ストレッチをして間接部の調子確かめる三体。一応合体ロボとしての自覚はあるらしく、気合は十分なようだ。これなら、今日はひよつとすると……。

『よし……行くぞ!』

SRコマンダーを構え、音声入力。

『合体許可!』

三体のアイカメラが発光し、それぞれ合体パーツへの変形を開始する。

「少女合体ッ!」

果たして、三人娘は合体した。

ただし、その結果が成功かどうかは別として。

「きゃー！ 見ないでー！ 北斗くん、ボク達を見ないでー！」
サヤが喚いている。

「なーやん、出だしが早過ぎや！ ほーやんがタイミングをちゃんと指示してたやろ!?」

「違う、貴様の出だしが遅いのだ！ 第一、あいつの指示など信用出来ん！ ええい、おかげで上半身に、変な風にくっ付いてしまっただではないか！」

ミカとナミはジョイントのタイミングについて揉めている。

演習場には、足が短く、上半身に合体パーツが偏り、胴体の膨れ上がったスーパーロボットが立っていた。

一応、合体失敗ながらも、サヤナミカと呼称すべきロボットなのだろうが……これは酷い。

世の中には、重装甲・重火力タイプのスーパーロボットももちろん存在するが、それはあくまで宇宙怪獣の苛烈な攻撃に耐える為の分厚い装甲と、一撃必殺で敵を粉砕する威力を持つ代わりに巨大な武装を付け加えた結果、必然的にボディが肥大化するのであって、このような贅肉の塊のごときメタポリック・フォルムと一緒にしてしまつては申し訳ない。

だから、目の前のメタボロボにあえて呼び名を付けるならば

『デブナミカだな』

『誰がデブだ貴様ッ!』

『せめてぽっちやり系って言うて!』

『ボクの名前が入ってない!』

当然のことながら、もう一度最初から合体のやり直しとなった。

『合体許可!』

『少女合体ッ!』

『……』

俺は頭を抱える。

目の前にはもはや人型とも言えない、六本の腕と六本の足が生えたムカデのような鉄の塊が、わさわさと蠢いていた。

「北斗くん見ちゃ駄目えええ！ お願いだから見ないでえええ！」
またしても沙耶が喚いている。

「一体何をどう間違ったらこんな風に合体するというのだ！ なんて無様な……ちよつ、こら、ミカ！ 私の足を勝手に動かすんじゃない！」

「どれが誰の腕で、どれが誰の足か分からないんやから、仕方ないやろ！ というか、それはウチの腕！」

ミカとナミは、どの腕と足が誰のもので揉めている。

俺は愚痴を零すように、眼前の合体ロボの名前を口にしていった。

『 ダメナミカだな 』

「駄目って言うな！」

「せめてキモ可愛いって言うて！」

「そしてボクの名前が入ってない！」

ダメナミカが何やらもがき出し、「早く合体解除してよ！ こんな姿、ボク恥ずかしいよ！」「うるさい、先程から何度もやっている！ 正規のジョイントじゃないから、パーツが引っ掛かって……！」
「な、なーやん、一人で勝手に動かんといて！ 足が絡まって……にやあぁっ!？」と滑って転ける。

情けなくて、俺は涙が出そうになった。

少しでも期待したのが間違いだっただ。そもそも簡単に合体出来るなら、一か月もの間、苦労していない。

今更ながら、どうして天才たる俺がこんな三人娘の面倒を看なくてはならないのかと、腹立たしさを覚える。

それもこれも全部

「おー、やってるやってる。どうかね、自称天才高校生パイロットの弟君。サヤナミカの調子は」

噂をすれば何とやらというか、現在の状況を招いた元凶の聲がして振り返ると、よれよれの白衣のポケットに両手をつ込み、美容

院に行かずに伸び放題の黒髪ストレートロングの女性が、こちらに歩いて来るところだった。

「調子？ 最悪に決まってるだろ、そんなもん。それと、自称じゃない」

拡声器を手にぶら下げ、皮肉を込めて答える。

彼女は「やれやれ」と首を横に振り、

「仮にも自分の姉に対して、ずいぶんと冷たいじゃないか。愛しの弟君がここで合体練習をしていると聞いたから、研究の疲れも溜まっている中、わざわざ足を運んだというのに。少しは労わってくれてもいいと思うのだがね」

「頼んでない。さっさと研究室に帰れ」

しっしっしと手の平で払う。

彼女の名前は、白坂南。不本意ながら、俺の姉である。歳は二十四で、俺より七つ上。スーパーロボットの研究と開発に携わっており、未だに疑いたくなる時があるが、そっち方面では世界的権威ということになっている。

「まあ、そう言うな。一応、サヤナミカの生みの親としては、途中経過がどうなっているのか気になるのだよ。君にあの子達を任せた責任もあるしね」

そう、それもこれも全部、この姉さんのせいだ。

騙されたのだ、俺は。スーパーロボット開発の世界的権威などという肩書きを安易に信用すべきじゃなかった。

「任せた、じゃなく、押し付けた、だろ？」

「おや、人聞きの悪いことを言う。弟君も同意の上で、あの子達を引き取ったんだらう？ たまたま前に乗ってたスーパーロボットがうんともすんとも言わなくなって、私がちょうど自身の開発したスーパーロボットのパイロットを探しているところだと声を掛けたら、あっさりと引き受けてくれたじゃないか。こうして丁寧に誓約書にサインまでして」

白衣の内側のポケットから、四つ折りにした誓約書を取り出して、

ひらひらとさせる姉さん。

俺がそれを奪い取るうとすると、「おっと」と素早く避けられてしまった。

「これは一応、大事な書類なのでね。いくら愛しの弟君であっても、そう簡単に手渡したり、見せたりは出来ないのだよ。内容が気になるなら、この場で改めて読み上げようか？」

姉さんは横目で誓約書を見つつ、

「えーと、どこから読もうか……ふむ、ここが重要だな。万が一、スーパーロボットに不備があったとしても、パイロットは開発者の許可なく契約を破棄することは出来ない。もしもこれを破った場合

—

妖しい光を湛えた瞳がこちらを向き、ニヤリと口元が歪む。

「パイロットは、今後永久にパイロット資格を失うものとする」
それこそが俺の、三人娘を手放せない理由となっていた。

思えば、前に乗っていたスーパーロボットも姉さんが開発したものであり、それが原因不明の故障で動かなくなった時点で、気付かなければならなかったのだ。最初から全部、この腹黒い姉によって仕組まれていたのである。

「……俺は今後、一切合切姉さんを信用しないからな」

睨み返してやると、姉さんは泣き崩れるように、その場に座り込む。

「ああ、何てこと！ 天国のお父さん、あなたの息子はついにグレてしまわれました！」

「誰のせいでグレたと思ってんだ！」

「昔はもっと可愛かったというのに。お姉ちゃん、お姉ちゃん、つて甘えに来てくれた記憶も、今となっては遙か昔」

「記憶を勝手に改変するんじゃない。逃げる俺をとつ捕まえて、無理矢理撫で回してたんだろつが。呼び方も最初から、姉さんだったぞ俺は」

「ああ、お父さん……お姉ちゃんはこんなにも弟君を愛していると

いうのに、どうして彼にはそれが伝わらないのでしょうか」

「その姉が弟を罫に嵌めやがったからです！」

姉さんは、キリツとした顔で立ち上がって、

「というわけで、今後は私をお姉ちゃんと呼んでくれたまえ」

「姉さん、人の話聞いてた!？」

「姉さんじゃない、お姉ちゃんだ。……今更思ったのだが、いつでも私の一存で、弟君から一方的に契約を破棄されたということにも出来るんだよなあ、これ」

「なっ……!」

再び取り出した誓約書をチラつかせる、髪伸び放題の悪魔。

「ひ、卑怯だぞ、姉さん！」

「駄目だ、全然駄目だ、弟君。姉さんという呼び方ではこれっぽっちも萌えないぞ」

「ぐ……!」

パイロット資格とプライドとが、俺の脳内で天秤に掛けられる。天秤はしばしの間、均衡を保っていたが……やがて、一方に傾く。

「お……」

「お？」

ニヤニヤとほくそ笑みながら先を促す姉さん。顔が熱くなる。

「お姉……ちゃん」

「萌ええええ！」

死にたくなつた。気持ちはブルーを遙かに通り越して、完全にブラックである。

「く、屈辱だ……」

「ふー、良いものを見た。まあ、サヤナミ力を合体させることが出来たら、色々と考えてあげなくもないので、頑張ってくれたまえよ、弟君。さて……おい、サヤ！例のモノを持って来たぞー！」

姉さんは、ようやく合体解除に成功したサヤ達へ向けて手を振る。

「あっ、博士！はいーい！」

人型インターフェースの姿に戻った沙耶が、こちらに駆けってくる。

俺は姉さんに視線を向けた。

「例のモノ？」

「ん？ ああ、これだ」

そう言つて、姉さんは懐からマヨネーズ容器らしき物を取り出す。しかし、中に詰まっているのはピンク色。容器に『イチゴ風味』と書かれたシールが貼つてある。

「何だそれ……ホイップクリーム？」

「残念だが、不正解だ。沙耶ー、こっち来ーい」

ちよいちよい、と手招きをする。

姉さんの前に立つた沙耶は、首を左に傾げるようにして、右頭を上方に向ける。

「ふんふんふんふーん」

すると、あるうことか姉さんは、鼻歌を奏でながらピンクのホイップクリームを絞り、沙耶の右頭にトッピングをし始めた。

「ちよつ、何やってんの！？」

「見て分かんかね」

「分からねえよ！ 沙耶の頭でケーキでも作る気か！？」

やがて、「ふむ、これ位でいいかな？」と姉さんはホイップクリームを盛るのを止める。

「うん、ありがとう博士！」

礼を言つてから、沙耶は傾げていた頭を戻して、ふるふると首を横に振る。

ホイップクリームが形を変え、ふわつとしたピンク色の長い髪の毛になる。気付けば、沙耶の髪型は元のツインテールに戻っていた。

「圧縮ナノマシン……？」

姉さんは頷き、

「その通りだ、弟君。損失分のナノマシンを新たに補充して修復したのさ」

「ほ・く・と・く・ん」

こちらに近付いて来た沙耶が、むふふと笑う。

「ケーキじゃないけど、ボクのこと、食べる？」

「誰が食つか！ つーかお前、イチゴ臭っ！」

沙耶に補充された圧縮ナノマシンは、本当にイチゴ風味であるらしかった。

まあ、要するにだ。スーパーロボット・サヤナミカは、上手く合体することが出来ない（及び人型インターフェースの性格にいささか問題がある）為に、誰もパイロットになりたがらず、結果、困った姉さんは身内の俺に連中を押し付けたわけである。

俺としては今すぐにもサヤナミカのパイロットを辞退したいところだが、姉さんにパイロット資格の剥奪を盾に取られている以上、それは出来ない。

つまり、俺がスーパーロボットパイロットとして生き残る為には、サヤナミカの合体を成功させるしか道はないのである。

「……って」

我に返ると、そこは地球防衛局の早手回しによってすっかり元通りになった白坂家の、二階ベランダ。

月曜日の朝、清々しい空気の中で、俺は洗濯物を干している途中だったのを思い出す。

そして、手に持っているのは、女物のぱんつ。

思わず、叫ぶ。

「何を平然と女物の下着なんか洗って干してるんだ俺はあああ

ッ！？」

しかも、割と無意識に。一ヶ月間続けている内に習慣化してしまっていた。

ベランダを一瞥する。およそ五分の三が女物の服で占められ、向こうから、ぱんつ、ぶらじゃー、ぱんつ、ぱんつ、ぶらじゃー……ぬおおおッ！

「駄目だ、早く何とかしないと、パイロットじゃなくて、ただの主夫になってしまおう！」

「ほーやん、おはよー」

振り向くと、パジャマ姿の未佳が「ふしゃああああ」と猫みたいなあくびをしながら、ベランダに出て来る。

「おはよー、じゃない！ さつさと制服に着替えて学校に行く準備しろ。遅刻するぞ。下に朝食を用意してあるから、沙耶を叩き起こして、先に食べてる。そろそろ奈美も自主トレから帰って来る頃のはずだ。あつ、それから味噌汁は温めてから食べるよ」

「にやー、分かった。ところでほーやん、これなんやけど……」

未佳は後ろ手に隠していたものを取り出す。それは、猫のイラストが描かれたぱんつとぶらじゃー！。未佳は「にやはは」と苦笑いをして、

「昨日、出すのを忘れてしもつて。ほーやん、悪いんやけど、ついでに洗つといてくれへん？」

「お前な……洗濯しなきゃいけない物は前日の内に出しとけて、いつも言ってるだろ！？ その内、着る物が無くなっても知らないからな！」

「まあまあ、そう怒らず」

いつの間にか俺の背後に回った未佳は、俺の頭に顎を寄せ、胸を押し付けて来る。

「熱い、重い、うつとおしい。……ったく、どうでもいいけど未佳、寝癖で頭、ライオンみたいになってるぞ」

ただでさえ癖っ毛の金髪は、爆発したみたいにボッサボサになっている。まるでライオンのたてがみのようだ、と思った。

「あれ、ほーやん知らへんの？ ライオンはネコ科なんやで？」

「だから何だ。いいから直して来い」

「ほーい」

未佳はベランダを後にして、ぱたぱたの廊下の方へ駆けて行く。やれやれである。さて、俺もさつさと洗濯物を干し終えて、下に

行くとしよう。そうだ、奈美は帰って来たらまず、制服に着替えるはずだから、その間に白米やら味噌汁を持ってテーブルの上に用意しておいてやるう

「……って、だから俺は主夫かつつの！」

と、そこで家の門前までランニングをして来た、奈美の青いジャージ姿が視界に入る。ポニーテールをゆっくりと上下させ、息を整えているところで、目が合った。

「……貴様」

まるで人類共通の敵でも見るかのような鋭い眼光に「何だよ？」と返すと、

「まさかジャージブルマー派の上に、巨乳フェチであったとは」

「は？」

俺は自分の手元を見た。猫柄のぱんつとぶらじゃー。……そっいえば、未佳の胸のサイズって何カップぐらいあるんだろうか？

奈美の眉間に皺が寄った。

「最低だな」

それだけ言っつて、奈美は門を開け、玄関の方へ歩いて行く。

「だ……誰が……」

ベランダの手摺りに身を乗り出して、叫ぶ。

「誰がお前のぱんつを毎日洗ってると思っつとるんじゃああああ！」

よりにもよって、何で女性タイプの人型インターフェイスが三人ものだろうか。

本来、そこまで高度なAI技術を持っていなかった人類が、スーパーロボットにいわゆる心というものを持たせることに成功したのは、内部に搭載されているエンジンに深く関係がある。

。 圧縮ナノマシン複合エネルギー発生機関、通称『ハートドライブ』十年前に起きた『第二次東京決戦』で、敵の宇宙怪獣『ディザス』

ター』の核として使われていたオリジナルを元にして、俺の姉、白坂南が完成させた技術である。

ハートドライブは、感情というものに反応して無尽蔵のエネルギーを生み出す半永久機関で、メモリとA.Iも兼任し、直結している。人間で言うところの脳と心臓が一緒になっているのである。

圧縮ナノマシンの技術は、ハートドライブの開発による副産物であったが、姉さんはこれを利用し、スーパーロボットの人型インターフェイス形態を作ろうを思いついた。

人型インターフェースの必要性は、ハートドライブの出力が感情によって変化することにある。人間と同じ生活をして、人間と同じ心を持つことが出来るようになれば、ハートドライブはより強い力を発揮することが出来るのではないかと姉さんは考えたのだ。

実際に、人型インターフェースへの形態変化を持ったスーパーロボットは、出力が大幅に上昇したというデータが幾つも出されており、現在では、スーパーロボットのほとんどが人型インターフェイスになることが出来る。

なるべく人間に近く、ということ、当然、人型インターフェイスにも性別が存在する。男性タイプと女性タイプの割合は大体半々くらい。

外見年齢というものもスーパーロボットごとに設定されており、二十代半ばという設定が多い。

だが、それにしただって、このサヤナミカはどうだ。

三人が三人とも女性タイプ、その上、外見年齢設定は全員十七歳ときた。

サヤナミカは、ハートドライブを積んだ機体同士で合体し、出力の増大を図るといふ新たな試みらしいが、何故に少女合体なのか。余りに疑問なので、ある時姉さんに尋ねてみたところ、

「え？ だつてその方が萌えるじゃん」

という答えが返ってきた。これがスーパーロボット開発の世界的権威の言葉なのだから、世の中色々と間違っていると思う。

そして、その割と適当な世界的権威のせいで、俺はここ一ヶ月、セーラー服の少女三人との登校を余儀なくされている。

姉さん曰く、ハートドライブはスーパーロボットの心であり、心を鍛えるには学校という場での勉強が打って付けとのことなのだが……。

「北斗くん、早く早く！ 学校に遅刻しちゃうよ！」

自宅の玄関で、スクールバッグを片手に、ぴよんぴよんと飛び跳ねて急かすセーラー服姿の沙耶。

「うっさい！ 誰のせいで遅刻しそうになってると思ってんだ！」

えーと、窓のカギは全部確認したし、ガス栓は閉じたし、テレビの電源も切ったし、炊飯器の予約も大丈夫と……」

指を折って数えながら確認する。よし、問題ない。

早足で玄関に向かい、スニーカーを履く。

「全く……沙耶、お前って奴は、せつかく俺が早く起きて、朝食作ってるのに、毎朝毎朝時間ギリギリまでベッドにへばり付きやがって」

いくら揺すっても「あー」とか「うー」とか「眠いー」とか言ってる起きないので、今朝も頭にチョップを喰らわして、目覚めさせてやったのだ。

沙耶は恥ずかしそうに「えへへ」と後頭を搔いて、

「いやー、ボクってほら、低血压だから」

「スーパーロボットに血圧の低いも高いも関係あるか！」

「えっ、じゃあボクが朝に弱いのは一体……！？」

「弛んでるだけだ、ただ単純に！」

月曜日の朝からこれでは、今週も先が思いやられる。

一ヶ月前の生活が、遙か昔のことのように思える。ちなみにその時の俺は、『セミハートドライブ』というパイロットの感情と直接リンクしてエネルギーを生み出す新型エンジンを使用した試作機、AI非搭載型のスーパーロボットに乗っており、基本的に一人の生活を送っていた。

いずれにしても、洗濯物を干している時にも思ったが、そろそろいい加減、今の状況を何とかしなくてはならないと思う。

家の外に出ると、沙耶と同じくセーラー服に身を包んだ、奈美と未佳が待っていた。玄関の鍵を閉めて、四人で高校へと歩き出す。

今朝の天気予報では、今日も一日晴れが続くようだった。空を見れば、雲は小さいのが疎らで、今が梅雨の時期であることを忘れさせるような、爽やかに澄んだ青が広がっている。五月晴れってやつだ。

「ここ一週間くらい、雨降らないね」

横を歩く沙耶が言う。

「ウチ的には、晴れが続いてくれるのは大助かりやわー」

後ろの未佳が口を開く。

「どうしてだ？」

俺が聞くと、未佳は自分の髪を指に巻き付けながら、

「ウチは癖っ毛やから、湿気があると、髪がうねりまくって整えるのに苦労するんや。全然直らなくて、これが大変で大変で」

「……お前ら、本当にスーパーロボットか？」

沙耶の低血圧も含めて。

一番先頭を歩いている奈美が、ちよつとだけ横目でこちらを見る。

「ふん、我は別に、梅雨は嫌いではないがな」

「それはまた何故に？」

と尋ねる俺に対し、奈美は前を向いたまま、

「何故って、風情があるではないか」

ずっこけそうになった。

「日本にしかない、四季折々の美しさの一つだろう。貴様にはそんなことも分からないのか？」

「お前ら、本当にスーパーロボットかッ!？」

「度々失礼な奴だな。我はスーパーロボット開発の世界的権威、白坂博士によって作られた、一級品のスーパーロボット・ナミだぞ」

嫌々ながらも、一ヶ月共に生活していれば気付くのだが、沙耶と

奈美と未佳は時折、人間よりも人間臭い言動をする。いや、時折ではなく、割と頻繁に。

この変な人間らしさを良い方向に持って行ければ、ハートドライブ出力はなかなかの数字を叩き出し、合体も成功に近付くのではないかと思うのだが…… 上手く行かず、というか現状を呪いながら行動せず、惰性で過ごし、一ヶ月が経過してしまった。

しかし、俺としては、これ以上立ち止まっているわけにはいかない。

意を決して、切り出す。

「三人共、歩きながらでいいから、聞いてくれるか」

「どうしたの、北斗くん？」

「にゃ？」

「何だ」

三人の視線がこちらに集まったのを確認してから、俺は告げる。

「昨日も言ったが、今後は本格的に合体練習に取り組んで行こうと思う。お前達も合体ロボットなら、ちゃんと合体出来るようになりたいはずだ。違うか？」

朝の通学路を沈黙が覆う。たとえ雰囲気が悪くなるうとも、決めた以上は、早い内に言っておこうと思った。

最初に口を開いたのは、奈美だった。

「……まるで、貴様なら我々を合体させられるかのような物言いだが、本当に出来るかとも思っているのか？」

「そのつもりだ」

目を見て答えると、奈美は「馬鹿馬鹿しい」と再び前に向き直る。

「ほーやん」

未佳がいつの間にか横に並んで、俺の制服の袖を掴んでいた。顔を見ると、それは何かを期待しているような表情で。

「ほーやんは、もしもウチらが合体に成功したら」

「別に……さ」

沙耶が、未佳の言葉を遮った。

「そんなに急ぐ必要はないんじゃないかって、ボクは思うんだけど……」

そこには、いつも通りの沙耶の表情があった。

「ボクは北斗くんと一緒にいられれば、それだけで幸せだよ。確かに合体ロボとして作られたからには、合体するのはボク達の夢だけど、北斗くんっていう素敵なパイロットと出会えて、一緒にいられるだけでも、今は十分に幸せなんだ」

屈託のない、太陽のような笑顔を浮かべる。

「ボク達はさ、これまでも他のパイロットに乗って貰ったことがあったけど、ボク達が合体出来ないとなると、あつという間に離れていっちゃった。不良品だとか、出来損ないだとか、散々に言われてきた。だけど、北斗くんだけは、呆れた顔をしながら一ヶ月も側に居てくれた。ボク達を馬鹿にしないで、ちゃんと面倒を看てくれた」

「沙耶、お前……」

まさか沙耶がそんなことを考えていたなんて、思いもしなかった。隙あらばスキンシップを迫って来るし、マイペースで、自由で、いつもふざけてばかりいて、悩みとか、辛いこととか、全く無縁なんじゃないかと思っていた。

考えれば、沙耶と奈美と未佳は、俺のもとに来るまでに、多くのパイロットにフラれて来たのだ。

「未佳ちゃんも奈美ちゃんも決して口には出さないけど、少なからず、北斗くんには感謝してるはずだよ。ね、未佳ちゃん、奈美ちゃん？」

沙耶が話を振ると、未佳は煮え切らない様子で、

「ウチは……確かに、感謝はしとるけど……」

一方の奈美は憤慨する。

「感謝だと！？ ふざけるな！ そいつは表面だけで、結局中身は他の奴らと同じに決まってる！」

奈美の言う通りだった。俺は他のパイロットと変わらない。

さっさと最低限のことだけをして、お前から離れて行くこととし

ている。

沙耶は悪戯をした後の子供のように、小さく舌を出す。

「うん、でもまあ、全部ボクの願望なんだけどね。ボクはただ、今が幸せだよってことを言いたかっただけ。北斗くんがボク達の合体練習をみてくれるっていうんだから、拒む理由はないよ」

「沙耶、俺は……」

何か言おうと思って、口を嚙む。多分、沙耶はいずれ俺が離れて行くことを分かっているのではなからうか。

だとしても、俺にはやらなければならないことがある。たとえば彼女達を裏切ることになるうとも、絶対に為さねばならないことが。

とりあえず、今日の放課後から練習を始めることを伝えようと思っただ。

ふと、後ろから車のクラクションがした。

「はーっはっはっはー！」

空気を読まない、聞き覚えのある笑い声がして、黒く長い車が横を通過し、十メートルくらい前で停車する。これまた見覚えのあるリムジンだった。

後部座席のドアが開いて、まず現れたのは、紫の髪をした無表情なメイドさん。中世的な整った顔立ちをしており、肌は色白、背は俺と同じくらいある長身の少女で、外見年齢設定は十七歳。

そう、俺は知っている。彼女もまたサヤナミカと同じように、スーパーロボットが変身した人型インターフェースであることを。

彼女は俺達の方を向いて、無表情のまま、ゆっくりと一瞥する。

やがて、頭を下げた。

「……どうも」

「あっ、どうも」

思わず、こちらも頭を下げる。

メイドさんはそうして挨拶を終えると、リムジンの後部座席の反対側へと歩いて行き、ドアを開ける。

「はーっはっはっはー！」

再び耳障りな笑い声がして、車内から、オールバックの男が革靴を鳴らしながら外に出てきた。何故かその口にはバラの造花が啜えられている。

近隣にある有名な私立高校の制服を着た彼は、メイドさんを連れてこちらに近付いて来た。

「いやはや、一ヶ月ぶりくらいかな、白坂？ どうにも元気がないようじゃないか」

「そっちは相変わらずみたいだな、京極」

こいつの名前は、京極霧夜という。同期のスーパーロボットパイロットで、家はスーパーロボット開発も含め、様々な産業に携わっている京極コンツェルン。彼はその御曹司なのだ。同期のせいからライバル視されていて、何かにつけて絡んで来る。

「まあ、僕は秀才だからね。君のような自称天才とは違って、一般庶民の悩みとは無縁の、優雅な暮らしをしているよ。おっと、自称じゃなかったっけ」

相変わらず、物言いもムカつく奴である。

「北斗くん。誰、この人？」

沙耶が小声で聞いてくるので、俺は「一応スーパーロボットパイロットだ」と教えてやった。

「おや？ ひよっとして、そこのお嬢さん達が、噂に聞いた君の新しいスーパーロボットかな？ これは驚きだな……確か、名前はサヤナミカだったか……そうだ、こちらで紹介しておこう、僕のスーパーロボット『ミストリア』だ。普段はミストと呼んでいる」

「……ミストと申します」

京極に紹介されたミストは、無表情のまま、もう一度頭を下げる。「ミストは三年前に我が京極コンツェルンの京極工業が開発したスーパーロボットで、現在までに三度のグレードアップを重ね、正式名称はミストリア四式。エンジンは、従来のハートドライブに改良を加えた出力強化型を使用している」

ミストは、じーっとこちらを眺めている。

「ロボット時の全長は四十メートル級の大型、重装甲だが、全身にバーニアを備え、出力強化型ハートドライブにより、機動力も優秀だ」

じーっ。

「もちろんパワーと火力も他の機体の比ではない。先日現れた宇宙怪獣は、巨体ながら、ミストが終始圧倒していた」

じーっ。

「とはいえ、機動力ではやはり他の高機動型のスーパーロボットに劣る。そこで重要なのが、ミストに搭載されているハートドライブの属性で……って、おい、ミスト！」

「……はい、何でしょう、マスター？」

「お前、また瞬きするのを忘れてるぞ！ 最低でも十秒に一回は瞬きしろと、あれほど注意しておいたじゃないか！」

「……あ、申し訳ありません。すっかり忘れていました。何しろ私、スーパーロボットなもので」

ぱちぱちと二度、瞬きをするミスト。

京極はそれを見届けてから、咳払いをする。

「とまあ、人型インターフェース時に若干のシステムバグがあるものの、それ以外は優秀なスーパーロボットなんだよ」

何となく、京極も京極で苦労しているんだなあ、と思った。

そんな俺の心を読んだのか、京極は不快そうな顔をして、啞えていたバラの造花をこちらに向ける。

「おい、白坂！ 何だ、その人を馬鹿にした目は！？」

「は？ いや、別に、馬鹿になんて……」

「大体、君は人のことを馬鹿にしている暇があるのかい！？ 聞いたよ、そのサヤナミカのパイロットになってからというもの、宇宙怪獣を一度も倒していないらしいじゃないか！」

「っ……！」

否定したいところだが、紛れもない事実であった。何度かサヤナミカと共に出撃しているものの、合体することが出来ず、力を出し

切れずに敗退を繰り返していた。

京極は、ふつと鼻で笑う。

「仮にも僕と同じく、弱冠十四歳の最年少パイロットとなった男がそんな様では、二度に渡って地球を救った英雄である君の父上も、さぞ悲しんでいることだろうね！ それともあれかな、君の父上は、実はそこまで大したことない、スーパーロボットパイロットだったってことかな？」

「なっ……親父とは関係ないだろう！」

「さて、どうだか！ 蛙の子は蛙とも言うからね。結局、第一次、第二次東京決戦の英雄は死んでしまった。たまたまスーパーロボットに乗って、たまたま敵の宇宙怪獣と相打ちになったパイロットが英雄と呼ばれてるだけじゃないか。違うかい？ というか今現在、君は一体何をしてるんだ。そんな」

京極は沙耶、奈美、未佳を指差し、

「ろくに合体も出来やしない出来損ないの不良品共と、何を悠長に遊んでいるんだ？」

自分でも一瞬、何をしているのか良く分からなかった。

気付いた時には、京極の制服のネクタイを引つ掴み、思いつきり引き寄せていた。

至近距離で睨み付けると、京極も引かずに睨み返して来る。

「っ……何を怒っているんだ、君は。親のことを馬鹿にされて腹が立つたのかい？ それとも……」

自分でもらしくないと思ったし、何でこんなに腹が立つのか、自分でもよく分からない。

不意に、ガツと手首を掴まれて、捻り上げられる。横に視線をやると、ミストが瞬きをせず、無感情な瞳に俺を映していた。

「……どんな理由があろうと、マスターへの暴力は許容出来ません」「離せ」

「出来ません。何しろ私、スーパーロボットなもので」

無理矢理それを引き剥がそうすると、「北斗くん！」「ほーやん

！」「落ち着け、馬鹿者！」と、沙耶、未佳、奈美の声が後ろからして、羽交い締めにされる。

俺は三人を睨んだ。

「お前らは悔しくないのかよ……！」

「え……？」

未佳が戸惑いを浮かべる。

「出来損ないの不良品って言われて、悔しくはないのかって聞いてんだよ！」

沙耶が首を横に振る。

「別に……悔しくなんか無い！ ボク達には今、北斗くんっていうパイロットがいてくれるから！」

奈美は何も言わない。ただ、顔を背ける。

俺の拳に何故だか力が入る。拳だけじゃない。全身の筋肉が震えていた。

悔しくない……だと？ 存在を否定されたんだぞ。スーパーロボットとして生まれて来たのに、出来損ない、不良品って言われたんだぞ。ロボットにとって、これ以上のない屈辱のはずだ。悔しくないはずがない。

何より

「ぶざけんなッ！！ 俺が悔しいわ馬鹿たれッ！！！」

頭の中で何か切れる感覚と共に、羽交い絞めを振り解き、気付けば思いっきり怒鳴っていた。

「ここまで馬鹿にされて何黙ってたんだ、アホか！ ああ、別にいいさ！ 自分達だけが傷付いても我慢するってんなら俺は一向に構わん！ 好きにすればいい！ けどな！ お前らは大きな勘違いをしている！ さて問題ですチャラッチャラッ！ お前らが何を勘違いしてんだか言ってみろ、まずは未佳！」

金髪癖っ毛の少女を指差す。

「えっ……あっ……えっと……！」

「はい、タイムアップ！ 次は奈美！」

指を向けられて、驚いたように瞳を見開くライトブルーのポニーテール少女。

「タイムアップ！ はい、次！ 答える沙耶！」

最後に指名されたピンクツインテールの少女は、声を震わせながら言う。

「ほ、北斗くんがボク達のことを思って……！」

「違あああうッ……！」

俺は指差していた手を、勢いよく横に振った。

「お前らの勘違いはな！ お前らは自分達のことばかりで、俺のことを何一つ考えちゃいないってことだ！ お前らは一体何だ！？ スーパーロボットだろ！ スーパーロボットは一人で戦うのか！？ 違うだろ、パイロットも一緒だろうが！ 俺が何の為に今までお前らと一ヶ月も生活して来たと思ってるんだ！ それは俺が、お前らのパイロットだからだろうがッ……！！ お前らが馬鹿にされるってことはすなわち、俺が馬鹿にされてると同じことなんだよ！ 分かったかッ……！！」

あー、喉が痛い。

でも、自分の口から言葉にしたことで、俺は理解する。

少なくとも俺は、一ヶ月の間、サヤナミカのパイロットを続けてきた。一応、俺のスーパーロボットだ。

それが他人に馬鹿にされるのは、俺には決して許すことが出来ない。

だから。

「さて再び問題ですチャラッチャラッ！ 京極霧夜ッ……！」

俺は、オールバックの男と無表情のメイドの方へ向き直る。

人差し指を向けて、言った。

「俺はこれからお前に、一体何を申し込むつもりでしょうか？」
問題その二、解答。

スーパーロボット同士での決闘。

第二章 / ミルクたっぷりカフェオーレ・前編

おそらく本人は覚えていないだろうけど、ボクは一年前、彼に出会っている。

あの日のことは、今でもよく覚えている。というか、これからもずっと、絶対に忘れない。ボクにとってはキラキラ輝く、宝物のよくな記憶。

場所は何でもない、地球防衛局の廊下だった。それは、一番最初のパイロットに契約解消を切り出された日で、ボクのハートドライブの中は、色んな気持ちでぐちゃぐちゃになっていた。

初めて涙というものを流したのも、その時が初めてだったと思う。感情が制御出来なくて、今までの自分というものがどこかに行ってしまったかのようにだった。

未佳ちゃんも奈美ちゃんは、パイロットの言葉を聞くなり、何処かへ行ってしまった。だけど多分、ボクと同じ、どうしようもなく暗い気持ちになっていたんじゃないかなと思う。

それまでは、世界はいつだって楽しいものだと思っていた。自分達は立派なスーパーロボットになって、有名になって、名機として後世に語り継がれて行くんだという夢を抱いていた。

しかし、現実は厳しくて、どう頑張ってもサヤナミカへの合体は出来ないし、単機のハートドライブ出力も並以下。おかげでパイロットには、不良品とすら言われてしまった。

ああ、絶望ってこういうことなんだなあ、と膝を抱えて廊下の隅にうずくまり、絶え間なく込み上げてくる涙に、唇を噛み締めていた。

そんな時だ、彼が声を掛けて来たのは。

「どうした、何泣いてるんだ？」

顔を上げると、一人の少年が立っていた。パイロットスーツを着た、やたら大人びた印象を受ける少年。

ボクは慌てて目元を拭う。

「別に、何も」

「泣いてるのに、何もないってことはないだろ。それともあれか、泣いてる理由を知られるのが恥ずかしいってやつか」

「恥ずかしくない人がいるわけないじゃん！」

何を当然のことを言っているのか、彼は。そんなのスーパーロボットのボクでも分かる。

彼は手の平で払う仕草をして、

「だったら、廊下なんかで泣いてないで、家に帰ってから泣け。こんな所で泣いてるのは誰かに構って下さいつて言ってるようなもんだ。で、お前はどっちだ。構って欲しいのか、そうじゃないのか」
ぼん、と頭の上に手を置かれる。

それが無性に暖かくて、優しくて、我慢しているのに勝手に目から涙がぼろぼろと溢れてきて、気付くと嗚咽混じりに口が動いていた。

「ぶえええええ、がまつでございっつ！！！！」

「あー、分かった。分かったから、とりあえず涙と鼻水を拭け」

その後、夜の闇に包まれた屋外に出て、地球防衛局の敷地内にある公園に場所を移し、ボク達はそこにあるベンチに腰掛けた。

「ほれ」

公園内の自動販売機で買ってきたらしい『ミルクたっぷりカフェオーレ』と書かれた缶ジュースを手渡される。とつても温かった。

「あ、ありがとう」

ボクはそこで彼に色々なことを話した。

自分がスーパーロボットであること（何故か凄く驚かれた）、自分が合体ロボで、なかなか合体出来ないこと（これまた凄く驚かれた）、それが原因で、パイロットに契約解消を言い渡されてしまったこと。

「それで、これからボク、どうしたらいいのか分からなくて」

彼は特に悩む様子もなく、

「合体出来るまで、ひたすら練習したらいいじゃないか」

「なっ……練習しても出来ないから困ってるんじゃないか！」

「それでも出来ないってことは、まだ練習が足りないってことだろ。そんなもん、出来ない奴の言い訳だ。世の中には必死に努力して出来るようになった奴が一杯いる。出来ないから努力したくないと思っような目標なら、そんなの叶える価値なんてない。さっさと諦めちまえ」

ボクは彼を見上げる。決して、「冗談を言っている顔ではなかった。彼は本心からそう思っているのだ。

「君は……目標とかあるの？」

「ああ、あるぞ。俺はその目標を叶える為なら、他人に才能がないと言われても、不可能だと言われても、絶対に諦めない。努力をし続けて、いつか必ず叶えてみせる。それが俺の、心に決めた生き方だ」

本当に真っ直ぐな瞳をした少年だった。ボクは、こんな人が自分達のパイロットになってくれたら、どんなにいいだろうと思った。

「ボクにも……出来るかなあ？」

「そんな目で見られても、無責任なことは俺には言えないぞ。それに俺は別に、お前のパイロットってわけでもないしな」

「うん……」

さっき会ったばかりだけど、そう言われると、何だか凄く寂しい気持ちになった。

「でもまあ、パイロットじゃなくても言えることはあるか」

しかし、不思議なのは、次の彼の言葉でそんな気持ちも一気に吹き飛んでしまったこと。

「絶対に、諦めるなよ」

「……うん！」

これが『恋』なんだってことを知るのには、それから少し後になる。

俺は今、地球防衛局東京第一支部の司令執務室にいる。

普段はほとんど、というか、全くと言っていい程来ない。三年前、初めてスーパーロボットパイロットになった時とかに来たぐらいである。

たとえ目の前にいるのが、昔から付き合いのある姉の親友であったとしても、場所が場所だけにやはり緊張する。

「つまり、サヤナミカとミストリアによる、一対一の戦闘演習を行いたいわけね」

司令・羽柱鈴音さんは最初俺に、次に横にいる京極へと視線を移す。

二十四歳という年齢以上に落ち着きのある女性で、栗色の髪を三つ編みにして、肩に流している。ほわんとした雰囲気を漂わせている美人だが、決してその外見に騙されてはいけない。若くして司令をやっているだけあって、宇宙怪獣襲来などの非常時は、別人のように怖い人になるのだ。

いや、嘘を言った。普段も割と怖い。個人的なランキングで、怒らせたくない人物ナンバーワンである。俺は普段からだらしない姉さんに怒られたことはないが、この人には散々怒られた覚えがある。

今の緊張は、そうやって脳内に刷り込まれた恐怖も関係していた。「はい……」

あれから冷静になって頭を冷やした俺は、勢いそのまま京極に掴み掛かったことを後悔し始めていたので、控え目に返事をする。

もしも駄目だと言われたら、別にそのまま無しになってしまっても構わなかった。というか、むしろ無しの方向で。

「霧夜くんは、戦闘演習に異論はないかしら？」

「ありません。むしろ歓迎してるくらいです。同期のパイロット同士とはいえ、こういう機会はあまりありませんから」

横目で俺を見て、ニヤリと口の端を吊り上げる京極。

鈴音さんは「そう」と目を瞑り、左手の親指で、自らの下唇をなぞる。いつもの考え込む時のポーズである。

やがて、微笑んで、

「分かったわ。サヤナミカとミストリア、二体のスーパーロボット同士による戦闘演習を認めます」

最悪だった。いや、今朝の通学路で京極と出くわした時点で、運命は決まっていたのかもしれない。

鈴音さんは机の中から『演習許可証』と印刷された書類を二枚取り出し、胸ポケットから万年筆を抜いて、さらさらと文字を書き連ねて行く。

「それで、演習の期日はどうする？ もう決めてあるのかしら？」

「えーと……」

オールバック男の様子を窺うと、奴は白い歯を覗かせる。

「僕は今すぐにも構いませんけどね。ただ、白坂にも色々事情があるでしょうし」

今すぐだとマズい。凄くマズい。

せめてサヤナミカと作戦を練ってからでないと、まず勝ち目がない。

鈴音さんは、くすくすと笑う。

ああ、笑顔が怖い。

「幾らなんでも、今すぐは無理よ。演習場の準備があるもの。そうね……二人は学生だから平日は避けた方がいいんじゃない？ 北斗くん、サヤナミカの皆も学校に通っているんでしょう？」

「え、ええ、そうですね。出来たら日曜日とかの方が……」

嫌な汗がこめかみを伝って、顎から零れ落ちる。

「だったら、今週の日曜日とかどうかしら。今から六日もあれば、準備も出来るでしょう？」

「じ、じゃあ、それでお願いします」

「霧夜くんもそれでいいかしら？」

「今すぐに出来ないのは残念ですが、致し方ないですね。僕もそれ

で構いませんよ」

「分かりました。じゃあ、期日は五月十六日、今週の日曜日っとはい、二人とも」

鈴音さんから演習許可証を渡される。

手を振り、「頑張っつね」と言う彼女を背にして（俺は身震いをして）、京極と共に司令執務室を後にした。

「それじゃ、あと六日間、せいぜい足掻くんだな、白坂」

「く……！」

京極が革靴を鳴らして、一足先に廊下を歩き、去って行く。

こうして正式に、俺と京極、サヤナミカとミストリアの決闘が決まったのだった。

「だからあの時、落ち着けと言ったのだ。この馬鹿者が」

午後六時。白坂家の二階、自分の部屋で胡座をかく俺の心に、奈美の鋭い視線と言葉がグサリと突き刺さる。

「うぐ……！」

「何が天才だ、すぐ頭に血を上らせおつて。カルシウムが足りてないんじゃないのか？ しかも、自分のことならまだしも、我々のことでわざわざ掴み掛かりおつてからに。誰も貴様に助けを頼んでないわ。勘違いも甚だしい」

グサツ、グサグサツ。

「加えて、あのキザなオールバックに決闘なんぞを申し込みおつて。なんで我々が決闘などをせねばならんだ。全く、面倒なことをしてくれる。どちらかと言えば、我が貴様に決闘を申し込みたいところだ」

部屋の壁に寄り掛かりながら、肩に掛かったライトブルーのポニーテールを、背中の方に退ける奈美。

駄目だ、言い返せない。自分が彼女の立場なら、おそらく同じこ

とを口にしているだろう。

「すまん、確かに今回の決闘は、俺の勝手が招いた事態だ……」

「そんなことぬわああーいッ！……」

「うおっ！？」

驚いて後退さる。大声を上げたのは沙耶であった。俺のベッドの上で、ぎゅううつと枕を抱き締めながら力説する。

「ちよっ、綿が出る綿が出る！」

「ボクはむしろ感動したよ！ 北斗くんがボクらを守るためにキザなオールバツクの前に立ちはだかつて」

俺の真似のつもりなのか、悩ましげに髪を掻き上げるポーズを取る沙耶。声に変な溜めまで付けて、

「ここまで馬鹿にされて何黙ってたんだあ、沙耶！ ああ、別にいいさあ！ 君だけが傷付いても堪えるというなら俺は一向に構わぬあい！ 好きにすればうい！ だけどぬあ！ 君は大きな勘違いをしているううう！」

ぱつと自身の体を両手で抱き締める。

「君の勘違いはあ！ 君は自分のことばかりでえ、俺のことを何一つ考えちゃいないってことどうあ！ 君は一体何だあ！？ 俺の愛するたった一人の女だろお！ 君は一人で戦うのくわあ！？ 違うだろお、俺も一緒だろうがあ！ 俺が何の為に今まで君と一ヶ月も生活して来たと思ってるんどうあ！ それは俺があ、君と結婚する為じゃないくわああッ！！ 君が俺を愛してくれているようにいいい、俺も君を愛しているよおおお！ 沙耶あッ！！！」

「いや、言ってるええし！ つーか、何か色々と改変されてるんだけどー！？」

「うん、ボクも愛してるよ、北斗くん」

「俺は愛してないっ！」

沙耶は両手で自分の頬を押さえて、ぶんぶんと身体を左右に振る。

「もあー！ 北斗くんたら、照れ屋さんなんだからあ！」

「……沙耶は今夜の晩御飯抜き」

「ええええっ!? 何で!?!」

「人をおちよくるからだ!」

ベッドの上を転がり、「しまったあー!」と喚く沙耶を無視して、俺は視線を下にやる。

「で、未佳。お前はさつきからずっと、何をやってるんだ?」

そこには、ベッドの下の空間に上半身をまるごと突っ込んでいる金髪少女が一人。遠目に見ると、まるでベッドに食われているかのような図である。

「にゃー? そりゃあ、ほーやん、男子高校生の部屋に入ってますやることと言ったら」

右手が外に出て来て、グッと親指を立てる。

「えっちな本の搜索に決まっとるやないかつ」

すぐさま足首を掴んで、彼女を引っこ抜いた。

「んなもんあるか! 百歩譲ってもベッドの下なんていうベタなところに隠したりしない!」

床にうつ伏せの未佳は、顎を擦りながら、首を捻る。

「だとすると、押入れの奥のダンボールか、辞書の外箱の中、いや、机の引き出しが二重底になっているという可能性も……」

「だから、ねえっつーの!」

聞いていた奈美が、下らないと言わんばかりに首を横に振り、ため息を吐いた。

基本的に俺は、彼女に嫌われているが、こういう所では結構意見が合うと思っている。

本当、全くもって下らないよな。エロ本探しなんて。それなのに、未佳と来たら。

ふと、奈美はおもむろに壁から背を離す。俺の前を横切って、本棚の前に向かった……って、あれ?

そこから英和・和英辞書を抜き取る奈美。中身を確認してから、切れ長の瞳を細めた。

「……よく探すのだ未佳。健全な男子高校生の部屋にそういう類の

本が無いなどということは、まずあり得ない。どこかに必ず、ジャーズブルマーの少女が表紙の、十八という数字が書かれた本があるはず！」

「奈美まで!? つーか、そのネタまだ引つ張るの!? ねえよ、ジャーズブルマーなんてマニアックな本は! 俺が持つてるのはもつと普通の」

はつとなつて口を押さえる。だが、時既に遅し。

三人娘が、じーっとこちらを見ていた。

奈美は持っていた辞書を閉じ、外箱に入れて、元の本棚に戻す。

「沙耶……。未佳……」

切れ長の瞳を、かつと見開いた。

「探せッ! あるぞ! この部屋にはそういう類の本がッ!!!!」

「了解だよ、奈美ちゃん!」

「今こそ、ほーやんの性癖を明かす時!」

我先にと飛び出し、一斉に俺の部屋を荒らし始める三人娘。

「ちよつ、止めるおおお! ないっ! そんな本はどこにもないいいッ!!!!」

合体は出来ないのに、何故こんな時だけチームワークがいいのか。俺は床に数冊の本を叩き付けるように置いて、音を立てる。

「ええい! お前ら、注目!」

奈美が眉間に皺を寄せる。

「何だそれは。そういう類の本か?」

「違う! これはお前らのマニキュアルだ! 取説! 取扱説明書!

俺はそもそも京極と決闘するに当たつて、どうするか作戦を練る為に、お前らを部屋に呼んだの! 断じてそういう類の本を搜索させる為じゃない! 三人共、こっちに集まって座れ!」

沙耶が不満そうに口先を尖らせる。

「えー」

「えー、じゃない! ほれ、未佳も!」

「もう少し……もう少しなんや……! あとちよつと手を伸ばせば、

男のロマンに……!!」

「届かんでいい!」

「にゃー!?!」

押入れを漁っている未佳の首根っこを掴んで、マニュアルの所へ連れて行く。

三人が座つたのを見届けてから、俺は一度深呼吸をし、話を始めた。

「気を取り直して、決闘の件だが、行われる日は五月十六日で、今週の日曜日。場所は地球防衛局第一支部敷地内の演習場。俺のせいでこうなつたとはいえ、決まつた以上は逃げずに戦おうと考えてる。えっと……その……三人共、協力してくれるか?」

さっさと離れて行こうとしている癖に、こういう時だけ協力を頼むのは、虫がいいと分かっている。何とも情けない図であると思う。

こいつらが来てからというもの、俺の中にある、一定のリズムで回り続けていた歯車みたいなものが、どんどんとズレていつている気がする。俺はどうしても、天才であり続けなければならないというのに。

沙耶はいつもの笑顔で頷く。

「ボクは、北斗くんが、馬鹿にされたボクらの為に怒ってくれて、とっても嬉しかったんだ。だから、北斗くんがボクらの為に申し込んだ決闘なら、もちろん協力するよ!」

どうして彼女がここまで俺に信頼を寄せられるのかが分からない。分からないが、今はそれでもありがたい。

未佳は悩んでいるようだったが、横目で沙耶を眺めつつ、頷く。

「まあ、ウチは、さーやんが協力するって言うんなら……」

そして奈美は、やはりというか、まともに俺と目を合わせようともしない。

「ふん、冗談じゃない。貴様の失態なのだから、貴様自身で何とかしたらどうなのだ」

「でも、奈美ちゃんだって、北斗くんが怒ってくれたことは別に嫌

「じゃなかったよね？」

「そう言ったのは、沙耶だった。」

「ボクは、色んなパイロットに馬鹿にされ続けて、悔しいって感情を押し込めることに慣れちゃったと思う。だけど、北斗くんが代わりに怒ってくれた時、ボクもやっぱり悔しいって思えたよ。奈美ちゃんもそういう風に感じなかった？」

「眉間に皺を寄せ、奈美は不快そうな表情を浮かべる。」

「我を貴様らと一緒にするな！ 我は一度だって、馬鹿にされて悔しくなかったことなどない！ ただ、馬鹿にされたからといって、見苦しくその場で言い返すのではなく、実際に成果を上げて見返してやろうと思ったただけだ！ 我は、白坂博士に生み出されたスーパーロボットとしての誇りを、決して失ったりはしない……！」

強く拳を握り締める奈美。ハートドライブで氷を操る彼女だが、その瞳には静かに燃える、蒼い炎が宿っている気がした。

それを見て、俺は思わず口を開いていた。

「奈美。京極との決闘で勝つことは、成果を上げることにはならないのか？」

「何だと？」

「京極はムカつく奴だが、パイロットとしての腕は本物だ。ミストリアも強い。宇宙怪獣に後れをとったなんて話は、今まで聞いたことがない。演習とはいえ、ミストリアに戦って勝てば、皆に実力を示すことが出来る。」

「だが、所詮は演習だ。スーパーロボットの本分は、宇宙怪獣と戦うこと。実践で勝てなければ何の意味も成さん！」

「ミストリアは、常に最新の技術を取り入れてグレードアップを重ねているとはいえ、三年前から数多の宇宙怪獣を倒してきた猛者だ。そのミストリアに勝って、実践で宇宙怪獣を倒せないはずがない」

「っ……！」
奈美は押し黙る。

自分勝手だと分かっている。今回のことは俺が引き起こしたので

あつて、奈美が協力を拒否するのは予想が出来ていた。もしも奈美が決闘をしないというのなら、別にそれでもよかった。彼女を引き留める権利は、俺にはない。

けれど今、何故だか分からないが、俺は奈美に協力して欲しいと思っている。京極に掴み掛かった時のような熱い何かが、胸に込み上げて来ている。

奈美の眉間には、未だ皺が寄つたまま。しかし、不快そうな表情が消え、真意を見極めんとする顔になる。

「……勝算は、あるのか？」

「俺は、奈美が俺を認めないのと同じように、お前らを自分のスーパーロボットとして認めたくはない」

奈美の眉がぴくりと動く。

俺は続ける。

「ただ俺は、お前らが本気を出せば、合体しなくても、それぞれミストリアなんて匹敵するくらいのハートドライブ出力を発揮出来ると思っっている。いや、信じている。一人のスーパーロボットパイロットとして、誓って、真剣に」

ハートドライブの技術が出来てから、ロボットのAIは人間に限りなく近いものへと進化したが、その中でもサヤナミカは異常だと、個人的には感じている。

俺はサヤナミカを押し付けられるまでは、姉さんの開発したAI非搭載型のスーパーロボットに乗っていた。けれど、三年もパイロットを続けていれば、他のパイロットや、パートナーの人型インターフェースに接する機会も多い。

彼等は全員、サヤナミカとはどこが違う。何が違うのかは、具体的に言い表せない。ただ、会話を交わしていると、やはりロボットなのだと思える。

しかし、サヤナミカはそうじゃなかった。一ヶ月も一緒に生活した今だからこそ普通に思えるが、初めてサヤナミカに出会った時は驚いたものである。言われるまで、完全に人間だと信じ切っていた。

それほどに、変な所で人間染みている。

奈美はしばし、俺を睨み付ける。

「……よかるう」

やがて、鼻先に人差し指を突き付けて来た。

「ただし！ もしも途中で貴様に従う価値がないと判断したならば、我は即刻で協力を取り止める！ そのことを決して忘れるな！」

「分かった。それで構わない」

「ふん、口では何とでも言える。分かったならば、言葉ではなく、さっさと行動で示せ」

床に置かれたマニユアルの前で正座をし、両膝に手を置くポニテールの少女。

ここまで来たら、俺も退けない。

俺は頷いてから、マニユアルのページを開く。

「京極との決闘に当たって、作戦は二段構えで行こうと思っている。まずは――」

避けられない決闘なら、真正面から戦って勝ってやるうと思った。

俺は天才なのだ。逃げも隠れもしない。

心の内の冷静な自分に、そう言い聞かせた。

練習は翌日の放課後から開始した。

学校帰りに直接、地球防衛局東京第一支部に向かって、演習場で拡声器を片手に指示を飛ばす。

『ナミ、出だしが早い！ サヤとミカにタイミングを合わせろ！ 合体は単機で行うものじゃない！ ミカは空中で素早く変形を行ってから、サヤが胴体パーツに変形するまで高度を維持！ サヤはもっと素早く正確に変形しろ！ お前が上手く出来ないと、後続の二機もジョイントのタイミングを見誤るんだぞ！ 頭で理解するんじゃない、身体で覚える！ 駄目だ、駄目！ もう一回最初から行く』

ぞ ツ!!!」

この日の三人娘は、文句も言わず、俺の指示に合わせて真面目に練習を続けていた。

三色の機影が、空中でシルエットを変化させては、重なり合い、離れるのを繰り返している。

俺は拡声器から一時的に口を遠ざけると、横で栄養ドリンクを飲みながらノートパソコンのモニターを眺めている、黒髪伸び放題の白衣の女性を呼ぶ。

「姉さん！ 三機のハートドライブ出力は？」

「んー、以前のデータより上がってるのは驚きだが、まだ一般スーパーロボットの平均以下だね」

「上がってはいるんだな？」

「ああ、成長してる成長してる。さすがは愛しの弟君だよ。自称天才と名乗るだけはある」

再び拡声器を使って叫ぶ。

『自称じゃなあーいッ！ ……よし、サヤ、ナミ、ミカ！ ひとまず十分休憩ー！』

「えー、十分だけー!?」「めっちゃ疲れたあー!」「おのれ、人が黙って言うことを聞いていれば、調子に乗りおつて……!」

緊張が弛むと、途端に不満を洩らし始める三機に、喝を入れる。

『うっさい！ 今日を入れて決闘まで後五日しかないんだから文句を言うな！ とにかく十分！ 異議は認めん!』

俺が声を上げている場所から距離を開けた演習場の中央、コンクリートの上で、ブーイングをしながら仰向けに寝転んだり、しゃがみ込んだりするスーパーロボット達。

それを見ながら俺は、顎を擦る。

「おかしい……」

何だろつか。悪くはないが、出力の伸びの短さが引っ掛かる。何か心に迷いでもあるというのか。

姉さんが楽しそうに口元を歪めた。

「それにしても、弟君、意外と熱血なんだね。お姉ちゃんは今日まで知らなかったよ」

「なっ……熱血う!？」

自分が目指しているイメージと余りにもかけ離れていて、凄く嫌な言葉だった。それが露骨に顔に現れたようで、

「そんな道端で偶然ツチノコと出会ってしまった時のような顔をしないでいいじゃないか。しかし、最初は勢いで決闘を申し込んでしまったと後悔していたのに、一夜明けて見れば、今度は無性にやる気と来た。これが熱血じゃなくて、他に何だと言うのかね？」

昨日の朝、通学路で京極に掴み掛かった後、真っ先に連絡したのが姉さんであった。一応、サヤナミカの開発者で、俺のパイロット権を握っている相手でもあるので、連絡しないわけにはいかない。

……っか、道端で偶然ツチノコと出会ってしまった時の顔って、どんな顔!？」

「今度は突然、頬つぺたをマッサージし出してどうしたんだね、弟君？ これは別に悪い意味じゃないが、どうやら最近、色々、心というか、スタンスが揺れているようだね？」

「別に……仕方ないだろ、想定外のことばかりが起こるんだから。姉さんに騙されて、あいつらを押し付けられてから、トラブル続きで、怒りっぱくなるし。おかげで京極と決闘まですることになっちゃうし。自分でも色々混乱してるんだよ。大体、元はと言えば姉さんが」

「はいはい、分かってる分かってる」

まるで全てを理解したかのような笑顔で、ばんばんと背中を叩いて来る。痛い。そして、絶対に分かってない。

「まあ、若いんだから、心やら考え方が揺れるのは当然のことだよ、弟君。さっきも言ったろう？ スタンスが揺れるのは別に悪い意味じゃないって。もつと揺れたまえ。ぐらぐら揺れたまえ。揺れに揺れて何か新たなものを見つけたのが、思春期というものよ！ それでも見つからない時はっ」

白衣を、ぱつとコウモリの羽のように広げる姉さん。

「未佳にも負けないお姉ちゃん、の豊満な胸に飛び込んで来て、思う存分に甘えたまえ！ さあ！」

「断固拒否する！」

「何だ、つもらん」

沙耶みたいに口先を尖らせ、姉さんは羽を下ろす。

「思春期……」

一瞬、その言葉を頭の中で反芻して、俺は首を横に振る。

思春期なんてものは、十年前に親父が死んだ時に捨ててきた。別
に後悔なんかしていない。そんな不安定なものはいらない。

「それはそうと、弟君。沙耶から、作戦は二段構えだと聞いたのだが、具体的にはどうするのかね？」

こちらの様子などお構いなしに、姉さんが尋ねて来る。

何か勘付かれるのも癪なので、俺は真顔で答えた。

「基本的には、サヤナミカへの合体を目指すのが作戦の一段階目だ。けど、期間的に無理な可能性がある。というか、無理な可能性の方が高い。だから、作戦の二段階目は、合体をせずに三機のコンビネーションを駆使してミストリアと戦う。理想は、三機共に一般のスーパードライヴ以上のハートドライヴ出力を発揮出来るようになることだ」

このままだと、後者が実行されることになるだろう。

ハートドライヴの出力は、ジリジリと伸びてはいるが、個人的にどうにも腑に落ちない点がある。合体が上手く行かないのも、技術より、その点が関係しているような気がするのだ。

「メインは、誰にするんだ？」

ここで姉さんが言う「誰にする？」は、俺がサヤ、ナミ、ミカの内、どの機体に搭乗して戦うのかという意味であろう。

三機にはそれぞれコクピット席が用意されている。状況に合わせてパイロットが乗り分けられるようにする為であるらしい。サヤナミカ合体後は、胴体部の専用コクピットに移動するようになってい

る、とマニュアルには記述してあった。

「個人的には、ミカあたりがベストだと思っていたんだけど」

「ああ、なるほど」

姉さんは納得したように頷いた。

「続きは言わなくていいぞ。今の弟君の台詞で、誰だか分かったからな」

「でしようね。」

話は遡って、昨夜の作戦会議。

「はいっ！」

二段構えの作戦を伝え、俺が誰に搭乗するかという話になった途端、一人の少女が元氣よく手を挙げた。

「ボクがいいと思います！」

もはやわざわざ言う必要もないと思うが、一応誰だか言っておくと、空風沙耶である。

奈美には十中八九拒否されるだろうし、選ぶなら沙耶か未佳のどちらかだろうと思っていた。しかし正直、沙耶は何かと不安要素が多い。完全に独断と偏見だが、やる気が空回りして失敗しそうな感じがするのだ。何となく。

故に。

「個人的には、未佳がいいと思ってるんだが、どうだ？」

「えっ、ウチ？」

「はいっ！ はいっ！」

目の前で、ぴよこぴよことピンク色のツインテールが揺れている。俺は更に気付かないフリ。

「ちなみに、奈美はやっぱり駄目……だよな？」

「ふん。聞かずとも答えは分かってるだろう、そんなこと。我は貴様をパイロットとして認めたくはない」

「ですよー」

沙耶を見る。ぱちりぱちりとこちらにウィンクを送って来ていた。どうやらアピールのつもりらしい。

うーむ、いや、しかし

「じゃあ、やはり、ここは一つ未佳に……って痛あッ!？」

ついには噛まれた。右手の甲をガブリと。

「うー!」

涙目を潤ませながら、がじがじと追撃を入れて来る。

「分かった! 分かりました! 沙耶で行こう! 今回のメインは沙耶痛でででで!」

沙耶はがじがじを止めて、口を離し、上目遣いに尋ねて来る。

「……もう、意地悪しない?」

「ああ、分かった! しない! そこまで言うなら、メインは沙耶に頼むことにする。その代わり、責任重大だぞ?」

彼女は、ぱあっと満開の笑顔の花を咲かせた。

「うんっ! ボク頑張るよ!」

そのまま「やったあ!」と一回転をして、部屋の中をはしゃぎ回る沙耶。

俺はそんな彼女を見、次にくつきりと歯形の付いた自身の右手の甲を見てから、ため息をつく。

「不安だ……」

というような経緯があった。

決闘まであと四日、五月十二日水曜日の早朝。

俺は沙耶と一緒に、近くの河原へと向かっていた。

「ふんふんふん ぶんぶん」

雀が舞う青空の下、今日も元気に、ぴよっぴよっことツインテールを揺らしながら、俺の前でランニングを続ける沙耶。自宅の前

で「まずは河原までBダツシュ!」「北斗くん、Bって何!？」というやりとりがあつてから、鼻歌を奏でつつ、快走を続けている。いや、快走というか、もはやスキップだ。しかも、体力無尽蔵のスーパーロボットとあつて、かなり速い。

天才の俺としては、自分のスーパーロボットに負けることは、プライドが許さないので、全力疾走で付いて行っているのだが……目の前の少女、ノリノリである。

こちらは朝から汗水垂らして必死だというのに、このテンションの差は一体何だというのか。

納得がいかないので、聞いてみた。

「……おい、沙耶」

「うん? どうかした、北斗くん?」

「お前、何でそんなに嬉しそうなんだ」

沙耶は「えへへ」と照れ笑いを浮かべて、

「だって、二人きりでこうしていると、何だか早朝デートみたいじゃない」

「デートって……あのな、俺達は決闘の為の特訓をしに行くんだぞ? 第一、幾ら何でも、この服装でデートはないだろう」

俺は自分の着ているグレーのジャージを摘まんで引っ張る。沙耶も同じく、上も下も長袖の、赤いジャージを着用していた。

すると、彼女はわざとらしく笑う。

「ふっふっふ。その言葉を待っていたよ、北斗くん!」

急ブレーキを掛けて立ち止まり、身体を百八十度反転させて、俺の方を向く。

「こんなこともあるのかと、新たなモードを獲得しておいたのさ!」

「は?」

追いついて足を止める俺の前で、沙耶は特撮の某改造人間が変身する時のように右手を構える。

「チェンジ・サヤ!」

彼女は両手で腰を叩いた。

「ジャージブルマーモード！」

履いていた赤いジャージのズボンが光り輝く。それは、圧縮ナノマシンが活性化する際に発せられる輝き。

ジャージの裾が、糸が解けるように消えて行き、沙耶の白い太腿が露出した所で、残った布地の部分に圧縮ナノマシンが収束して行く。

彼女が腰から両手を離すと、光が粒子となって弾け飛び、赤色だった布地は紺色に変化。

ジャージの赤いズボンは、紺色のブルマーへと変身を遂げていた。「変身完了！」

赤いジャージの上着と合わせ、ジャージブルマーとなった沙耶の姿が、そこにあった。

「どう、北斗くん？ これぞ訓練時対北斗くん用決戦兵器ジャージブルマー！ 訓練しながらも、北斗くんに対して絶大なアピール効果を誇るこの服装。しかも！」

彼女はブルマーの内側に格納されていた上着の裾を外に出す。

「北斗くんの好みや、その日の気分に合わせて、上着の裾を自由にブルマーの中に入れて出したりすることが可能！ さらにっ！」

上着の前にあるファスナーを下ろし、中に着ている純白のティーマッシュを曝け出す。

「第三のバリエーションとして、このように上着を羽織る感じの、ファスナーオープン形態も再現出来るのだあー！ ……ふっふっふっ、どうよ北斗くん。これだけ揃えば、北斗くんはもう完全にメロメロだって、機能を追加してくれた博士も言ってたよ！」

「あんの髪伸び放題の悪魔……！」

肝心の合体を俺に押し付け、こんな下らない機能ばかり追加しやがって。一体何を考えてるのか。

「っーか、何度も言ってるけど、俺は別にジャージブルマーが好きなのじゃない！」

「えええええ！？ 違うのお！？」

「何その新鮮な反応！？ 完全に頭の中で俺にジャージブルマーの図式が出来上がってるよねソレ!?」

沙耶は心底残念そうに肩を落とす。

「ちえー、せつかく北斗くんを喜ばせられると思ったのになあ」

「喜ばす？ 俺を？」

「うん。ボクが北斗くんに出来るのって、これくらいだから」

真顔でそんなことを言う。

俺は彼女の額にチョップを喰らわし、表情を崩してやった。

「せいっ！」

「あ痛っ！？ 痛いよ北斗くん！」

「お前、何か弱気になってないか」

沙耶の肩が震えた。

「あつ、えつと……」

「弱気のままじゃミストリアに勝てないぞ。決闘の時にメインをやるんだろ？ だったらもつと、自信を持って、強気に行け。その為にこれから河原で、勝つ為の特訓をするんだからな」

「そ、そうだね！ うん！」

自分に言い聞かせるように頷く沙耶。

もしかすると、彼女なりに緊張しているのかもしれない。やる気があるだけに、なおさら。

「よし、だったら河原に急ごう。決闘まで期間がないからな。今日から日曜日まで、気合いを入れて行くぞ！」

「うん！」

笑顔を見せて、沙耶は再び前を走り出す。

ふと、俺はその笑顔に違和感を覚えた。

何だ……？

今のは、いつもと違う笑顔であった気がする。いつも放っていた輝きが鈍っているというか、そんな感じ。

ひょっとして、沙耶のハートドライブ出力が伸びない原因はそこにある……？

だとしたら、注意深く彼女の言動を観察していかねばならない。だが、原因が分かるまでは、決闘の方に集中しなくては。たとえ彼女の心の詰まりを解消したとしても、肝心の決闘に負けてしまつては、元も子もないのだから。

俺は一通り考えをまとめてから、彼女の背中を追って駆け出した。

俺達が住んでいる住宅街を抜けた先には大きな川があつて、そこには広い、砂利敷きの河川敷がある。

「必殺技？」

堤防を登つて降りて、その河川敷に辿り着いた俺が特訓の内容を話すと、沙耶（訓練時対北斗くん用決戦兵器ジャージブルマー・フアスナーオープン形態）は、首を傾げた。

「そう、必殺技だ。今日から日曜までの間、毎朝、沙耶には俺と一緒にこの場所で、新しい必殺技の特訓をしてもらう」

「おおっ！」

手を胸の前で合わせて、瞳をキラキラとさせる沙耶。

「必殺技というと、ロケットパンチとか、胸からミサイルとか、最近で言うと、腕が月まで伸びちゃったりとか！」

「いや、それは根本的に身体を改造しないと無理じゃね？」

あと多分、どんなに改造しても、腕が月まで伸びるようにはならないと思う。

「俺が教えるのはそういう必殺技じゃなくて、お前のハートドライブから出るエネルギーを利用した奥義だ、奥義。お前も幾つか使えるだろう？」

「えっ？ 例えば……ファイヤーボール・スパイクとか、ファイヤーブレードとか？」

「そう。そんな感じのやつ」

今更だが、ハートドライブには属性というものが存在する。発せ

られるエネルギーの質と言ってもいい。数日前に三人娘が自宅を破壊した際に使っていたものがそれで、沙耶は炎、奈美は氷、未佳は雷を操る。スーパーロボットの性能を決める要素の一つであり、戦術に大いに関わって来る。

「沙耶のハートドライブ属性である炎は、とにかく攻撃力が高い。今回はその攻撃力を最大限に発揮する為の必殺技を覚えてもらう」

「はい！ 北斗くん、質問！」

沙耶が手を挙げる。

「よし、言ってみる」

「オールバック男の連れているスーパーロボット、ミストちゃんのハートドライブ属性は、何なの？」

「いい質問だ。今回の特訓は、彼女のハートドライブ属性を打ち破る為のものでもある。ミストリア四式のハートドライブ属性を教え ておくと、『幻』だ」

「マボロシ？」

「その名の通り、相手に自身の幻影を見せる。分かりやすく言うと、忍者みたいに分身する。最大何体まで同時に分身出来るのかまでは分からないが、今までに俺が見た限りでは、十体。この能力が厄介なのは、作り出す分身には、実体があつて、実体がないことだ」

「実体があつて……実体がない……？」

俺は頷いて、右手の人差し指を立てる。

「まず最初にミストリアの実体であるAがいたとしよう。これが、ハートドライブの力でBという分身を作り出したとする」

人差し指に加え、中指を立てる。

「さて、じゃあこの時、本物のミストリアはどっちだと思う？ 沙耶はどちらに攻撃する？」

問い掛けると、彼女はすぐさま、俺の人差し指を握る。

「普通にAじゃないの？ だって、実体なんでしょ？」

俺は首を横に振る。

「残念、この時の正解はBだ」

「え？ どうして？」

「これがミストリアの能力の真骨頂、実体交換だ。ミストリアは好きな時に分身と実体を入れ替えることが出来る。つまり、沙耶がAを攻撃した時には、分身のBが実体にならなくて、沙耶の攻撃はAを擦り抜けてしまう。もしもBを攻撃したとしたら、Aを実体のままにしておくだろうから、まあ、どちらにしても不正解だな」

沙耶はしばらく、狸にでも化かされたかのような顔をしていたが、次第に大きい瞳を更に大きく見開いて、ついには声を上げる。

「そんなの勝てるわけないじゃん！」

「だから、勝てるようになる為に、必殺技の特訓をするんだ。ミストリアの能力は確かに強力だが、隙がないわけじゃない」

「な、何とかなるの？」

「ああ。相手が何体の分身を作り出して襲って来ようとも、必ずこちらの攻撃を当てる方法が一つだけある」

俺は言った。

「カウンターだ」

相手がどんなに分身でフェイントを掛けても、攻撃する瞬間だけは必ずそこに実体がある。実体でなければダメージを与えられないのは、相手も同じこと。

「相手の攻撃の瞬間を見極め、一撃必殺の威力を持つ技で、逆に敵を仕留める。合体せずにミストリアを倒すには、この方法しかない」
「カウンターで……一撃必殺……！」

「しかし、ミストリアのハートドライブは出力強化型で、一般機よりも遥かに強固なバリアーを張っている。加えて、相手は重装甲型。ハートドライブ出力で圧倒的に劣るこちらが普通に攻撃したところで、おそらくびくともしないだろう。ミストリアの防御を上回る方法はただ一つ。沙耶のハートドライブの全エネルギーを一点に集中させて、思いっきり叩き込む！」

右の拳を、左手の平に叩き付ける。

沙耶は自分の拳を見つめ、ぐっと握り締める。

「ボクが……叩き込む……！」

「訓練方法は至ってシンプルだ。拳にありったけのエネルギーを溜めて、腕を引き、思いつき前に突き出す。これだけでいい。重要なのは、拳にどれだけ多くのエネルギーを集められるかだ」

「分かった。やってみる」

頷いた沙耶は、右拳を前に出して、そつと瞼を閉じる。

唇が少し動いて、ゆっくりと深呼吸をする。

まず現れた変化は、ふわりと浮き上がるピンク色の髪。熱気が彼女の身体の周りを渦巻いているのだ。

俺にも高い温度を伝えていた熱気は時間が経過するにつれ、段々と引いて行き、代わりに右拳が赤い光を帯びて行く。

赤い光が大きくなって来たのを見計らい、沙耶はジャージの右袖を捲る。炎が燃え移らないようにする為だろう。

「ラブ

」 やがて、彼女はそう呟きながら、右腕を引く。

「ファイヤアアア

」 川を流れる水面の方へ向かって、勢いよく拳を突き出した。

「パアアア ンチツ……！」

……。

……。

……。

しーん。

河原に沈黙が流れる。沙耶の拳からは、炎どころか、熱気の一つも出やしない。水面には、波紋すら立たない。

「……あれ？」

彼女はぶんぶんとう腕を振ってみたり、ぽんぽんと左手で右拳を叩いてみたりする。反応はない。

そうして顔に近付けて、観察し始めたところで、ぼんつという音と共に、真つ黒な煙が噴出した。

「けほつ、けほつ……！」

涙目で咳込む沙耶。

「どうやら、この訓練も時間が掛かりそうである。いや、何となく分かっていただけれども。」

「ただ、俺には、今この場で、どうしても彼女に言っておかなければならないことがあった。」

「沙耶」

「けほっ……何、北斗くん？」

「必殺技の名前、どうしてもそれじゃなきゃ駄目か？」

「ラブファイヤーパンチは……恥ずかし過ぎる。」

「ラブファイヤーパンチで押し切られた。」

「また、今朝の時点では必殺技のコントロールに時間が掛かりそうだと思っていたのだが、沙耶のやる気は、どうやら俺が思っていたよりもずっと上であつたらしい。」

「合体練習の方は相変わらず成功の兆しを見せないままに夜を迎えてしまったが、きつかけは就寝前のこと。」

「明日も早朝から特訓をするから、あまり夜更かしをするなよ、と一応注意しておこうと思ひ、俺は自宅二階の沙耶の部屋を訪れた。ところが、扉をノックしても、返事がない。」

「沙耶ー？」

「更に二度、ノックする。部屋の中からは、物音一つ聞こえて来ない。」

「もう寝てしまったのだろうか？」

「貴様、沙耶の部屋の前で何をしている」

「振り向くと、寝巻き浴衣姿の奈美が廊下に立っていた。」

「普段ポニーテールの髪を下ろしており、浴衣の色は純白、それに負けじと白い肌に、細身の体が相俟って、今の彼女は大和撫子という言葉を連想させる。いずれにしても似合っていた。」

奈美は険しい表情のまま、沙耶の部屋の扉を見、俺に視線を戻す。
「まさか、部屋に侵入し、沙耶の下着を盗むつもりか！」
「盗むかつ！」

訂正。大和撫子なんてどこにもいませんでした。世界の
大和撫子ファンの皆さんゴメンナサイ。

奈美は侮蔑の眼差しを向けて来る。

「何て下劣な男だ！ 当人が部屋にいないのをいいことに、自由に柄まで選択、それを自分の部屋に持ち帰って、あんなことやこんなこと、おまけにそんなことまでだど！？ おのれ……日頃洗濯して干す際に嫌というほど見ているのにも関わらず、今度はそれを自らの手中に収めようとするとは……恥を恐れこの外道ッ！」

「既に下着泥棒扱い！？ もう嫌だ！ 二度とお前らのぱんつ洗濯しない！」

「主夫なんて止めてやる！ と宣言しようとして、奈美の罵倒の中に、重要なワードが含まれていることに気付く。

「……待て。沙耶は今、部屋にいないのか？」

「ああ。ジャージに着替えて、外に出掛けて行ったぞ」

「こんな夜遅くに？」
「手首のSRコマンドーを見ると、時刻はもうすぐ深夜の零時を回るうとしている。」

奈美は肩に掛かっていた髪を、手で背中に払って、

「自主練だそうだ。河原に行くと言っていた」

「あいつ……。分かった。ありがとう、奈美」

「戯けたことをぬかすな、下着泥棒。貴様に礼など言われる筋合いはない。あっ、ちよっ、髪を乱すな馬鹿者！」

下着泥棒と言ってくれた礼に、わしゃわしゃと頭を撫で、俺は自分の部屋に向かう。

寝巻きからジャージに着替え、靴下を履き、一階に下り、リビングで懐中電灯を回収してから、玄関で運動靴に足を突っ込む。そこで家の鍵を忘れたことに気付き、自室まで一往復した後、外に出る。

夜空には、今が梅雨であることを全く感じさせない程に明るい月と星々が煌いており、住宅街を照らしていた。

とりあえずは懐中電灯を点けなくてもよさそうである。俺は玄関の施錠を確認してから、河原へと走った。

やがて、見えてきた堤防へと登り、河原に小さく灯る赤い光を視界に捉える。

それに照らされて、うつすらと浮かぶツインテールのシルエットは、間違いなく沙耶であった。

彼女は流れる川に向かって、拳に赤い光を灯しては、腕を引き、前に突き出すという動作を、休むことなく繰り返している。

堤防を降りて、歩み寄るが、それでも彼女は気付かず、何度も、何度も、必殺技の手順を繰り返す。

やがて、彼女は疲れたのか、肩を上下させながら、右腕をぶら下げた。

「沙耶」

俺が声を掛けると、彼女は「ひゃあっ!？」と身体を震わせて、大きく後退さる。何故か恐怖を顔に浮かべて、

「ほほ北斗くん!? えっと、こ、これはその、決闘まであと数日しかないんだなあって思ったら、緊張してきちゃって、居ても立ってもいられなかったというか……! ご、ごめんなさいッ!!!」

勢い良く頭を下げる沙耶。だらーんとツインテールが垂れ下がる。

「何で謝るんだ? 沙耶は自主練してたんだろ? 別にそれは怒られるようなことじゃないだろ」

「う、うん、だけど……」

「だけど?」

「えっと……」

沙耶は俺の顔色を窺うように、ちらちらと視線を送って来る。

「ああ、夜遅く外出したからか? まあ、確かに、一言断っておいて欲しかったな」

そんな考えは、沙耶の練習する後ろ姿を見て、いつの間にか吹き

飛んでいた。

「そ、そうだね。ごめん」

「奈美に部屋にいないって聞かされて、これでも心ば
言い掛けて、手で口を塞ぐ。」

ちよつと待て。俺、今何て言おうとした！？ 何かとてつもなく
恥ずかしいことを、さらりと言おうとしていなかったか！？

「北斗くん？ 今何て……」

「何も言っていないッ！ 何も言おうとしてないッ！！！」

「いや、でも何か……」

「そんなことよりも！ 必殺技の調子はどうなんだ！？」

強引に話を逸らす。

沙耶はしばし、不思議そうに首を傾げ、大きな瞳をぱちくりとさ
せていたが、首を横に振る。

「イマイチなんだ……。どうにも拳にエネルギーを集中させる感覚
が掴めない。幾ら風船を膨らまそうとしても、どこかに穴が開いて
いて、そこから空気が逃げて行っっちゃう感じで……」

そう言って、右手を開いたり閉じたりする。

「とりあえず、もう一度、やって見せてくれるか？」

「分かった」

流れる川の方を向き、沙耶は再び、右拳を赤く発光させる。

「はああ……！」

エネルギーを溜める為に、自然と力が籠もるのだろう。右腕が震
えている。

沙耶は溜まったエネルギーを逃がさないようにする為か、早々と
腕を振りかぶる。

「てえええい！」

掛け声と共に、拳を突き出す。何度も練習したとあって、横で見
ていた俺の方にも温かい風が流れて来る。

だが、それだけだった。緩やかな水面にわずかな波紋を立てる程
度。

「北斗くん、こんな感じなんだけど……」

「うーむ」

俺の気になった点は、二つ。

「多分だが……沙耶。お前、右拳に直接エネルギーを集めようとしてないか？」

「え？」

大きな瞳を瞬かせていることで、俺はそれを肯定だと受け取る。

「右拳に集めるのは、感覚的にはエネルギーじゃない。そもそも、そのエネルギーは何から生み出したものだ？ ハートドライブからだろ？」

「あつ、そうか……エネルギーを集めるんじゃないくて、感情を集めるイメージ……！」

ほんと両手の平を合わせる沙耶に、俺は頷く。

「おそらくは。集めているエネルギーの本質を把握し切れていない為に、集まりきらなかったんだと思う。もう一つ気になったのは、そのせいか、エネルギーが集まりきらない内に、早々と腕を引くモーションに入ってしまったってことだ。この必殺技は、全てのエネルギーを一撃に込めるものだから、練習は数をこなすんじゃなく、一回一回を大事にしないと駄目だ。タイミングを外して、溜めたエネルギーが霧散してしまってもいい。限界まで溜めることが大切だ」

「なるほど……うん！ 何だか出来そうな気がして来たよ！ さすがは北斗くん、天才だねっ！」

そこだけ昼間と見間違えるような、底抜けに明るい笑顔を見せる沙耶。

……あれ、おかしいな。当たり前のことなのに、他人から自称じやなく天才と言われたのは、生まれて初めてな気がする。いやいや、まさか。そんなことは。

沙耶は「よし、またやる気が出て来たぞ。そうだ！ 今度は大車輪式で」とか言いながら、ぐるぐるんと右腕を回し始める。

「あつ……沙耶！ 練習はあと一時間だけだ。起きられずに、明日

の早朝の特訓が出来なくなったら、自主練の意味がないからな」「了解ー！」

時間制限を設けたところで、必殺技の練習が再開される。

今度は力む感じではなく、精神統一するように、静かに右拳にエネルギーを溜めている。先程までとは明らかに様子が異なり、右拳の光がどんどん強さを増して行く。

そして、腕を引き、解き放つ。巻き起こる熱風。

沙耶は肩を上下させ、呼吸を落ち着かせてから、また溜めのモーションに入る。

月に照らされた横顔は、凜として、真剣だ。

それは、俺にとつて、初めて見る沙耶の表情。

ふと、疑問が湧く。

「なあ、沙耶」

「うん？」

練習の合間、呼吸を整えている時に尋ねてみる。

「どうして急に、自主練をする気になったんだ？」

「それは……」

俺を見て、沙耶は少し逡巡したようだったが、口を開く。

「……北斗くんがボク達の為に、練習をしてくれるようになって、ボクはそれに応えたいって思ったんだ」

彼女は月を見上げる。

「オールバック男に馬鹿にされた時、ボクは何も言い返すことが出来なかった。現状を認めてしまったんだと思う。どこかで合体なんて出来ない、これ以上強くなれないって、諦めかけてたんだ。だけど、北斗くんが怒ってくれて、ボクは頑張りたいつて思った。諦めないで、もう一度頑張ってみようって思った。だから」

大きな瞳が俺を映し出す。

「見てて、北斗くん。ボク、必ず役に立ってみせるから」

俺には、もう一つ疑問に思っていることがあった。

それは、前にも思ったが、どうして沙耶がここまで俺に信頼を寄

せられるのかということ。

俺は沙耶が思っているような男じゃない。決闘が終わって、合体を成功させたら、彼女達から離れて行く。他のパイロットと変わらない。

練習を続ける沙耶に、再び聞こうとして、止める。

それを聞いて、俺は一体どうするのだろうか。せつかくやる気を出している彼女に、水を差すようなことを言うのか？

それとも、彼女に同情をして、パイロットを続けるのか？

わざわざ自分で問題を広げる必要はない。そう思う。少なくとも、京極との決闘が終わるまでは。

第二章 / ミルクたっぷりカフェオーレ・後編

決闘まで残り三日。五月十三日木曜日の早朝。必殺技の練習を始めて、まだ一日しか経っていないというのに、沙耶のやる気は形となって現れることとなる。

河原に着いて、練習を繰り返した、十一回目。

既に沙耶は何度も全力でエネルギーを放出し続けてている為に、疲労が顔に現われ、額や首筋を汗が伝っているのが見えるのだが、彼女の瞳には強い光が、未だ消えることなく宿っている。

「ラブ

沙耶が右拳に紅蓮の光を灯す。昨日とは比べ物にならない程に眩い輝きは、まるで小さな太陽のよう。しかし、以前は少なからず感じられていた、肌を焼くような熱さ、空気の震えはない。静かに、拳の輝きだけが増して行く。

「ファイヤアアア

弓を引き絞るように、彼女は大きく腕を引く。拳の光が軌跡を描き、彼女の周りを渦巻く風に、ピンクのツインテールがなびく。

「パアアア ンチッ!!!」

そして、渾身の右ストレートを放った。

ズバゴオオオオンッ!!!

直後、轟音と共に、右拳から凄まじい突風が巻き起こり、川を横切るようにして、水面が真っ二つに割れた。

肌を焼くような熱風が俺の前髪を揺らし、切り裂かれた川から水飛沫が上がって、雨のように降り注ぐ。

間違いない成功と言っていい一撃であったが、放った本人は初めての現象に実感が持てないようで、水飛沫を浴びてびしょ濡れになりながら、瞳をぱちくりとさせる。

「ほ、ほ、ほ、北斗くんっ！」

川の方を指差しながら、こちらに視線を送って来る沙耶。
俺はしっかりと頷いて見せる。

「ああ、成功だ」

沙耶の表情に、ぱあっと歡喜が広がった。

「やったあ　っ！ー！」

彼女はガッツポーズをし、ラグビーのタックルのごとく俺に抱きついて来る。

「おわっ！？　ちよっ、沙耶、倒れる倒れる！」

砂利敷きの上で尻餅をつく。だが、そんなことはお構いなしに俺の胸にぐりぐりと頭を押し付けて、喜びを表現する沙耶。先程までの疲労はどこへやら、元気一杯の笑顔。

「やった！　ボク、出来たよ北斗くん！　ボクにも出来た！」

俺は彼女の頭を撫でる。

「分かった分かった。ただ、喜ぶのはいいが、まだ一回成功しただけだ。今のイメージを大事にして、コンスタントに出せるように……って、聞いているか？」

「……うん！　……うん！」

本当に嬉しくて堪らないのだろう。沙耶はただただ頷く。

「やれやれ……」

俺はため息をつきつつも、今この瞬間、沙耶の必殺技が成功して、素直に嬉しいと思えたのだった。

同日、午後四時過ぎ。地球防衛局東京第一支部指令所内。

何十人という局員が目の前のキーボードに向かい合っている広い室内は、地下にある為に窓はなく、現在は警戒態勢に入ったので薄暗くなり、指令所最前部にあるメインスクリーンが照明代わりとなっている。

局員が口頭で情報を交換し合って騒がしい中、髪伸び放題の白衣の女性が、栄養ドリンクの蓋を捻って開けながら、メインスクリーンに流れる映像を見つめていた。スーパーロボット開発部総責任者、白坂南である。

彼女は局員の一人である男性に、声を掛ける。

「あー、君、この次元震が観測されたのは何分前だったかな？」

「今から七分前です！ 日本標準時刻にして、午後三時五十九分三十八秒」

「既に七分か……ふむ」

栄養ドリンクの瓶に口を付けて、喉に流し込む南。

指令所の自動ドアが開いて、明るい髪色をした三つ編みの女性が入ってくる。胸のプレートには『司令』の二文字が刻まれている。

「状況は？」

地球防衛局東京第一支部指令、羽柱鈴音が南に尋ねる。

髪伸び放題の悪魔は振り向き、ニヤリと笑って、

「遅いじゃないか、スズ。マズイことになってるよ」

「いや、マズイことになってるのを伝えるのに、口元が笑ってるってどうなのよ？」

「おっと、悪いね。つい癖で」

「とにかく、状況を詳しく教えてくれるかしら。避難指示の警報を何故鳴らさないの？」

鈴音は指令所の最後部、中央の席に腰掛ける。

南は「ちよつと借りるよ」と、局員の男性の前にあるキーボードを操り、メインスクリーンに映像を表示する。

「今から少し前、東京上方に位置する宇宙空間で、強力な次元震が観測された。これが人工衛星で撮影された、その時の映像」

宇宙空間に一本の亀裂が走り、それが広がり、やがて砕けて直径四十メートル程の大穴が開く光景が映し出される。

「え？」

鈴音は訝しげに眉をひそめる。

映像の中の亀裂はしばらくして、巻き戻されるように閉じて行く。最後には何事も無かったかのように、元の宇宙空間の姿になった。

「南、これは……」

「ああ。次元震は確かに確認された。しかし、映ってないんだよ。肝心の――」

南は最後の一口を飲み切り、空になった栄養ドリンクの容器を白衣のポケットに突っ込む。

「宇宙怪獣が」

過去二度を除き、人類の脅威はいつも同じ方法で地球へと進攻して来た。宇宙空間の外　別次元を通り、通常よりも短時間で長距離を移動する次元跳躍。地球大気圏外ギリギリのところ、次元の壁を突き破り、宇宙怪獣は出現するのである。

「じゃあ、次元の亀裂は偶然起こったもので、宇宙怪獣が次元跳躍して来たわけではない、ということ？」

「ありえないな、それは」

南はいつになくはつきりと断言する。

「宇宙空間が裂けるなんてことは、何かが次元跳躍して来た以外にまずありえない。仮に偶発的に起きたとしても、発生確率は天文学的数字、大きさは針の穴程度のものだ。それが直径四十メートルの大穴、次元震が観測される程のものになって、偶然発生したなんてことは絶対がない。スズ、次元震は何かによって大きく次元が歪められるから発生するんだよ？」

「だとしたら、敵は新種の……」

「姿を消せる宇宙怪獣、という可能性が高い」

そう言った南と、鈴音の視線が交錯する。

「……参ったわね。よりによって、主力部隊が出払ってるこんな時に……！」

「出払ってるからこそじゃないの？　どうするんだい、スズ」

鈴音は目を瞑り、左手の親指で、下唇をなぞる。

すると、指令所内のざわめきが消え、静寂に包まれる。局員達が

全員、指示を仰ぐべく、司令である鈴音の方を向く。

やがて鈴音は目を開けると、右腕を薙ぐように振った。

「総員、第一種戦闘配置！ 東京一帯に避難指示発令！ ミストリア及びサヤナミカのパイロットに出撃要請！ 観測班は少しの異変も見逃さないで！」

指令所内が一気に騒がしさを増した。

その日の沙耶ときたら、早朝の特訓以降、とにかくもうご機嫌である。

登校時は公道で、前を見ずに踊り出したものだから、電柱に頭をぶついたりするし、学校では授業中に何やら妄想に耽っており、先生に注意されたのを差されたと勘違いしたらしく、慌てて立ち上がり、「はい、分かりません！」と発言して、クラスメイト達に爆笑されたりしていたが、いずれにしても終始にこにこ笑顔絶やさなかった。

「ふふふん、ふふふん　ふふふん」

放課後になり、合体練習の為に地球防衛局へ向かう道中も、一番先頭で、鼻歌とスキップで嬉しさを演出している。

そんな沙耶に代わって俺の横を歩く未佳が、「ウチはまだ信じられへん」と言葉を洩らした。

「なあ、ほーやん。本当にさーやんの必殺技、成功したん？　だって、練習を始めたのって、昨日の朝なんやろ？」

「成功したのは本当だ。といっても、その後の練習で何度か失敗してるから、成功確率としては、まだ半々くらいだけどな」

それでも俺は、上出来だと思っている。たった一日で、沙耶はエネルギーのコントロールを身に付けたのだ。やはりサヤナミ力は、磨けば光る力を秘めている。今回のことで確信した。

何気なく、スキップしている沙耶の後ろ姿を見つめていると、じ

「っつと横から未佳が俺の顔を覗き込んでいることに気付く。

「どうした、未佳？」

「ウチ、ほーやんが笑ってるの、初めて見た……」

「笑っ……!？」

俺は反射的に自分の顔を押しさえる。

笑っていた……俺が!？ 確かに沙耶が必殺技を成功させたことは嬉しく思っているが、顔を綻ばせた覚えはない。無意識に頬が緩んでいたとでもいうのだろうか。そんな馬鹿な。

指摘されて、あれこれと考えている内に、妙な恥ずかしさで顔が熱くなつて来る。

話を聞いていたらしく、前を歩き、ポニーテールを揺らしていた奈美が言った。

「くだらん。必殺技の一つや二つ出来るようになったくらいで、何が嬉しいんだか。まだ実戦で使ってもいないというのに」

先頭の沙耶が、身体ごと振り返る。

「大丈夫だよ」

彼女は俺を見て、それから奈美を見た。

「せっかく北斗くんに教えてもらったんだもん。たとえ宇宙怪獣が攻めて来たとしても、今度こそラブファイヤーパンチで倒してみせる。ボクはこの必殺技で、北斗くんの役に立つんだ」

沙耶の力強い瞳と言葉に、奈美は「ふん」と鼻を鳴らして、そっぽを向く。

ふと、未佳が横で呟いた。

「さーやんは、ほーやんのこと、本当に信じとるんやね……」

俺は金色の癖っ毛を見下ろす。彼女は意識しないと聞き取れないくらい小さな声で、

「けど、ウチは」

その先の言葉は、突然上がった爆音によって掻き消された。

「何だ!？」

遠くの方で、大きな火柱と共に、黒煙がもうもつと上がっている。

まさか、宇宙怪獣……！？　だが、避難警報はまだ鳴っていない。そう思った直後に、避難警報のサイレンが辺り一帯に鳴り響く。連動するように手首のSRコマンドーが音を立て、ボタンを押すと、画面から出た光が空中に四角のウィンドウを作り出し、そこに鈴音さんの顔が映った。

『北斗くん、宇宙怪獣が出現したわ！』

「今、肉眼で西の方に黒煙が上がるのを確認しました。何で避難警報が遅れたんです！」

『そのことの説明は後です。今は一刻を争うの。サヤナミカは現場に向かって、宇宙怪獣を掃討して頂戴』

「了解！　聞いたな、三人共！」

「うん！」　「ああ」　「把握したで！」

頷く三人娘。

俺は指示を出す。

「各機変身！」

「チェンジ、サヤ！」

「チェンジ、ナミ！」

「チェンジ、ミカ！」

掛け声と共に三人娘の肢体が眩い光に包まれる。

「……ロボットモード！」　「……」

光はそれぞれ強く、巨大に変化し、全長十五メートルのピンク、ライトブルー、レモンイエローのスーパーロボットを公道に顕現させる。

「サヤ！」

名を呼ぶと、ツインテールに似たバインダーを装備したピンクのロボットが地面に片膝を着き、そっと巨大な右手を俺の前に下ろす。「乗って、北斗くん！」

圧縮ナノマシンで出来た金属の手の平に乗る俺を、サヤは自身の

腹部に持つて行く。

「サヤの腹部装甲が開いて、その奥にコクピットが出現する。」

俺は中に入り、コクピット座席に着くと、コクピット右にあるポタンの一つを押し、開いている腹部装甲　コクピットハッチを閉めた。

同時に、全天を覆うようにモニターが付き、コクピット全体が透明のガラスに変わったかのように、上下左右三百六十度、外の景色を映し出す。

「サヤ、パイロットスーツ展開!」

モニターに四角のウィンドウが開き、人間姿のサヤが表示され、口を開く。

『了解! えっと……コクピット内に圧縮ナノマシンを散布!　パイロットの着ている服をパイロットスーツに変換!』

コクピット内にキラキラと光の粒子が舞い、俺の着ている制服を覆う。やがて、光が消えると、俺の服装は白を基調としたパイロットスーツに姿を変えていた。

「続いて、パイロットスーツ・ロック!」

『分かった!　パイロットスーツ背面を座席に固定!　3、2、1、ロック完了!』

ボルトの閉まるような音がする。確認の為に上半身を前に引っ張ってみると、スーツの背中と座席を繋げたチューブが少し伸びるが、立つことは出来ない。

「ロックに異常なし。サヤ、各部の調子はどうだ」

『オールグリーン!　ハートドライブの調子も良好だよ!』

「問題ないな。それじゃあ、コントロールを借りるぞ」
座席の左右にある操縦桿を握る。片膝を着いていた機体を動かし、直立させた。

モニターを見ながら、サヤの両手を開いたり閉じたりして、操縦の感覚を確かめる。

「ナミとミカはどうだ?　行けそうか?」

声を掛けると、サヤと同じく、モニターにウィンドウが開き、人間姿の二人の顔が表示される。

『問題などありはしない。さっさと出撃するぞ!』

『ほーやん、ウチも行けるぞ』

「よし! サヤナミカ、出撃する! サヤがメイン、ナミとミカは援護に回ってくれ!」

『了解!』

俺はサヤの脚部と背面のブースターを点火し、日が傾きつつある空に飛び上がらせた。ナミとミカが付いて来ているのを確認してから、黒煙が上がる西の方へ飛翔する。

ピリリリと音声が鳴って、モニター横を見ると、『羽柱鈴音』の文字。自動的に鈴音さんのウィンドウが開く。

『北斗くん、サヤに搭乗したのね。本部のコンピューターと機体のハートドライブをリンクさせたわ。詳細な地点を送信します』

「了解。これより現場に向かいます」

『ミストリアも宇宙怪獣迎撃の為にそちらに向かっている。着くのは北斗くん達の方が早いわ。それで、現場に着いたら、宇宙怪獣について確認して欲しいことがあるの』

「それは避難警報が遅れたことと関係が?」

『さすが自称天才。察しがいいわね』

「自称じゃありません」

そこで再び、通信回線が繋がる音。モニターには『白坂南』の文字。新たなウィンドウが開き、見飽きた身内の姿が現れる。

『やあ、弟君。相変わらず白いパイロットスーツがキマっていて、お姉ちゃんは正直堪りません』

「ふざけている場合か。さっさと宇宙怪獣の説明をしろ」

『酷い! 弟君はお姉ちゃんと宇宙怪獣、どっちが大事なんだね!』

「宇宙怪獣」

『スズ、大変だ! 私の愛しの弟君が宇宙怪獣フェチに目覚めて…』

…ぐああああ！ 頭が割れるように痛い！いいいい！？」

ウィンドウに表示された姉さんの頭に、誰かのアイアンクローがめり込んでいる。と、ウィンドウが消滅した。

鈴音さんのウィンドウを見る。そこには、何事もなかったかのように、女神のごとき微笑みを湛えた鈴音さんが映っていた。

一応聞いてみる。

「あの……姉さんとの通信が途絶したんですけど」

『あら、そうなの？ 通信機の故障かしら。とりあえず、それはそれでいいとして、確認して欲しいことは、宇宙怪獣が姿を消せるのかどうか、ってことなの』

「姿を消せる？」

『次元震が観測された際、宇宙空間に裂け目が発生したのは映像で確認してる。ただ、そこに宇宙怪獣の姿が確認出来なかったのよ』

「宇宙空間に裂け目が発生したにも関わらず、肝心の宇宙怪獣の姿がなかった、ということですか？」

『そう。だから、今回の宇宙怪獣は、不可視になれる能力を持つ新種である可能性が高い、というのが南の推測よ。戦闘の際には、敵の能力をまず確認してから、十分に気を付けて戦って』

「現場の市民の避難は完了しているんですか？」

『何とか間に合いそうよ。北斗くん達が到達するまでには完了させるから、戦闘に集中しなさい』

「了解！」

サヤのスピードを上げて、モニター左上に表示されている地図の、明滅しているマーカーの地点に急ぐ。

数分で、高層ビルが立ち並ぶ、中心市街地に到達する。上空から見下ろすと、そこには既に上半分が破壊され、炎を上げるビルや、何かに押し潰され、無数の亀裂が走ったコンクリートの地面が、見受けられる。

サヤがウィンドウが開いた。

『ほ、北斗くん、羽柱司令の言った通り、これだけ被害が広がって

るのに、宇宙怪獣の姿がどこにも見えないよ！」

「気を付ける。どこから仕掛けて来るか分からない。三機共、索敵に気を配れ！」

サヤの左右を固めている、ナミとミカにも呼び掛ける。
加えて、サヤに言う。

「サヤ。それから、外の音声を取り入れて、コクピットに流してくれ。目で確認出来ないなら、耳で確認する」

『う、うん！ 分かった！』

ウィンドウ内の彼女が頷くと同時に、機体に吹き付ける風や、下方で燃える炎の音、遠くでパトカーや救急車、消防車のサイレンの音がコクピットに入ってくる。

モニターに注意深く視線を走らせながら、耳を澄ます。

ふと、異質な音が背後から聞こえる。これは……コンクリートが碎ける音！

機体を百八十度反転させ、下方を見る。道路の真ん中に二つのクレーターがある。

直後、風を切るような音が、コクピット内に響く、。

「来るぞ！ 全機、全速上昇！」

操縦桿を引き、ブースターを全開、足元に来た見えない何かを回避する。だが。

『にゃあッ！？』

横から聞こえる悲鳴と共に、上昇していたレモンイエローのスーパーロボットの動きが止まり、逆に地面に吸い寄せられる。

「ミカ！」

その後、見えない何かに引き寄せられ、ミカは空中で円の軌跡を描くと、投げ飛ばされるようにして、高層ビルに突っ込む。崩れ落ちるコンクリートに飲み込まれ、機体が地面に埋もれる。

そこで、はっと思い付き、俺はライトブルーのスーパーロボットに向かって、叫んだ。

「ナミ！ 下方に向けて、アイスブリザードだ！」

「何？……そうか！ よし！」

頷いたポニーテールブースターの機体は、真下に両手の平を突き出す。

「アイスブリザードッ！」

手の平から吹雪が発生して、中心市街地に勢いよく吹き付ける。燃えていた半壊のビルも、砕けたコンクリートの道路も、氷で覆ってゆく。

すると予測通り、その中に唯一、歪な形をした氷の塊が現れる。

「見えたぞ！ サヤ！」

「り、了解！ ファイヤーボール」

サヤが右手に火球を作り出し、それを宙に浮かせる。

「スパアアアイクツ！」

火球を手の平で強打し、氷の塊に向かって射出する。直撃して、爆風が巻き起こった。

機体を降下させ、今の爆風で溶けつつある氷の地面に着地させる。ナミも横に降り立つ。

爆風が止み、白煙が消えて、姿を現したのは、左右が三百六十度、別々の方向を見定めんとギョロつく双眼。

「お出ましたな」

およそ全長三十五メートル超。体の色は濃い緑で、二足歩行。長い尾を持ち、前足後足の爪はそれぞれ二股に分かれている。いや、詳しく説明しなくとも、目の前の宇宙怪獣は簡単に言い表すことが出来る。

二足歩行の巨大カメレオンである。

「なるほど、姿を消せるわけだ」

カメレオンが大口を開き、咆哮する。

「キシヤアアア ツ！！！」

ギョロリと双眼がこちらに向く。大きく開いた口から、真っ赤な舌が弾丸のごとく発射された。

すかさず横に飛んで避ける。コクピット内に響く風を切る音は、

ミカを掴まえた時のものと同じ。

横のポニーテールブースターのロボットを呼ぶ。

「ナミ！ 俺とサヤが引き付けている間に、ビルの瓦礫からミカを助けるんだ！ それから三体で宇宙怪獣の動きを止めて、サヤの必殺技を叩き込む！」

『ふん、所詮は姿を消せるだけに敵に過ぎん。必殺技など必要ない！』

「なっ！？」

ナミは右腕を構えると、氷柱のように凍らせて、槍を作り出す。

『こいつは我一人で仕留める！』

舌を蛇腹状に縮ませて収納したカメレオンに向かって、突撃した。
「止せ、ナミ！ 戻れ！」

叫ぶが、ナミの突進は止まらない。

カメレオンが再び舌を射出する。その攻撃に対して、ナミはブースターで低空飛行し、ボディを回転させて潜り抜ける。

『はあああ！』

ナミは氷槍の突きをカメレオンに繰り出す。濃緑の巨体を浮かせ、突進の勢いのまま、背面に立つ高層ビルへ叩き付ける。

『これで……何！？』

ナミが驚愕の声を上げる。氷槍はカメレオンの身体を貫いておらず、二股の爪によって掴まれ、寸前で止まっていた。

「キシヤアツ！」

カメレオンの鳴き声と共に、掴まれた氷槍にヒビが入り、粉々に砕け散る。宇宙怪獣の身体が一回転し、長い尾がナミの脇腹の装甲にめり込む。

『かはっ！？』

ライトブルーの機体は吹っ飛ばされ、ビルを三つ貫いて、コンクリートの粉塵を宙に巻き上げた。

「ナミ！」

ギョロギョロと瞳を回転させながら、カメレオンが身体をこちら

に向ける。しばらくして双眼が回転を止め、サヤを捉えた。

「くっ……！」

落ち着け、白坂北斗。ここは一旦防御に転じて、体制を立て直す。まずは宇宙怪獣の隙を突き、奴の動きを止める。次に瓦礫に埋もれたミカの回収。ミカを起こして、彼女にはナミを助けに行かせる。

そうして三体が揃ったところで、攻撃に転じる。焦りさえしなければ、やって出来ないことはないはずだ。

「サヤ！ ファイヤーボール・スパイクで宇宙怪獣の両目を攻撃、怯んだところでミカを助け出す。機体制御は俺がやるから、サヤはハートドライブの出力安定に努めてくれ。行くぞ！」

ブースターを点火して機体を空中に浮かせるべく、操縦桿を引くが、全く動かない。

「サヤ！？」

「くっ……！」

モニターのウィンドウには、俯くサヤが映っている。前髪に隠れて、表情を見ることは叶わない。

しかし、そこで、僅かだが、機体が震えていることに気付く。

「サヤ……お前」

サヤのウィンドウに気を取られていた一瞬、隙が出来る。モニター前方に表示される『危険』の赤い文字。

「しまった！」

弾丸のごとく飛んで来た赤い舌が、サヤのボディーに巻き付く。

脱出を試みようとする操縦桿を動かしてもがくがどうにもならず、機体が凄まじい力でカメレオンの方に引き寄せられる。

そして、その勢いを利用して、ミカと同じく円を描くように振り回される。

カメレオンは、サヤを力一杯道路に叩き付けた。

コンクリートが砕ける音、金属の軋む音と、激しい震動が、コクピット内にも伝わって来る。

「くっ……サヤ！ 大丈夫か！」

巻き付いていた舌が解かれる。カメレオンが道路に亀裂を増やし
ながら、一歩一歩こちらに近付いて来る。

サヤのウィンドウは、今の衝撃で消滅してしまっている。だが、
コクピット内に呻き声が響く。

『うう……こんなことで……負けるわけには……！　ボクは
操縦していないのに、機体が勝手に起き上がる。』

『ボクは　』

モニターに表示されるハートドライブ出力上昇の図と文字。棒グ
ラフが上昇して行く。

この出力は……まさか……！

「サヤ！　落ち着け！　それを使うのはまだ早い！」
嫌な予感が的中した。右拳が赤く光り輝いている。

止めさせるべく、操縦桿を動かすが、反応がない。完全に俺の
コントロールを拒絶している。

サヤが何度も河原で練習して来た時のように右腕を引く。

『ボクは……北斗くんの役に立たなきゃいけないんだああ　ッ

！……！』

カメレオン目掛けて、一直線に飛び出した。

ブースターで一気に加速。懐に飛び込んで、炎の拳を突き出す。

エネルギーが収束された拳に危険を察知したのか、巨体に似合わ
ず、素早く飛び退いてかわすカメレオン。

『おおおお　ッ……！』

サヤは間髪入れず、拳を炎で赤く染める。カメレオンに接近し、
もう一度拳を振り抜く。

その攻撃をすり抜けるようにして、カメレオンの濃緑が透明に変
わり、視界から姿を消失させた。

『き、消えた！？』

動揺し、辺りを見回すサヤに、俺は再び呼び掛ける。

「落ち着け、サヤ！　一旦後退するんだ！　ナミとミ力を助け出し
て、体制を立て直す！」

声が届いていないのか、サヤはまたも右拳に炎を纏う。休むことなく連続使用しているせいで、出力が下がっているのが、目に見えて分かる。

背後でコンクリートの砕ける音がした。

「サヤ！ 後ろだッ！」

「えっ……………」

サヤが振り向くよりも速く、カメレオンが巨体を現す。二股の爪が唸りを上げて襲い、サヤを跳ね飛ばす。

「きゃあああッ！！！！」

機体が道路の上をバウンドし、転がる。それでも止まることが出来ず、サヤはビルの壁面に突っ込んだ。

コクピットが激しく揺れ、俺は危うく意識を持って行かれそうになる。頭を横に振って、意識を覚醒させる。

モニターに、機体の損傷状況が表示されている。損傷率四十八パーセント。これ以上まともに攻撃を喰らうとマズい。

「サヤ、無事か!？」

「うっ……………あっ……………ぐう……………!」

ノイズ混じりの声。機体がゆっくりと起き上がる。

モニター正面に、こちらに近付いて来るカメレオンが見えた。攻撃の手を緩めるつもりは全くないらしい。

と、機体が大きく震え、サヤの動きは地面に座り込んだ状態で止まってしまった。それどころか、後退さを始める。

「あ、ああ……………」

「サヤ……………」

間違いない。サヤは今、目の前の宇宙怪獣に脅えていた。

機体が震えていたのも、がむしゃらに突っ込んでいたのも、彼女が脅えていたからなのだ。

モニターに映るカメレオンが、次第に大きさを増して行く。

「こ、来ないで……………来ないでえ！ 嫌あああ!」

地面に転がっているビルの瓦礫を片っぱしからカメレオンに投げ

るが、動揺している為にまるで当たらない。

ついには両腕を前にかざし、その場で縮こまってしまおうサヤ。

「サヤ、立ち上がって逃げるだけいい！ この場から離れるんだ！

このままじゃ、敵にやられるぞ！」

俺は操縦桿を引きながら何度も叫ぶが、機体はびくともせず、カメレオンが目の前まで迫って来る。

太い足がサヤの眼前のコンクリートを砕き、クレーターを作った。いつの間にか分厚い灰色の雲に覆われた空をバックにして、二股の爪を天空に掲げる。

振り下ろされる鋭い爪の切っ先に、死を覚悟した、その時。

横から放たれたパープルカラーの巨腕が、カメレオンを殴り飛ばした。低空を錐揉み回転し、宇宙怪獣は地面に沈む。

巨腕の主は、全長四十メートルを超える巨大なスーパードロイドであった。全身を、西洋の甲冑を思わせる分厚い装甲で覆い、頭部のゴーグルの中で、黄色いアイカメラが強い光を放っている。直線より曲線の方が多いフォルムは、重装甲タイプにも関わらず、首に巻かれた漆黒のマフラーと相俟って、どこか洗練された美しさを感じさせる。

スーパードロイドの名は、ミストリア四式。

『ミスト！ 敵がまた姿を消す前に、一気に決着を着けるぞ！』

『……了解しました、マスター。参ります』

オールバックの男とお付きのメイドさんの声がして、パープルカラーのスーパードロイドは、忍者のごとく、両手で印を結ぶ。

『 幻影の舞』

ミストが呟くと共に、機体が中心市街地に所狭しと分身。九体のミストリア四式が、倒れているカメレオンを囲むように出現した。

総勢十体もの全長四十メートル超の機体が、ビルの上、空中、道路に並んで、身体の前で腕組みをし、漆黒のマフラーを風に棚引させる光景は、壮観である。

カメレオンが上半身を起き上がらせる。

『させるものか！ ミスト！』

『……はい、マスター』

京極の叫びに、サヤの前にいたミストリアがブースターを点火し、カメレオンに突撃。アッパーを叩き込み、濃緑の巨体を宙に浮かす。
『必殺奥義』

ミストの眩きに合わせ、十体のミストリアが、両腕の甲部から仕込み刀を展開する。全機が一斉にカメレオンに向かって、突っ込んだ。

『『百花繚乱ッ！』』

一つの実体を九つの分身とタイミングよく切り替え、一度の攻撃で、敵に無数の斬撃を与える、ミストリアの必殺技。

十体のミストリアが地面に着地する。

『結』

京極がそう言うと、カメレオンが断末魔の咆哮を上げ、空中で爆散した。

俺達の苦戦が嘘のような、圧倒的な力。

分身が消え、ミストリアは元の一体に戻る。こちらを向くと、歩いてやって来る。

やがて目の前まで来たところで足を止め、ミストリアはサヤを見下ろした。

ウィンドウを開くわけでもなく、京極は外部音声で言う。

『無様だな』

それだけだった。ミストリアはすぐに背中を向けて、灰色の空に飛び去って行く。

サヤは、何も言わなかった。

コクピット内は静まり返って、モニターの外には、ボロボロになった中心市街地と、爆散して燃える宇宙怪獣の残骸だけがあった。

ふと、灰色の空から雫が降って来るのが見えた。雫は次第に量を

増し、雨となつてサヤのボディを濡らして行く。

俺はコクピットハッチを開けて、外に出た。機体を降りて、コンクリートの大地を踏む。

振り返つて、外からサヤを見た。糸の切れた人形のように、サヤは動かない。

けれど、小さく光を灯すアイカメラを見て、AIが正常稼働していることを確認する。

雨脚はそれ以上強くなるわけでもなく、弱くなるわけでもなく、俺とサヤを打ち続ける。

俺は空を見上げて、今が梅雨の時期の真つただ中であつたことを思い出した。

それからサヤのコクピットに戻つて、鈴音さんとの通信で、ミカとナミが無事に回収されたことを伝えられた。両機共、AIにノイズが走り、意識は不安定であつたが、物理的損傷は軽傷で済んだらしい。俺はとりあえず、ほっと胸を撫で下ろしたものの、目の前のサヤを見ていると、安心ばかりもしていられなかつた。

損傷率四十八パーセントの身体よりも、彼女に関しては精神的ダメージの方が大きいだろう。

しばらくして、現場に地球防衛局の局員が到着して、俺と沙耶は第一支部に運ばれた。

沙耶は第一支部に着くと、病室に運ばれ、俺は特に怪我もなかつたので、軽く検査をして、すぐに解放された。

俺は局員の人に頼んで、自宅まで車を出して貰い、家のタンスを開けて、大きなバッグに四人分の着替えを突っ込む。再び車に乗つて、第一支部に戻ると、シャワールームで温水を浴びてから、私服に着替えた。

技師の先生から面会の許可が下りたので、バッグを持って、まず

は奈美の病室を訪れる。

「よう、調子はどうだ」

「絶対調だ。だから、荷物だけおいて、さっさと失せる馬鹿者」
ベッドに身体を埋めた奈美は、ノックをしたにも関わらず、病室に入って来る俺を視界に捉えるや否や、吐き捨てるようにそう言つて、相も変わらず刺すような視線を送りつけて来た。しかし、今はむしろそれが安心する。

「分かったよ。とりあえず、一応家から着替えを持って来たから、ここに置いとくぞ。先生から許可が下りたら着てくれ。……あつ、そうそう。俺も今日は防衛局に泊まるつもりだから、何かあつたら呼んでくれ。俺はこれから、未佳と沙耶の様子を見に行つて来る」
ぼんぼんと大きなバッグから取り出したビニール袋を叩いて、ベッド横の棚に乗せる。

そのまま「じゃあ」と手を振り、病室から出て行こうとしたところで、背中に声が掛かった。

「待て」

見ると、奈美の眉間に、不快を示す皺が寄っていた。

「貴様……何故、我を責めない」

奈美はベッドから上半身を起こし、切れ長の瞳で真面目な返答を訴えて来る。

だから俺も、嘘を付かないで、本心で答えることにした。

「俺は天才になるうとは思うが、お前の理想に合うようなパイロットになるつもりはない。だから、お前の信頼には応えられるとは限らない。俺は俺で、自分の目標がある。それは、ある人に絶対に成し遂げると誓った目標だから、何物にも代えられない」

結局のところ、自分勝手なのは俺も同じだ。そして、それは曲げられないし、曲げたくない。

全ては信頼されてない俺の責任だ。ここで独断先行した奈美を責めるのは、筋違いだと思う。

「だけど俺は今、一度お前達のパイロットになった以上、出来る限

りのことはしたいと思っている。一人のスーパーロボットパイロットとして」

奈美の切れ長の瞳から目を逸らさず、俺は言った。

「だから、次はちゃんと、俺の指示を聞いてくれると嬉しい」
「……」

奈美はシーツの裾を握り締め、瞳を逸らす。

俺はそれ以上何も言わず、彼女の病室を後にした。

続いて、隣の病室を訪れてノックをすると、「にや!?」と中から驚いた声が聞こえ、少しして「ど、どうぞ」と許可が下りる。扉を開けると、ベッドの上で丸くなっている金髪癖っ毛の少女は、気まずそうな顔をした。

「ほ、ほーやん、えっと、ウチ、すぐにやられてしもって……!」
「気にしないで、今はゆっくりと休め。着替えを持って来たから、ここに置いとくぞ」

未佳はシーツで顔の下半分を隠し、俺の様子を窺いつつ、

「ウチのこと、怒らへんの……?」

ニユアンスは違うが、奈美と同じようなことを言う。

「あれは未佳のせいじゃないだろ。不意打ちだったし、宇宙怪獣の能力を計り損ねた俺の責任だ。どちらかと言つと、俺が謝らなきゃいけない。すまなかつたな、すぐに助けてやれなくて」

「そ、そんなことあらへん!」

ふるふると首を横に振る未佳。

「ただ、今までのパイロットはこういう時、優しい言葉なんて掛けてくれへんかったから……」

「俺だって、怒る時は怒るぞ。事実、前の時は怒ったろ。誰が見ても指摘するくらいバラバラのコンビネーションで、今までお前らは何を考えて戦って来たんだ、って」

「うん……けど、ほーやんはその後、呆れながらもウチらにコンビネーションを教えてくれた。今までのパイロットは、決してそんなことしてくれへんかった。だからウチは……」

彼女は続けて何かを言うが、小さくて聞き取れない。

「未佳？」

「うっん、何でもない。気にせんという」

今日の出撃前にも見せた、どこか思い悩むような表情。

沙耶がハートドライブに抱いていたものと同じように、未佳もまた何か思うところがあるのだろうか。

だが、俺が今聞いたとしても、未佳はおそらく教えてはくれないだろう。話してくれるまで、焦らずに待とうと思う。

「未佳、俺はこれから沙耶の様子を見に行くが、何かあったら呼んでくれ。今日は防衛局に泊まるつもりだから」

「さーやんは結構損傷が酷かったって聞いたけど、大丈夫なん？」

「というより、心の方かな、問題は……。けど、沙耶のことは俺が何とかする。未佳はゆっくりと休んで、身体の傷を直してくれ。三日後には、ミストリアとの決闘だからな」

「そうやったね……」

頷く未佳を見てから、二つ三つ言葉を交わして、部屋を出る。

俺は、沙耶の病室に向けて、歩き出した。

沙耶は戦闘による機体損傷が激しかった為、他の二人とは別の、スーパードット開発部棟に病室がある。

渡り廊下を通ると、窓から外を見ることが出来る。今は午後八時。日はとっくに落ちており、空は黒のカーテンに覆われていて、街の外観は見えにくい。ガラスには無数の水滴が張り付き、見えにくさに一層の拍車を掛けていた。

やがて、『サヤ』とネームプレートに書かれた部屋の前に辿り着く。ノックをした。

返事を待つが、物音一つ聞こえて来ない。デジャヴを感じて、病室の扉を開けると、ベッドはもぬけの空になっていた。

シートが捲れているところを見るに、部屋を間違ったとかそういうわけではなく、先刻まではこの場にちゃんといたのだろう。

しかし、今日は訓練というわけではあるまい。とりあえず部屋の

中にバッグを置いて、再び廊下を歩き出す。

と、角を曲がったところで、壁に寄り掛かり、煙草らしきものを啜えている白衣の女性にエンカウントした。

「やあ、弟君。無事で何より」

ニヤリとほくそ笑む姉さんがそこにいた。

これがロールプレイングゲームの中だったとしたら、間違いなく速攻で『にげる』のコマンドを選択していたことだろう。

俺は深くため息をついたが、おそらく狙ったことであろうから、尋ねる。

「沙耶がどこに行っただか知らないか？ 病室にいないんだ」

「知ってるよ」

「教えてくれ」

「いいとも。その代わりに」

姉さんは白衣のポケットから煙草のケースを取り出す。そこから一本取り出して、こちらに差し出して来た。

「一本付き合わないかね？」

よく見るとそれは、一箱六十円の煙草チョコレートだった。

第一支部の正面玄関の自動ドアを潜り、外に出ると、雨は既に止んでいた。

渡り廊下を歩いていた時は、窓に付いた水滴を見て、まだ雨が降り続けているものと思っていたが、どうやらそうではなかったらしい。空を見れば、雲の切れ間から白い月が覗いている。

一旦屋内に戻って、手に持っていた傘をロビーの傘立てに置いてから、再び月明かりの下に出る。俺は姉さんが教えてくれた場所に向かった。

そこは、第一支部の敷地内にある公園。

彼女の姿はすぐに見つかった。

公園の入口から少し歩いたところにベンチがあつて、病院服を着たピンクツインテールの少女は、そこに腰掛けていた。

「沙耶」

近くに行つて名前を呼ぶと、彼女は顔を上げる。ベンチの真上にある外灯に照らされた顔には、いつもの花咲くような微笑みも、必殺技を練習していた時のような凜と輝く表情もない。

敗北と絶望に塗れた、触れたら今にも壊れてしまいそうな弱々しさ、散る花のような儂さが、今はそのまま目の前の少女だった。

「北斗くん……」

少女は俯く。

「ごめん……北斗くん……。ボク、負けちゃつた……」

「俺は別に気にしてないさ。今回の負けを経験にして、次の時に勝てばいい」

「だけど、ボクは……北斗くにまだ何も返してない……！ 北斗くんから教わつたことを何も活かせてない……！ 何もっ！ ボクは何一つ役に立てないっ………！」

両膝の上に置かれていた少女の拳が、ぐつと握り締められる。

「ボクはいつも辛い目に遭つた時、北斗くんの言葉に助けられて来た。絶対に諦めるなつて言葉を信じられたから、ここまで来れた。いつか本当に信じられるパイロットに出会つて、サヤナミカに合体して、世界一のスーパーロボットになるの諦めないでいられた。夢を諦めなかつた………！」

初めて聞く、少女の本音。

「だからボクは、ボクに大切なことを教えてくれた北斗くんがパイロットになってくれた時、本当に嬉しかった。頑張つて、成長した自分を見て貰おうつて思った。必ず役に立ってみせようつて思った………！ 必殺技だつて、その為に練習した………！ だけど………」

ぼたり、と握り締めた両手の甲に雫が落ちる。

「怖かつたんだ、宇宙怪獣が………！ どうしようもなく、戦うのが怖かつた」

ばたばたと止め処なく雫が落ちて、手の甲を伝う。

「どんなに、大丈夫、怖くないって、自分に言い聞かせても、身体の震えが止まらなかつた……！ 何も出来なかつたんだ……！」
嗚咽を漏らしながら、目元を拭いながら、

「今までもそうだった。戦場に立つと、必ず身体が震える。怖くて仕方がない。スーパーロボットなのに、戦うのが怖いんだ……！
結局、どんなに頑張ったって、ボクはやっぱり」

少女は、ツインテールを振り乱し、声を絞り出す。

「出来損ないの、不良品だ……！」

ここに来る前に聞かされた姉さんの話によると、少女には昔、
恩人とも言える人物が存在したらしい。

もつとも、昔といつても、一年程前のことらしいが、サヤナミカ
がその頃に開発されたのを考えれば、少女にとっては昔と言えるの
だろう。

その恩人は、当時十六歳の高校生で、自身のことを天才と豪語す
る少年であったそうだ。聞くところでは、若干十四歳にしてスーパ
ーロボットのパイロットになったのだとか。この俺を差し置いて、
何ともおこがましい輩である。

少女が恩を感じた出来事を簡潔にまとめれば、パイロットにフラ
れて悲しみに暮れているところを励まされた、ということらしい。

姉さんは煙草チョコを齧りながら、

「おそらく、その少年は何気なく声を掛けただけで、全く覚えてい
ないだろうけどね。少女の方は、少年の言葉を大事に胸に閉まって、
今日まで笑顔で頑張って来たってわけさ。どうだい、少しは参考に
なつたかい？」

と意味ありげな視線を俺に向けて来た。

だから、俺は姉さんに、こう言葉を返してやったのだ。

「姉さんは、一つ大きな勘違いをしている」

俺は目の前の少女に言う。

「お前に、とある少年の話をしてやろう」

うな垂れるピンクツインテールを見ながら、話を始めた。

「一年くらい前、ちょうど今みたいな梅雨の時期のことだ。その日は、梅雨なんて嘘のように晴れていて、とても気持ちのいい一日だった。少年はスーパーロボットパイロットで、地球防衛局まで自主練に来ていたんだが、その日の終わり、廊下でピンク色の髪をした少女とエンカウトした」

ぴくり、とツインテールが反応し、少女は濡れた瞳をこちらに向ける。

「この世に生を受けてこの方、鮮やかなピンク色の髪なんて見たことがなかった少年は、驚いて少女に注目してしまった。そして、それが運の尽きだった。あるうことが、その少女は廊下でうずくまり、泣いていたんだ」

今日は一日、気持ちのいい一日で終わらせるはずだったというのが。このまま無視をして帰ったら、後味が悪い。

少年は悩んだ末、コマンドから『にげる』ではなく、『たたかう』を選択した。

「聞けば、その少女はスーパーロボットだった。廊下で鼻水と涙を垂れ流して泣き喚く姿は、少年の知るスーパーロボット像とは似ても似つかなくて、たいそう驚いた。しかし、鮮やかなピンク色の髪の原因も、それならばしっくりと来て、納得がいった」

少女が泣いている理由は、自分が幾ら練習しても合体出来ないからパイロットにフラれてしまった、というものだった。

合体という単語を聞いて、少年は「合体ロボなのかよ！」と思わずツッコんだが、真剣に悩んでいるらしい少女を見て、「合体出来るまで、ひたすら練習したらいいじゃないか」と言った。

「少女は少年に、夢はあるのかと質問した。少年は、あると答えた。少女は更に、自分にも出来るだろうかと聞いて来た。これまた真剣な眼差しだった。適当なことは言えない。少年は考えた末、無難な言葉を一つ選択して、少女に答えた」

目の前の少女と目線の高さが合うように腰を屈めて、俺は大きく

見開かれた瞳と対峙した。

「絶対に、諦めるなよ」

少女は何度か言葉を発しようとして唇を動かして、失敗してから、震えた声を出す。

「北斗くん、あの時のこと覚えて」

俺は少女の頬つぺたを両手の指で摘み、引っ張った。

ぐにーん。

「ふあ！？ ひひふあひふあひふふのは!？」

何言ってるか全く分かん。

俺は頬つぺたを摘まんだ指はそのままに、きっぱりと断っておく。

「一年前のことなんぞ、俺は知らん」

「ふえ？」

「白坂北斗とかいう同姓同名の男が一年前に何を言おうが、今の俺には関係ない。ついでに言うと、お前もそんな奴の言葉を、いつまでも胸に閉まってるんじゃない。絶対に諦めるなよ、いい言葉じゃねえか、ああ、結構だとも。けどな、お前には今、俺というパイロットがいる」

頬つぺたは引っ張っても、合わせた視線だけは逸らさない。

「戦場に立つ時は誰だって怖い。怖いに決まってる。得体の知れないう宇宙怪獣だぞ？ 天才たる俺だって怖い。だけど、俺はその怖さを乗り越えてあいつらと戦える。何でか分かるか？ それは、お前達スーパーロボットが、その装甲で俺を守ってくれているからだ。お前達が力を貸してくれるから、俺は怖くても戦える。だから、俺が今から言うことを決して忘れるな。お前が俺を守ってくれてるように、俺もお前を守ってやる。どんな逆境に陥っても、俺が頭をフル回転させて、作戦考えて、必ずお前を助けてやる。俺はお前のパイロットだ。怖いと思ったら、迷わず俺に言え。奈美と未佳だっている。お前は一人じゃない」

摘まんでいた頬つぺたを離す。

「そして、お前のパイロットである俺は、絶対に諦めるなよなんて投げっ放しなことは言わない。いいか、一回しか言わないから、よく聞け、沙耶」

上着のポケットに手を突っ込み、ここに来る前に、あらかじめ用意していた物を取り出す。

俺は『ミルクたっぷりカフェオーレ』と書かれた缶ジュースを、沙耶の眼前に差し出した。

「一緒に、頑張ろう」

唐突だが、沙耶の涙腺をダムに例えよう。頬つぺたを引っ張って完全に止めたと思われた沙耶ダムの水漏れは、俺の一言によって水漏れを通り越して一気に決壊した。穴が開いた所の騒ぎではなかった。コンクリの壁が全部吹っ飛んだ。

擬音にすると、こんな感じである。

「ぶええええええええええええんツ！！！」

顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら抱き付いて来る。ラグビーを超越した猛牛の突進のごときタツクルを喰らって、死ぬかと思っただ。あばら骨が何本か逝ったんじゃないかなろうか。

何にしても、沙耶は泣いた。わんわん泣いた。

鼻を吸るくらいになるまで介抱して、それからベンチに座らせ、ミルクたっぷりカフェオーレを飲ませて落ち着かせる。

それから公園の水で顔を洗った沙耶に、「そろそろ病室に戻るか？」「と尋ねると、彼女はようやくいつもの笑顔で「うん！」「と頷いた。

外に出たばかりの時は、月を囲うように鎮座していた雲も、今はどこかに消えてしまい、開けた夜空には数多の星が瞬いている。

「ねえ、北斗くん」

正面玄関に向かう途中、沙耶がツイントールの片方を右指にくると巻き付けて弄びながら、口を開く。

「ん？ どうした、沙耶？」

「あ、あのさ……」

何やら言いにくそうに、ちらちらと横目で盗み見して来る。

沙耶はやがて、頬に朱線を走らせて、言った。

「手……繋いでもいい？」

いつもの俺なら「断固拒否する！」と断っているだろうから、余計に言いにくかったのかもしれない。

「……今日だけ貸してやる。ほれ」

俺は右手を沙耶の前に差し出す。

沙耶は、ぱあっと表情を明るくして、ガッツポーズをする。

俺の手をぐわしを握り、万歳のポーズで、月に向かって吠えた。

「北斗くんの手、獲ったどおおお ツ！！！」

「前言撤回！ 返せ今すぐ！」

いつも通り拒否しておくべきだった。調子に乗るとすぐこれだ、全く。

というか、握力が強くて振り解けん！

「やだ！ 北斗くん、貸してくれるって言ったもん！ 男に二言は無いんでしょ！？」

「文章を読み返して見る！ そんな台詞はどこにも書いてない！」
空中で腕相撲をしているかのような格好になりながら、手を引つ張り合う。

「ぜえええつたいに離さないんだからあああ！」

「馬鹿力程度で天才パイロットたる俺が諦めると思ったら、大間違いだぞ！ 離さないなら料金を請求してやる！」

「いくら！」

「一秒五十円！」

「高いよ！？ ソレ、一時間で一万八千円だよ北斗くん！？」

悪戦苦闘の末、結局、俺が折れる。今日は色々なことがあり過ぎて、もう疲れた。

「やったあー！ ボクの勝ちー！」

歩きながら、繋いだ手をぶんぶん前後に振る沙耶。

しかしまあ、沙耶が幸せそうなら、それでいいか、とも思う。

「北斗くん」

「何だ」

そう言っつて、何気なく沙耶の顔を見ると。

「ボクね」

そこには、一年廻って春がやって来たかのような、

「北斗くんがパイロットで……本当に良かった！」

満開の、笑顔の桜が咲いていた。

第三章 / 譲れないもの・1

少女が時折迷い込む世界には、いつも一つの法則が存在していた。法則と言っても、認識できるのは少女のみであり、他の住人は法則の存在すらも知らないでいた。

その法則とは、少女が知る、ある一人の人物が必ず存在しないというもの。

そもそも少女の迷い込む世界は、少女がいつも暮らしている世界と一切変わらぬ姿をしており、そこに住む人々もまた、名前も、外見も、記憶さえも、少女がいつも暮らしている世界の人々と同一の物なのだが、法則上、少女の親しい人物だけが必ず欠けていた。

だから、少女はその世界に迷い込むのが大嫌いだった。

何せ、一つのことを除いて、普段と何も変わらぬ世界であるから、迷い込んだかどうかを知るには、親しい人物が欠けていることを確かめなければならない。

そして、少女はその度に絶望するのである。

迷い込んだ世界の住人は、いつもと変わらず、少女に優しく接してくれる。

「必死なのは分かるけど、そんな人知らないよ。ねえ、どうしちゃったの？ 熱でもあるんじゃない？」

住人は、少女が別の世界から迷い込んでいることさえも知らないのだ。

枕元で携帯のアラームが鳴っていた。

俺は半覚醒の意識で手を伸ばす。手探りで携帯を見つけ、開く。

やや霞みの掛かった視界で液晶画面を見ると、五月十四日の金曜

時刻は朝の八時半。

思わず、「ん？」と首を傾げる。

学校の朝のホームルームが始まるのって、八時四十分からじゃなかったっけ？

いや、そもそも俺って、沙耶、奈美、未佳の朝飯を作らなくてはならないし、登校前に洗濯物を干さなくてはならないから、毎朝五時には起きてたはず。

……………。

つまり、これは、あれだ。

「寝過ごしたああ ツ!!!」
がばつと上半身をベッドから起こす。

「……………って、あれ？」

周りを見て、そこが自分の部屋でないことに気付く。

二段ベッドが二つ並んでいる部屋で、俺はその片方、下の段のベッドにいる。部屋の奥に一つだけある窓にはカーテンが無く、快晴の青空が覗き、朝日が直に差し込んで来ている。

ああ、そうか、思い出した。俺、防衛局の仮眠室に泊まったんだっつた。

沙耶を病室まで送り届け、その後洗面所に行って、持参した歯ブラシで歯を磨き、仮眠室に着いて、携帯のアラームをセットしたところで、力尽きて眠ってしまったのだ。何しろ昨日は色んなことがあり過ぎた。

ちなみに、今日は学校を休む予定でいる。沙耶達がちゃんと回復したかを確かめなくてはならないし、たとえ回復を終えていたとしても、すぐに学校へは行かせられない。彼女達を置いて俺だけが登校するのも、無責任だと思う。学業はもちろん大事だが、俺の本業はこっちなのだ。

携帯の電話帳で高校を選択し、電話を掛ける。事情を説明して、今日は休む旨を伝えた。

「ノートはクラスメイトに頼んで、後で見せて貰うとして……」
友人にメールを打って、送信する。

「これでよし、と」
携帯を閉じる。

そうして、ベッドから立ち上がるのと、右手を支えにすべく手を
下に着いたところで

ふにつ。

「ん？」

俺はやたらと柔らかい感触に遭遇した。

ゴム部品としてよく使われるシリコンやら、ベッドの枕とかによ
く使われる低反発素材やら、地上十八メートルの高さから生卵を落
としても割らずに受け止める、アルファゲルよりも柔らかい。

そう、例えるならば、マシユマロのような柔らかさ。

嫌な汗が一筋、額から顎に掛けて伝う。錆びたロボットのように
動かない首を、ギギギと鳴らしながら横を見る。

「うにゅー……むにゃむにゃ」

乱れ気味の病院服を着た金髪癖っ毛の少女が、猫のように身体を
丸めて、気持ち良さそうに眠っていた。

「き」

叫ばずにはいられなかった。

「きゃああああああ ツー!!!」

後退さつて、ベッド奥の壁に頭を強打する。その場で頭を抱え、
「ぬおおお!？」と痛みに悶えていると、ぐしぐしとまだ眠たそう
な眼を擦りながら、未佳が上半身を起き上がらせる。

「何やねん……女の子のような悲鳴を上げて……」

「上げたくなるわ! 何だこの状況!? 何で未佳が俺の横で寝

てるんだ！」

「にやう……？」

眠たそうな糸目をこちらに向ける。ただでさえ癩っ毛の頭は、癩も加わり、今やライオンのたてがみのようになってる。

病院服のほだけだ鎖骨辺りを搔きながら、未佳はいつもの「ふしやああああああ」という猫っぽいあくびをする。状況が分かってるのか分かってないのか、そもそも起きてるのか起きてないのか、糸目のまま微笑む。

「あ……誰かと思ったら、ほーやんやないか……。おはよー」

「うん、そうだね！ おはようだね、未佳さん！ だけど、どうしてここにいる！？」

「にやー。昨日……夜中にトイレに行つて……」

「トイレに行つて？」

「廊下に出て……自分の病室だと思つて開けたら違う部屋で……ベッドに、ほーやんが寝てて……」

「俺が寝てて？」

そこで会話が途切れる。

ふと、未佳は糸目を上の方に向ける。視線を追うが、そこには何もない。

やがて、彼女は口の端から、じゅるりと涎を垂らして、

「サンマが食べたい……」

「起きんかつ！」

俺は未佳の額にチョップを喰らわした。

「あにやつ！？」

糸目が開かれ、額を擦りながら、驚いたように瞬きをする未佳。

「はっ……一体、ウチは何を……？ というか、ここはどこや？」

「ようやく目が覚めたか。ここは防衛局の仮眠室だ」

「え？」

俺を見るや否や、彼女は瞳を見開いて、大声を上げる。

「ほーやん！？ 何でウチと同じベッドに！？」

「俺が何でか聞きたいわ！」

「まさか、ほーやん、ウチに夜這いを仕掛けて、いやらしいことを……！」

「夜這いされたのは俺の方だけどね!？」

未佳は顎に手を当て、眉間に皺を寄せる。

「つまり、この状況は」

キリツとした視線を俺に向けた。

「ウチがほーやんに誘拐された」と

「違うっつってんだろ！」

身内を誘拐する誘拐犯が一体どこにいるというのか。

と、未佳が俺の顔を見て吹き出す。手をひらひらさせて、「冗談や、冗談」と言った。

「分かつとるよ。何となくやけど、昨日の夜ここに来て、眠ってしもうたのは覚えとる。ウチとしたことが、どうやら寝ぼけてたみたいや。ごめんな、ほーやん」

「いや、ロボットが寝ぼけるってどうなんだそれ……」

一応、スーパードロボットの人型インターフェイスにもスリープモードというのが存在し、人間に近い生活を送る為に、基本、夜はAIの活動を休止するよう設定されている。しかし、さすがに寝ぼけるなんていうプログラムは無いはずである。

にも関わらず、それを実行してしまう辺り、サヤナミからしいという事なのかもしれない。

「ところで、さーやんのことはどうなったん？」

はだけ気味になっていた病院服を直し、未佳が訊いて来る。

「元気になったよ。それどころか前よりもパワーアップして、むしろ空回りしないか心配なくらいだ」

沙耶はもう大丈夫だと思う。彼女はきつと……いや、必ず前よりも強くなる。俺が背中を支えてやれば、あいつは怖さを乗り越えて、幾らでも強くなれる。俺はそう信じている。

未佳は俺の顔をまじまじと見つめてから、呆れたような笑みを浮

かべた。

「さーやんは本当にもう、心配いらなないみたいやね。ほーやんがそんな『笑顔』を見せるってことは」

「まさかのスマイルアゲイン!？」

不意打ちに堪え切れず、両手で顔を隠す。落ち着け、白坂北斗。これは間違いだ。俺の顔が知らず知らずの内に笑ってたなんて、何かの間違いに決まってる!

しかし、未佳は小首を傾げて、泣きつ面に蜂な一言。

「うん、めっちゃ頬が緩んでたよ?」

「それ以上言うなあああ!」

馬鹿! 俺の頬筋の馬鹿あ!

俺が一人、羞恥心と格闘していると、ふと未佳の声色が変わった。

「なあ、ほーやん」

「ん?」

顔を隠した両手の、指の隙間から未佳に視線をやる。

彼女はベッドのシーツを握って、俯き様に言った。

「ほーやんは……もしもウチがさーやんみたいになった時、同じように助けてくれるんやろか……?」

やけに不安そうな声だった。

考えるよりも先に、自然と口から言葉が出ていた。

「当たり前だろ、そんなこと」

未佳のボサボサのライオン頭に手を置く。

「俺は沙耶のパイロットであると同時に、お前のパイロットでもあるんだ。悩んでることがあったら、俺に言えばいい。つーか、言え」

最近の未佳は、表情に出さなくとも、今みたいな雰囲気を感じていることがよくある。沙耶が笑顔で自身の不安や怖さを隠していたように、未佳も同じく何かを、装った平静の裏に隠しているような気がするのだ。

だから、何かあるなら言って欲しかった。仮にもパイロットである以上、出来る限りのことはするつもりでいる。

顔を上げた未佳の表情は、緩んでいた。

「そつか……おおきに！」

口から八重歯を覗かせて、にかつと笑う。

「じゃあ、せつかくやし、ほーやんに少し、甘えさせてもらおうかな」

「よーし、何でも言ってみる。どんな悩みだろうと、天才パイロットたるこの俺が、たちどころに解決してみせよう！」

未佳は顎に人差し指を当てて、首を傾げる。

「んー、悩みと言うより、お願い？」

「は？」

突然、「にゃあー！」という掛け声と共に、未佳が抱き付いて来る。そのまま俺は、ベッドに押し倒された。

「えっ、ちよっ、何！？」

「五分でいいからウチの抱き枕になつて欲しい！」

「はあああ！？」

未佳は俺の胸に頬を押し付ける。のほほんとした顔で言う。

「にゃー、ほーやんはやつぱ温かいわー」

「おい！俺は悩み相談に乗るという意味で甘えるのを許可したのであって、こういうスキンシップを許可したわけじゃないぞ！」

「なあ、ほーやんって、人より少し、平熱高いやろ？」

「人の話を聞け！確かに平熱は高いけど！三十七度ジャストだけど！」

「やつぱりー。何かしつくり来る温かさなんよー」

「いいから退かんか！」

「五分やて五分ー」

ぎゅつと抱き付く腕の力を強める未佳。

俺もまた引つ剥がすべく腕に力を込めるが、金髪癖っ毛少女の身体は、瞬間接着剤でくっ付けたかのように動かない。

「あー、もう！どいつもこいつも、いらんところでスーパーロボットの馬鹿力を発揮しやがって！つーか、腹にマシユマロが当た

ってる、マシユマロが！」

「ましゅまる？」

「さも分かってないようなフリをして、ここぞとばかりに身じろぎするんじゃない！」

ばたばたと足を動かして抵抗を試みていると、大きな音を立てて、勢いよく仮眠室の扉が開く。

私服のライトブルーポニーテールの少女が、中に入って来た。

「貴様ら！ もうすぐ朝の九時だと言うのに、廊下に響くくらいの大声で、何を騒いでいる！ 我はもう完全回復したぞ！ さっさと合体練習なり何なり」

と、そこで奈美の口が止まる。俺と目が合った。続いて、俺に密着している未佳を見る。

奈美は真顔のまま、後ろ歩きで廊下に戻り、扉を閉めた。

「ごゆっくり」

「ちよっ、待ってえええ！ 奈美、誤解だああッ！！！」

俺が叫ぶと、再び仮眠室の扉が開く。

「安心しろ。我とて男女の仲を邪魔する程、無粋ではない。ここで見たことは忘れ、廊下で聞き耳を立てているから、心配せずに続きをするがよい」

「盗み聞きする気満々じゃねーか！ というか、誤解だ！ これは未佳が一方的に……！！」

「分かってている。未佳が夜這いをしに来たというのだろうか？ しかし、そこは愛し合う男女。どちらが先に仕掛けたかは問題ではない」

「違う！」

「おっと、そうか、すまぬ。この場合、夜這いと言うのではなく、朝這いと言った方が正しいか」

「語呂悪っ！ そして、どうでもいい！」

駄目だこの子、俺の話を聞く気、全くない！

未佳は未佳で、一向に離れる気配を見せず、「にゃはは、朝這い朝這い」と俺の上で、はしゃいでいる。

何かこの状況を打開する手はないのかと考えていると、部屋の外、奈美の背後に、満面の笑みを浮かべるピンクツインテールの少女が立っていた。

「北斗くん」

「沙耶、いいところに！」

「どうしたの？ 何か騒がしいね」

沙耶はスキップをしながら、奈美の横を通り、室内に足を踏み入れる。

俺は状況を簡潔に説明する。

「朝起きたら未佳が横で寝てて！ その未佳が馬鹿力にものをいわせて抱き付いて来て！ そこに奈美が入って来て！ 俺と未佳の関係を誤解してて！ とにかくそんな感じだから、未佳を引っ剥がすのを手伝ってくれ！」

「うん、分かったよ」

にこにこ笑顔を湛えたまま、沙耶は両手を上に掲げ、巨大な火球を作り出す。……あれ？

「えっと……沙耶さん？」

「なあに、北斗くん」

「人を一人引っ剥がすだけなのに、どうしてそんな火球が必要なんでしょうか？」

しかも、気のせいか、かなりデカイ。軽く直径一メートルくらいある。

「え？ こうした方が楽かなあ、と思つて」

そして、気のせいか、沙耶の笑顔が怖いものを感じられて来る。よく見ると、頬が引き攣っているような……。

「あの……沙耶さん？」

「なあに、北斗くん」

「ひょっとして」

俺は自分の推測が外れていることを神に祈りながら、訊いた。

「めっちゃくちゃ怒ってます？」

返答の代わりに、沙耶は火球を大きく振り被る。

「北斗くんのバカアアア　　ッ！！！！」

ドカアアアッ、パライイインッ、チュドオオオ　　ンッ！！！！

仮眠室が一つ、跡形もなく消し飛んだ。

沙耶の頬が、ヒマワリの種を貯め込んだハムスターみたいに膨れている。

スーパーロボットがおたふく風邪にかかるはずもなく（サヤナミ力ならばないと言い切れないが）、今朝の出来事を怒っている為である。

俺は焦げてしまった前髪を弄りながら、演習場に並んだ三人娘に言う。

「えー、知っての通り、決闘まで今日を含めてあと二日しかない。昨日の宇宙怪獣の襲撃で、合体練習が出来なかった分を、今日学校を休む代わりに、午前中からやろうと思う」

時刻は午前十時とあって、演習場には局員の人達がちらほらと行き交っているのだが、近くを通り過ぎる度に、湿布・ガーゼ・包帯・絆創膏だらけの俺を見て、くすくすと笑い声を洩らす。

俺はこんな状態だというのに、原因を作った未佳はというと、あろうことか鼻頭に絆創膏一つ。生身の人間と、圧縮ナノマシンで構成されたスーパーロボットの差とはいえ、理不尽さを感じずにはいられない。

沙耶に視線を移すと、膨れっ面のまま、ぷいっとそっぽを向かれてしまう。

昨日の一件を通して、沙耶はもう大丈夫だと確信していたが、今は不安しかない。今日一日は、まともに口すらも聞いてくれないだ

ろう。二日前にこの調子で、果たして大丈夫なのだろうか。

とりあえず、考えているだけでは仕方がないので、俺は続ける。

「昨日の敗北は確かに残念だった。だけど、こうして三人共無事だったし、俺はむしろ、昨日、宇宙怪獣に敗北して良かったんじゃないかと思ってる」

奈美の眉がぴくりと動いたが、彼女は何も言わない。

「何故かと言うと、昨日の戦いが、二日後の決闘の予行演習としての意味を持ったんじゃないかと思うからだ。負けたおかげで、各々に足りないものが見えて来たんじゃないか？ 特に奈美と沙耶」

「……ふん」

奈美は切れ長の瞳を伏せて、肩に掛かったポニーテールを背中に退ける。

「むー」

沙耶は膨れている。ぷいっ。

俺は冷汗を垂らしつつ、

「えーと、何が足りないのかは、あえて言わない。いずれにしても今回負けたからこそ、その失敗を経験にして、俺達は前よりも強くなるはずだ。じゃあ、とりあえず、三機ともロボットモードに変身してくれ」

「了解や」

未佳だけが返事をし、他の二人は黙ったまま。

三人娘は圧縮ナノマシン活性化の光に身を包む。巨大化して、鋼鉄の装甲を纏う姿となった。

俺は片手にぶら下げていた拡声器を口元に当てる。

『ハートドライブ出力の測定は、一時間後に姉さんが来てから始める。それまでは、病み上がりだから、各機の調子を確認しつつ、段々と慣らす感じで行く』

演習場に来る前に、携帯で姉さんに連絡したのだが、何やら用事があるとかで、来るのは十一時くらいになるとのことだった。電話を切る直前に、「楽しみにしていたまえ」と言っていたが、一体何

の事だろうか？

それはともかくとして。

『三機共、準備はいいか？』

「ウチは問題ないで」

「我もだ。今朝起きた時点で、損傷した部分は完治している。遠慮などいらん！」

「むー」

サヤは黄色いアイカメラを、頑なにこちらへ向けようとしない。しかし、こればかりは聞いておかないわけにはいかない。

『サヤ。怒ってるのは分かるが、返事くらいはしてくれ。もしもお前の調子が悪かったとしたら、無理はさせられない』

「北斗くんはボクのことなんか、別にどうだっていいんでしょ！ミカちゃんのことだけ気にしていればいいじゃん！」

『だから、あれは誤解なんだって！ 何度も説明したろ？』

「乙女には頭で理解は出来ても、心で納得出来ないことがあるの！」
『俺に一体どうしろと言うんだお前は！』

起きて二時間と経っていないのに、既に俺の身体も精神もボロボロの中の上、眼前にそびえるピンクカラーのスーパーロボットの乙女心を察しなければならぬとは、もはや一種の拷問としか思えない。

「知らない！ 自分で考えれば？」

腰に手を当て、頭部の側面を向けるサヤ。

俺にだって我慢の限界というものがある。拡声器をそのまま地面に叩き付けてやりたい気分になったが、取っ手を握り締めて抑える。代わりに俺は、声を大きくして、言い放った。

『ああ、そうかよ！ だったら、勝手に進めるからな！ 言いたいことがあるなら今の内に言っとけよ！ やる気が出ないとか、調子が優れないとか、途中で言われても迷惑なんぞでな！』

サヤが一步、後退さりをする。

「なっ………！」

『何だ？ 何か文句があるなら、はつきりと言え！』

「そういう態度取るんだ北斗くん……！ いいよ、分かったよ！ 勝手にすればいい！ ただ、合体練習はやらせてもらうよ！ ボクだって決闘に負けたくないからね！ 平気さ！ 傷はもう全快したもん！」

『あつ、そう！ よかったね、おめでとう！ はいはい、三体共、少女合体スタンバイ！ こんな下らないことで時間を割いてる暇なんかないんだよ！ 合体練習を始めるぞッ……！』

拡声器を沙耶の方に向けて、大声の集中砲火を浴びせてやる。

サヤは「言われなくなつてやるよッ……！」と外部スピーカーの音量をマックスにして返し、シヨルダーアーマーを怒らせながら、ドストドスンと地響きを鳴らして、演習場の中央へ歩いて行く。

ナミが「やれやれ」と首を横に振り、それに続く。

残ったミカが、リアアーマーに生えた尻尾をくるんと丸めながら俺を見て、再び垂らしながらサヤに視線を移す。

「まあ、こんな感じが、やっぱりウチらなんやろっね……」

かろうじて聞き取れるくらいの声で呟き、サヤとナミを追って歩き出す。

何故か俺の目に、そんなミカの後ろ姿が焼き付いて離れなかった。

どうやら、サヤにも意地というものがあるらしい。

合体練習を始めてから約一時間、サヤは以前とは別機体のような動きを見せていた。

俺が『合体許可！』と指示を出すなり、素早くサヤナミカの胴体パーツへ変形し、次に続くミカの変形とジョイントを待ち構えている。

俺に対する敵愾心のつもりなのだろうか。やれば出来るのなら、前々からこれくらいの動きを見せて欲しいものである。

サヤだけが別次元の動きをしているせいで、後続のミカとナミは付いて来れず、結局合体は失敗してしまうのだが、サヤ本人は合体シーケンスを終える度に、俺にどうだと言わんばかりにアイカメラを向けて来る。

なので俺は、拡声器を向け返してやった。

『サヤ！ 一人で突っ走ってないで、ちゃんと他の二人にも注意を払え！ 確かに変形は早いけど、全く周りが見えてないだろお前！』

「はあ！？ 見えてるよ！ 勝手に決めつけないでくれるかな、北斗くん！ ボクは素早く変形した上で、ちゃんとミカちゃんが合体しやすい位置で待機してるよ！」

『いいや、見えてないね！ お前は合体シーケンスの自分の務める部分だけさっさと完了して、後はミカとナミ任せにすればいいと思ってる！ スムーズに変形出来ればいいってものじゃない！』

「見えてるよッ！！！！」

『見えてないッ！！！！』

コンクリートの地面を揺らし近付いて来たサヤが、腰を屈め、至近距離でアイカメラを発光させる。

俺が真っ向からそれを睨み返していると、後ろから声がした。

「何だ何だ、何を騒いでいるんだい？ 昨夜の内に和解したはずじゃなかったのかね？」

聞き慣れた姉の声である。

俺は黄色いアイカメラに視線を合わせたまま、拡声器で答える。

『別に！ ただ、このピンクのスーパーロボットがあまりにもワガママな態度なんで、抗議してただけだ！』

「ワガママ！？ 北斗くんこそ、女の子の気持ちをこれっぽっちも考えようとしてないじゃないか！」

『怒るのは構わないが、公私混同するなって言っただよ！ 今は合体練習中だ！』

言って、俺は拡声器を口から離す。

「全く……。ところで、姉さん、ノートパソコンと測定器は持って

来てくれたか？」

「ああ、持って来たとも。というか、持って来ないことには、私がここに来る意味がないからね」

「じゃあ、早速で悪いけど、ノートパソコンを起動して……」

声のする方に目を向けて、俺は絶句した。

穢れのない純白の衣を見に纏った、艶やかな黒髪ストレートロングの女性が、そこに立っていた。

とてつもなく綺麗だと思った。率直な感想を言えば、俺は生まれてこの方、こんなにも綺麗な人を見たことがない。何か色々と言葉で表現したい気持ちに駆られたが、上手く言葉に出来ない。とにかく俺には、彼女がキラキラと輝いて見える。

彼女は桃色の口紅を塗った唇を笑みの形に変え、薄紅色のマニキュアを塗った爪で、そつと自身の黒髪を梳いた。

「驚いたかね、弟君？ 久しぶりに、美容院に髪を切りに行ってきたんだ。ついでに白衣を新調して、せつかくだから化粧なんてものもしてみたのだが、この髪型……似合っているだろうか？」

何気なく横を見ると、腰を屈めたサヤも沈黙したまま彼女を凝視している。声が出ないようだった。

なので、先に口を動かせるようになった俺が訊く。

「あの」

「何だね？」

「どちら様でしょうか？」

「分かってないんかい！」

白衣の女性が笑みを崩し、ツツコミを入れて来る。あ、姉さんだ。「何だ、誰かと思ったら、姉さんだったのか。美人に変装なんてして来るから、一瞬誰かと思ったじゃないか。紛らわしい」

「美人に変装ってどういうこと！？ 酷いじゃないか、弟君！ せつかくお姉ちゃん、頑張って綺麗になって来たのに！ そう思うだろ、サヤ！？」

姉さんはピンクのスーパーロボットに話を振る。

「サヤは「えっ……」としばし答えに窮してから、こくこくと頷く。「そ、そうだね、博士！ 博士は元から美人だもんね！」

「どう考えても、サヤも姉さんだと分かってなかったとしか思えない。」

俺は姉さんに言う。

「とりあえず、姉さんが美人なのは昔から知ってるから、今更どうでもいい。貴重な合体練習の時間なんだ。早くハードドライブ出力の測定の準備を始めてくれ」

「ちえー、分かったよ……せつかく白衣も新しくして、口紅とかアイシャドーとか化粧して来たのに、少しは褒めてくれたって……ん？ 弟君、今何かさりげに褒めてなかった？」

「褒めてない。とにかく、ノートパソコンをさっさと起動しろっつーの」

それからやたらと上機嫌になった姉さんは、パイプ椅子を二つ並べ、片方に小さい箱型の測定器を置き、もう片方に自分で腰掛ける膝の上でノートパソコンを開いて、電源を入れた。

しばらくして、キーボードを弄り、親指を立ててゴーサインを出す。

「いつでもオツケーだよ、愛しの弟君」

ウインクをする姉さんから俺は顔を逸らし、未だ腰を屈めているサヤに向き直る。

「サヤ、お前も、さっさとナミとミカのところへ戻れ。二機共、途方に暮れてるじゃないか」

見れば、ナミとミカは演習場の中央でコンクリートの上に座り込み、雑談に耽っている。

と、俺はサヤからの強い視線を感じた。ロボット状態の彼女に表情は存在しないのだが、黄色いアイカメラから、ビームの如き目力が発せられている気がする。

人間の仕草で表現するならば、ジト目。

彼女は腹の底から響くような声を出す。

「北斗くんって……そういうタイプが好みなんだね。ボク、知らなかったよ」

「は？」

「おしあわせに！」

その一言を強調し、サヤはこちらにバックパックを向けると、当たつけのようにブースターを点火して、低空飛行で戻って行く。

「危なっ！……何なんだあいつ！」

もはや、わけが分からない。

姉さんが白衣のポケットから取り出した煙草チョコを啜えながら、訊いて来る。

「ところで、弟君はサヤと喧嘩でもしたのかね？ 明らかに態度に怒気が含まれている気がするのだが」

「色々あったんだよ。自分でも何でこんなことになっているんだか、全く分からん」

「ふむ……今までサヤは、パイロットに笑顔は見せても、怒ったりは決してしなかったんだがねえ……。これはひよっとすると」

左手で顎を擦りながら、姉さんはノートパソコンを操作し、ハードドライブ出力のサヤの項目を開く。

ひよっとすると……何だというのだろうか。ただ、姉さんの言葉で、俺もある期待を持つ。もしもそうだったとしたら、俺は。

意識しても震える手で、拡声器を握り締め、三人娘に指示を出す。『合体練習を再開する！ 今後は従来通り、ハードドライブ出力を

測定しながら行くから、各機とも気を抜かず、全力で練習に取り組むこと！ 三機共、調子は良好のようだから、ビシビシと指示を出して行くんで、そのつもりで！』

「待ちくたびれたぞ」

「ほーやん、お手柔らかに頼むで」

「……」

ナミとミカが立ち上がり、サヤは黙って仁王立ちをしている。

『よし、準備はいいか？ 始めるぞ』

俺は手首のSRコマンドを掲げ、叫んだ。

『合体許可!』

「……少女合体ツ!!!!」

色の異なる三機が変形し、空中で合体を開始する。俺は出来る限りの大声で、三機が聞き逃さないように指示を出す。

今まで幾度となく繰り返し返して来た、合体シークエンス。三機共に各パーツへの変形はスムーズになったが、ジョイントの位置とタイミングがなかなか噛み合わない。

サヤとミカのジョイントが失敗し、三機はロボットモードに戻って着地する。

俺は拡声器から口を離し、深呼吸をしてから、姉さんに尋ねる。

「……姉さん、三機のハートドライブ出力は?」

ニヤリと口元を歪める髪伸び放題じゃなくなった悪魔。何も言わず、ノートパソコンの画面をこちらに向ける。

俺は近付いて、パソコンを覗き込む。

その時、湧き上がって来た感情は、簡単には言い表すことが出来ない。俺は言葉通り、居ても立ってもいらなくなる。

極力感情を表に出さないように努めながら、それでも震えてしまおう声で、拡声器で、一人の少女の名を叫んだ。

『サヤッ!!!!』

俺の言葉から何かを感じ取ったのか、ツインテールのロボットは、臆したように小さな声で答える。

「な、何さ」

『今すぐロボットモードを解除して、こっちに来い!』

「ボ、ボクはちゃんとやってるよ! 何でボクだけ……!」

『いいから来い! 今すぐ!』

それでもサヤは、叱咤されるのを恐れているのか、その場を動こうとしない。

「姉さん」

俺は拡声器を地面に置いて、白衣の女性が持っているノートパソ

コンを指差す。

「悪いんだけどそれ、貸してくれるか」

姉さんはノートパソコンを二つ折りにして、俺に手渡してくれる。「いいとも。ただ、大切なデータが入ってるから、出来るなら壊さないで頂けるとありがたい」

「ありがとう。落とさないように気を付けるよ」

ノートパソコンを小脇に抱え、俺は三人娘がいる演習場の中央に向かって歩き出す。

俺の方からやって来るとは思わなかったのか、サヤは一步後退する。

俺はピンクのボディーから視線を外さず、一直線に歩を進める。

やがて、サヤの前に辿り着く。俺は彼女を見上げた。

「サヤ」

「う……な、何なのさ、一体……！」

アイカメラを合わせようとしないサヤに、俺は言う。

「今すぐ人型インターフェースの姿になってくれないか。大事な話がある」

「……」

サヤは黙り込んで、しばらく考え込むように、そっぽを向いているが、圧縮ナノマシンの光を放ち、身体を縮小させる。

光が消えると、ピンクのスーパーロボットと同じく、そっぽを向くポーズの少女が、俺の目の前に立っていた。

「言われた通り、人間の姿になったよ。それで何、大事な話って？
ボクのこと怒るわけ？ さっきから言ってるけど、ボクは自分に出来ることを精一杯やろうと思ってる。決して手を抜いてるわけじゃない」

「分かってる」

「えっ……」

ツインテールを揺らして、沙耶が俺とようやく目を合わせる。

「沙耶が一生懸命なのは、俺もよく分かってる」

俺は小脇に抱えていたノートパソコンを手に取り、画面を開く。
彼女にそれを見せた。

「これは……」

「さっき測定した、お前のハートドライブ出力のデータだ。これをお前に見せたかった」

パソコンの画面には棒グラフが二つ、横に並んでいる。

右が、スーパーロボット一般機の平均的なハートドライブ出力。

左が、先程測定した沙耶のハートドライブ出力だ。

そして、右の棒グラフを、左の棒グラフが追い抜いていた。

瞳を見開いて、呆然としている沙耶に、俺は続ける。

「お前はずっと諦めなかった。決して諦めなかった。だから、これはちゃんとしたお前の実力だ。ここ数日の出来事がお前を変えたんじゃない。お前が諦めずに歩んできた、全ての結果だ」

ピンクの頭に手を置くと、びくつと彼女は肩を震わせる。

大きな瞳が俺を見た。多分、パソコンの画面に映っている情報が信じられないのだろう。彼女は俺の言葉を待っている。

だから俺は、彼女の頭を撫でて、告げてやった。

「頑張ったな、沙耶。お前はもう、出来損ないでも、不良品でもない。ちゃんとした、一機のスーパーロボットだ」

沙耶が何も言わず、抱き付いて来た。

俺も黙って、彼女を受け止める。

俺の胸に顔を押し付けたまま、彼女は口を開く。

「ごめん……！ ごめんね、北斗くん……！ ボク、喧嘩なんかするつもりじゃなかった……！」

「いや……俺の方こそすまなかった」

抱き付いている沙耶はそのままに、ノートパソコンを閉じていると、いつの間にか人型インターフェイスに変身した奈美と未佳が、こちらにやって来る。

奈美は早足で歩み寄ると、万力とも言える力で、いきなり俺の肩を掴んで来た。

「おい、どういふことだ貴様！ 沙耶のハートドライブ出力が一般機平均を超えたとしてもいふのか!?」

「痛っ……!! 奈美、握力を少し緩めてくれ!」

「どうなんだ! 答えろ!」

切れ長の瞳が握力と同じくらい、強く、回答を迫って来る。未だかつてない程に鋭い瞳だった。殺気すらも感じる。

なので、俺は「そうだ」と答えてやった。

「さっきの合体練習で、沙耶の発するハートドライブ出力は一般機平均の百四パーセントを記録した。一時的にはなく、終始安定して」

「馬鹿な……! いつの間にかそんな……!」

沙耶が顔を上げる。目元をぐしぐしと拭って、奈美に笑顔を見せる。

「北斗くんのおかげだよ。北斗くんがボクに、一人じゃないってことを教えてくれたんだ。だから、今は前よりも強い力を出すことができる」

「一人じゃない……だと?」

「ボクの側には、北斗くん、奈美ちゃん、未佳ちゃん、博士、皆がいるってこと。奈美ちゃんだって、同じだよ。それさえ分かれば、奈美ちゃんだって、すぐに力を出せるようになる」

奈美は俺の肩から離れた手を、ぐっと握り締める。

「我には……分からない……!」

沙耶はどうやら、昨夜の俺の言葉から、自分なりの強さというものを見つけたらしい。

そして、彼女が言っていることは、確かに的を射ている気がした。奈美は何でも一人でやろうとする。俺と出会う前の奈美を知らないから、元からそうだったのか、パイロットにフラれたことでそうなったのかは分からないが、もう少し他人を信じ、頼ることが出来るようになれば、変わるんじゃないかと思う。

しかし、今の俺は、そのことを指摘出来る立場にはいない。俺は

まだ、ミストリアとの決闘が終わった後のことを何一つ決めてはいないのだ。

本当は、沙耶が俺のことを慕ってくれているのも、不思議なくらいだ。

沙耶の言葉を聞いて、奈美を見て、俺は今、この瞬間、思う。

俺は果たして、このままでいいのだろうか。

決闘が終わるまでは悩まないと決めていたが、それでも考えてしまっ。

昨夜、沙耶に言った「一緒に頑張ろう」に嘘はない。しかし俺は、サヤナミカへの合体に成功したら、彼女達から離れて行くことを選択するだろう。

俺には、夢がある。十年前に約束した、どうしても果たさなくてはならない、果たしたい夢が。

ふと、少しだけ離れたところで、未佳がこちらを眺めていることに気付いた。

「未佳……？」

再びあの不安そうな雰囲気を漂わせて、彼女は立ち尽くしている。こちらを眺めているにも関わらず、彼女とは決して視線が合わない。どこか遠いところを見ているような、虚ろな瞳。

思えばこれが、すぐ後に起こる出来事の予兆であった。

それから合体練習は、昼食の休憩を挟んで、午後の部へと続くわけだが、練習を再開するやいなや、ミカにある異変が起こる。

ミカがサヤナミカの腕パーツに変形する際の動きに、目に見えてキレが無くなり始めたのだ。例えるならば、錆びたロボットが無理やり関節を動かしているかのような、そんな鈍い動き。

合体に失敗し、地面に着地して、片膝を着いたミカに、俺は拡声器で注意を促す。

『ミカ！ 変形が遅過ぎるぞ！ それじゃサヤの変形に追い付けない』

いし、後続のナミがタイミングを合わせられない!』

「ごめん……次は注意するさかい……」

声にも張りがなく、立ち上がる動作も緩慢で、重い。

その後、何度も練習を繰り返すわけだが、回数を増すことにミカの動きは鈍って行く。

「弟君」

シークエンスとシークエンスの合間に、姉さんが手招きして、俺を呼ぶ。

俺は姉さんの脇に立って、ノートパソコンの画面を見た。

三機のハートドライブ出力の棒グラフが横並びになっている。左から、サヤ、ナミ、ミカの順。

サヤの出力は百四パーセント、ナミの出力が四十六パーセントで、ミカはなんと、十七パーセントという低い値にまで下がっていた。

姉さんは言う。

「昼以降、ミカの出力が急激に下がり続けている。最初は単なる感情の波による変動だと思っていたけど、どうやらそうではないらしい。この十七パーセントという数字は、はっきり言って異常だよ。

ミカに何かあったとしか思えない」

「この調子だと、今日はもう、練習は無理か……」

手首のSRコマンダーを見る。

時刻は午後の三時を過ぎたところ。決闘二日前で、本来ならばあと三、四時間は練習したいところだが、ミカが不調だとしたら、早めに切り上げて、心身の回復に努めるのが賢明だろう。昨日、宇宙怪獣と戦った際のダメージが完全に治ってないのかもしれないし、無理はさせられない。

何より、昼前のミカの様子が気に掛かる。

俺は拡声器を手に取り、三人娘に向けた。

「三人共、聞いてくれ! 今日の訓練はここまでにする! それから、ミカ!」

レモンイエローの機体が、オレンジ色のアイカメラを鈍く光らせ

て、反応する。

「え……？」

『この後、俺と一緒に、スーパーロボット開発部まで来てくれるか』

検診用の透明なカプセルから出て来た未佳は、俺と姉さんに不安げな表情を見せる。

「あの……ウチ、どこか身体に異常があるんやろか……？」

場所はスーパーロボット開発部の整備ルーム。

デスクトップパソコンのキーボードを忙しく弄っていた姉さんは、椅子を回転させて、未佳に身体を向ける。

「いや、一応スキャンしてみたが、どこにも損傷は見られない。昨日の宇宙怪獣との戦闘による損傷は、既にちゃんと完治しているよ」「だったら、どうして……」

「合体練習の時に測定したら、未佳のハートドライブ出力が、十七パーセントまで落ちていたんだ」

「！」

後ろから見ても、未佳の肩が揺れるのが分かった。

姉さんは威圧を掛けないよう配慮したのか、パソコンの方に目をやりながら、訊く。

「何か、自身で心当たりはあるかい？」

「それは……」

言葉に詰まり、金髪癖っ毛の頭が下がる。

俺は姉さんに言う。

「このところ、合体練習ばかりだったし、昨日は昨日で宇宙怪獣と戦って、未佳にも疲れが溜まっていたんじゃないか？」

姉さんがこちらを見る。それから顎に手を当てて、「ふむ」と思案するように虚空に視線を彷徨わせた後、

「なるほど、そうかもしれないな。だとしたら、今日はもう家に帰っ

て、ゆっくりと休んだ方がいいだろう」

そう口にして、再度、未佳に視線を移す。本人は優しく微笑み掛けているつもりなのだろうが、相変わらずの二ヤリとした笑顔なので、このシチュエーションでは、何か悪巧みをしているようにしか見えない。

未佳も判断し切れないようで、こちらに困った表情を投げ掛けて来るので、俺は頷く。

「姉さんもこう言ってることだし、家に帰るか、未佳。あんまり遅いと、先に帰らせた奈美と沙耶が心配するし、何より沙耶に関しては、また昼間みたいに怒り出しそうだからな」

「うん……」

抑揚のない声で答える未佳。

「じゃあ、姉さん、診察に感謝する。俺達、今日は家に帰るよ。姉さんも研究室に籠ってないで、たまには家に帰って来いよな」

俺は姉さんに軽く挨拶してから、脇に置いておいたバッグを肩に掛け、未佳と共に整備ルームの出入り口に向かう。

姉さんはわざとらしく細い眉を上げる。

「おや、私が行って、可愛い女の子三人とのハーレムを邪魔してしまってもいいのかい？」

「何がハーレムだ。人を騙して、無理矢理押し付けた癖に。ハーレムなんて、いいのは聞こえただけだ。色々大変なんだぞ。毎日毎日、女物の服やら下着を洗って干さなくちゃならないし、脱衣場に入る時にいちいちノックしなくちゃならないし、食事だつて四人分も作らなくちゃならないんだからな。親父と姉さんと暮らしてた十年前より、よっぽど今の方が苦労して……ん？」

そこで気付く。真顔の姉さんが、無言でこちらを指差していた。人差し指が向けられているのは俺ではなく、その横。

見ると、俺の横に立っていたはずの未佳がどこにも居なくなっていた。

整備ルームの手動の扉は、開きっ放しになっている。

「未佳……?」

部屋から飛び出して、廊下の通路を左右眺め遣るが、姿はない。

「弟君」

振り返ると、席を立ち、部屋の出入り口まで歩いて来た姉さんが、白衣のポケットから煙草チヨコの箱を取り出して、開ける。中にはもう、最後の一本しか入っていないかった。

「唐突だが、猫という生き物の話をしてあげよう」

そう言っつて、姉さんは右手の人差し指と中指で煙草チヨコを挟んだ。

「猫とは実に自由な生き物だ。何物にも囚われず、仮に誰かの飼った猫となったとしても、犬と違って、その首輪には、紐も鎖も付いていない。好きな時に日向ぼっこして、好きな時に昼寝をして、好きな時に散歩をする。何事にもマイペースなのさ。皆のイメージ通りね」

両腕を組み、姉さんは煙草チヨコを持った手をひらひらとさせる。「しかしだよ、弟君。こういう話を聞いたことがないかね?」

廊下を少し歩いて、壁に背を着ける。煙草チヨコの先端を、俺に突き出して来た。

「地震が起こる前に、街から猫の姿を見かけなくなる」

真顔を崩し、ニヤリと破顔する姉さん。

「猫もいざ飼ってみると、色々なことが分かって来るものさ。猫とというのは、普段見せているマイペースとは裏腹に、とても繊細な生き物なんだよ。周りの環境の変化に凄く敏感なのさ。だから、気候や気温が激しく変動したりすると、病気に罹ったりする。何より、ストレスに弱い」

姉さんは煙草チヨコを持つ右手の手首をぶらつかせる。

「と、こんな話をしたところで別にどうってわけじゃないんだが、私が何を言いたいかを要約するとだ」

手首のスナップを利かせて、俺に煙草チヨコを投げた。

「後は君に任せだよ、弟君」

俺はそれを受け止める。

姉さんに視線を戻すと、彼女は既に背を向け、自分の研究室がある方へ歩き出していた。左手を白衣のポケットに突っ込み、右手を上に掲げて振る。

俺は煙草チヨコの紙を剥いて、口に放り込む。

「言われなくなつて……！」

舌の上に広がる甘さを感じながら、姉さんとは反対側に走り出した。

スーパーロボット開発部棟を抜けて、渡り廊下に差し掛かる。

検診で一時間以上も窓がない部屋の中で過ごしていた為、気付かなかったが、窓の外は既に眩しいくらいの夕焼けで、朱く染まっていた。SRコマンドーを見れば、時刻は午後の五時過ぎ。

防衛局一階のロビーを抜けて、屋外に出る。足は止めず、自宅への道を守る。

途中、人影を見つける度、注意深く視線を配りながら、コンクリートの道路を踏み締めて行く。

可能性としては決して高くなかったが、しばらく走り続けていると、目的の金髪癖っ毛を見つける。

「未佳！」

彼女は防衛局から続いていた大通りを外れて、更に少し行った所を歩いていた。

小さな背中が振り返って、夕日に照らされ、朱色の光を灯す瞳を俺に向ける。

「ほーやん……」

俺が追い付いて、上がった息に肩を上下させていると、未佳は伏し目がちになって、瞳に影を落とす。

呼吸が落ち着いてから、俺は口を開く。

「急にいなくなつたりするから、驚いたぞ。家への帰り道にいてよかつた」

「ごめん……」

「何があつた？」

未佳は唇を真一文字に結んで、答えようとしない。

俺は続けて、訊く。

「未佳、お前、やっぱり何か、思い悩んでることがあるんじゃないのか？」

「……」

言葉にしなくても、目の前にある暗い表情が、それを肯定していた。

「俺、今朝も言ったよな。俺は沙耶のパイロットであると同時に、お前のパイロットでもあるって。だから、悩みがあるなら何でも言ってくれ。それとも……俺じゃ信用出来ないか？」

「そんなことあらへん！」

声を荒げる未佳。

「ウチは、ほーやんを信用しとるよ。心の底から信じてる。ほーやんは一ヶ月、ウチらと一緒にいて、合体練習も見てくれた。怒ることがあつても、ウチらのことを想って叱ってくれてるのがちゃんと分かった。ウチは、ほーやんが大好きや！でも、だからこそ、ウチは言えなかつた……！ほーやん」

今までに何度も見た、不安そうな瞳で、未佳は俺を見た。

「ほーやんは、ウチらが合体に成功した後も、ずっと一緒にいてくれるん？」

「……！」

言葉に詰まつた。すぐに答えを返すことが出来ない。

ずっと押さえて来たものが一気に溢れ出したのか、未佳は捲し立てる。

「ほーやん、亡くなった親父さんとの約束があるんやろ？」

「お前、どうしてそれを……！まさか、姉さんが……！？」

親父との約束は、俺は他の誰にも話したことがない。唯一、約束した現場に立ち合っていた、姉さんだけが知っている事柄だ。

未佳は首を横に振る。

「博士は悪くない。ウチが無理に頼んで、教えて貰ったんや。ほーやん、いつも何かを隠してる気がしてた。何か、ウチの知らない目的があつて、焦っているような……。だから、不安になつて聞いたんや。……ほーやんの夢は、英雄、白坂西矢のような、天才パイロットになること。……そうやる?」

そつだ。俺の夢は、天才パイロットと呼ばれた、親父みたいになること。

そして

「十年前の、第二次東京決戦の時。激闘の末、史上最強の宇宙怪獣ディザスターと相打ちに持ち込んだ親父さんが、病院に運び込まれて亡くなる寸前。ほーやんは親父さんに、必ず夢を成し遂げることを誓った」

未佳は、知っていたのだ、俺の過去を。

俺が当初、どんな考えで合体練習を始めようと切り出したのか、その合体練習が実を結んだ後、俺がどんな行動を取るか、全て分かった上で、彼女は今日まで、俺に付いて来ていた。

「ほーやんはいつも真つ直ぐな瞳をしてる。口では違うことを言つても、瞳はいつも真つ直ぐ前を見ている。それは多分、さーやんも、なーやんも分かつてる。だから、ウチはほーやんが信じられる。けど、真つ直ぐな瞳は、本当は、いつもウチらと違う方を向いている」

未佳が、ぐつと拳を握り締める。

「ウチには分かるんや……。もしもウチらが合体に成功したら、ほーやんがウチらから離れて行ってしまうこと……。それが分かっているのに、ウチはさーやんみたいに喜べへん……。ほーやんと笑い合えへん……。平気な顔して、合体練習なんて出来へん! ウチだって強くなりたい! 合体出来るようになりたい! けど、強くなればなるほど、ほーやんと別れが近くなる……。ウチはそんなの嫌やッ!」

俯いた未佳の瞳から、一滴の涙が零れた。道路に落ちて、染みを作る。

「ほーやんと別れとうない……！　ずっと一緒にいたい！　初めて
そう思える、パイロットに出会ったんや……！」

ぼろぼろと涙は雨となつて地面の染みを大きくする。嗚咽で上手
く発声出来ない言葉を、彼女は喉から絞り出した。

「ウチはもう二度と……捨てられとうない……！」

少女合体が成功した後、俺がどうするか。

決闘が終わつた後に考えればいいなんて、そんなはずはなかった。
それは合体練習よりも、必殺技の特訓よりも、何よりも先にはつ
きりとさせなければならぬことだった。

「ごめん、ほーやん……！　ウチはもうこれ以上、合体練習に参加
出来へん……！」

そう言つて、未佳は背を向け、家の方へ駆け出す。

俺はその小さな背中を、呼び止めようと思つた。

しかし、喉まで出かかつて、それ以上言葉が出て来ない。

「っ……！」

掛ける言葉が、見つからない。

やがて、未佳の姿も見えなくなる。

その場に立ち尽くして、空を見上げていると、日が落ち始めて、
朱色から紫色に変化して行く。

風も次第に冷たくなり始めていた。

ここに立ち続けていても、何も進まない。家に帰ってから、
落ち着いて考えよう。

吹き付ける風のおかげで、少し頭が冷えて来たのか、思考が戻つ
て来る。

同時に、俺はあることを思い出した。

「……そういえば、家の冷蔵庫の中身、空っぽだったっけな」

どうやら、主夫的思考も戻つて来たようである。

俺は手前の大通りへと戻つて、いつも利用しているスーパーへと
足を向けた。

道を行き交う乗用車や、トラックの音に耳を傾けながら歩いてい

ると、ふと、何かが脳裏をかすめる。

何だろうか……よく分からないが、以前この道を通った時の記憶であるように思う。

しかし、具体的に思い出すことが出来ないまま、スーパーに着く。買い物カゴを片手に、今日は何を作るうかと考えつつ、安い食材を物色していると、牛肉のスネ肉が特売になっていることに気付く。残り数個しか置いてない。

そうだ、今日はビーフシチューにしよう。

スネ肉をカゴに入れて、ニンジン、タマネギ、マッシュルーム等を探す。

一通り材料を集め終えて、レジを通し、ビニール袋に移す。

そうして俺は、スーパーを出て、帰路に着いた。今度は大通りを、家の方に向かって歩く。

紫色だった空は、濃さを増して、黒色に変わりつつある。

「あ、思い出した」

来る時に脳裏をかすめた記憶が何だったのか、片手のビニールの買い物袋の中身をきっかけにして、鮮明に蘇って来た。

あの日も俺は、こうしてビーフシチューの材料を片手に、スーパーから家へと帰る途中だったのだ。

第三章 / 譲れないもの・2

十年前の時点で、俺の主夫業は既に絶賛フル稼働中だった。

めでたいのかめでたくないのか、まもなく白坂家での主夫業も、二周年を迎えようとしていた頃。

当時七歳、小学二年生の俺のマイブームは、スーパーの特売日に誰よりも早く足を運ぶことで、チラシか何かで牛肉の特売だということを知り、その日の夕暮れ時も、自宅からスーパーまで出張って来ていた。

何故幼い俺が主夫業をしているのかと言うと、我が家にいる天才と呼ばれる二人が、どちらか家事が壊滅的だからだ。

当時俺の義理の母親に当たる人物は、更に十年ほど前に亡くなっていて、家族構成は、義理の姉が一人と、義理の父が一人。

義理の姉は十四歳にして、飛び級で私立の高校に通う天才。アメリカの大学から推薦状が来ていて、高校を卒業したら、留学することが決まっている。

そして、義理の父は

「は！？ 北斗、こんな時間に、何を一人でほっつき歩いてるんだ、お前！？」

いつも高いテンションで話し掛けて来る、半袖短パンの三十四歳。黒の短髪で、顎には剃り残しのヒゲ、体格は良くも悪くもなく、普通。どちらかという細身だが、知らないところで筋トレは欠かさず行っているらしく、見かけによらず筋肉質だ。

スーパーからの帰りで、日もすっかり落ちた市街地。

そこを徘徊する手ぶらの半袖短パン中年男は、警官が来たら、問答無用で職務質問されそうな程に、不審者オーラを出しており、なるべくなら関わり合いになりたくない。

名を、白坂西矢と言った。

「駄目じゃないか、もうすぐ夜だぞ！ 北斗がおませさんなのは知

つてるが、夜遊びはもうちょっと大人になってからしなさい！」

「夏でもないのに、こんな時間に半袖短パンで出歩いている中年に言われたくない。それに、夜遊びがしたくて出歩いているわけじゃない」
手に提げたビニールの買物袋を差し出して、中身を見せる。

「今日の夕飯の買物に来たんだよ。牛肉の特売日で、安売りする時間がさっきだったんだ」

「馬鹿！ 特売になんて拘らなくても、普通に買えばいいだろう！
変な不良に絡まれたり、シヨタ好きな変態さんに誘拐されたりしちゃったら、どうするんだ！」

「じゃあ、西矢は、今日の夕飯はいらないと。残念だな、今日のメニューは西矢の大好物であるビーフシチューなのに」

「すいませんした北斗さんっ！ 自分、調子こいてましたっ！」
歩道の真ん中で土下座する三十四歳。ビーフシチューには滅法弱いと、二年間の生活で把握している。

こんな男でも一応、世間では、天才スーパーロボットパイロット、または英雄と呼ばれている。

十七歳の若さで人類史上初のスーパーロボットに乗り込み、人類史上初の宇宙怪獣を殲滅した、第一次東京決戦の英雄。それが、この半袖短パンの男、白坂西矢であった。

俺は三十四歳に告げる。

「西矢、白坂家の財布と家事は俺が握っているんだ。無駄遣いは許さない。散りも積もれば山となる。たかが一円、されど一円。一円を疎かにする者は、一円に泣く」

「そうだったな、俺の代わりに家を守ってくれてるのは、北斗だったな。すまん」

と、立ち上がった中年は、さりげなく俺の手から買物袋をかつさらう。

「え？ いいよ、西矢。それくらい、別に自分で持てるから……」

俺は取り返そうと手を伸ばすが、大人と子供の圧倒的リーチ差で阻まれる。

頭の上に疑問符を浮かべていると、もう片方の手で頭をわしわしと撫でられる。

「いいから、北斗は気にしないで、俺に荷物持ちをやらせとけ。俺がこれっぽっちも家事の才能がないから、こうして北斗に苦勞を掛けるんだ。一応保護者として、せめて重い荷物くらいは持ってやらないとな。それとだ」

ごく稀に見せる真剣な目で、半袖短パンの男は言う。

「まだ小学二年生の子供が、こんな時間に出歩くのは良くない。いくら特売日といっても、やっぱり俺は納得出来ない」

「……」

「そんなふて腐れた顔をするなよ。分かってるって」

中年男はもう一度俺の頭を撫でてから、にかっとなと青少年みたいな笑い方をして、

「今度の特売日の時は、俺の携帯に電話しろ。防衛局からひとつ走りして、牛肉でも何でもすぐに買って来てやる。それで問題ないだろう？」

「ん……」

何故か無性に腹が立って、顔を背ける。

どうしてこの半袖短パンが、たまに格好良く見えるのだろうか。

不思議で仕方がない。

腹を立てている相手は、自分であった。

それから、二人並んで白坂家への帰路に着く。

片手に提げた買い物袋を揺らしながら、中年が口を開いた。

「そっついえば、今週、小学校で授業参観があったよな？」

「確かに、あるけど……」

「何曜日だったけ？」

「金曜日……って、まさか来る気!？」

ぎょっとして、半袖短パンの男を見る。

「そりゃあ、行くさ。保護者だもの。嫌か？」

「嫌に決まってるだろ! 半袖短パンの中年男が来たら!」

「馬鹿だな、北斗。さすがにいつもの格好ではいけないさ」

三十四歳は、からからと笑う。白い歯を光らせて、

「ちゃんとオシャレな半袖と短パンを選んで行く」

「ちゃんと正装で来い！」

その後も色々抗議するが、中年男は、何が何でも授業参観に来るつもりらしく、俺の言葉を笑って受け流す。

「参った。こんなはずではなかったのに……」。

半袖短パンは首を傾げる。

「恥ずかしがる必要はないと思うんだけどなあ」

「別に恥ずかしがってるわけじゃない。ただ、前回ならともかく、今回の授業参観は、授業内容に問題が……」

「問題？」

「作文の発表なんだよ。テーマは……将来の夢」

三十四歳は目を瞬かせる。

「将来の夢……ほう、将来の夢か！」

そら見たことか、中年の瞳に星が輝き出す。だから、今回の授業参観には来ないで欲しかったのに。

子供が悪戯を企てる時のような顔で、腰を低くし、俺の顔を覗きこんで来る。

「それで？ 北斗さんの将来の夢は、何なんですかい？」

「う……」

俺は顔を背ける。凄く答え辛い。

「あ、その顔は、もしかして未定ってやつか？ まだ小学二年生だもんなあ。将来を考えるには早過ぎるか」

「……あるよ」

「ん？」

「将来の夢は……ある。というか、最近見つけた。西矢には、心の準備が出来てから、作文を見せるつもりでいたんだ」

半袖短パンの男は驚きの表情を浮かべている。

心臓の鼓動が早くなっているのが、自分でも分かった。何せ、他

人に夢の話なんてするのは生まれて初めてのことだ。

話したら、目の前の中年男はどんな顔をするだろうか。腹を抱えて、笑うだろうか。

「仮に……だけど」

笑われたら、なかったことにしよう。別にいいさ。どうせ、俺らしくない夢だし。年頃の子供が抱く幻想ってやつだ。

一度深呼吸をして、顔を背けたまま、俺は言った。

「西矢は、仮に……俺が、スーパーロボットパイロットになりたいって言ったら、どうする？」

返事はなかった。

恐る恐る、三十四歳の顔を見上げる。呆気に取られたような表情が、そこにあった。

「北斗が、スーパーロボットパイロットに？」

「何というか、その……西矢みたいな、だらしなくて、いい加減な奴が、天才って呼ばれるんだったら、俺にだって簡単になれそうだし。一応、公務員扱いなんだろ？ 給料も悪く無さそうだしさ……」

半袖短パンの男は、ただただ俺を眺めている。

段々自分で言っていて、気持ち沈んで来る。

「……分かってるよ。どうせ、俺らしくない夢だつて言いたいん

」

「そんなことはないッ！」

「うわっ!？」

突然、両手で脇を掴まれ、宙に持ち上げられる。ビニールの買い物袋が地面に落ちて、ガサツと音を立てる。

見れば、中年男が歓喜の表情を満面に浮かべていた。

「なれるよ！ 北斗なら絶対になれる！ らしくないなんてとんでもない！ ぴつたりだ！」

三十四歳は腹を抱える代わりに俺を抱えて、その場で大笑いをする。

「ぬははは！ 北斗がスーパーロボットパイロットに！ うははは

！　こんなに嬉しいことはない！　北斗、お前なら絶対、俺みたい
に名ばかりじゃなくて、本当の天才パイロットになれる！　のわは
はは！　げほっ、げほげほ！」

笑い過ぎて蒸せる。

「げほ……北斗が俺の後を継いで、スーパーロボットパイロットに
……うおおおおおおおおおおおおん！！！」

ついには泣き出した。

公道のど真ん中であるにも関わらず、あんまりにも大声で泣くも
のだから、俺としては、湧いて来た他の気持ちよりも、恥ずかしさ
が上回る。

「ちよっ……泣くなよ！　仮にも大人なんだから！　こんな道のど
真ん中で、恥ずかしいだろ！？　っーか、俺がスーパーロボットパ
イロットになりたいと思っただのは、西矢がどうか、別にそういう
わけじゃ……！」

半袖短パンは滝のような涙を流しながら、何度も頷いてみせる。

「うん！　分かってる！　北斗はツンデレだから、照れてるだけな
んだよな！」

「誰がツンデレか！」

暴れるが、空中で拘束されている為、どうにもならない。

「そっかあ、北斗がパイロットに……！　よし、今日は南も連れて
お祝いに焼肉でも食いに行こう！」

「だから今日はビーフシチューだって言っただろ！　何の為に俺
がスーパーまで出向いたと思っただい！」

「あと、夢が決まったついでに、俺のことをそろそろ『パパ』と呼
んでくれると嬉しい」

「どさくさに紛れて、変なこと言い出すんじゃない！　そして、死
んでも呼ばん！」

三十四歳がようやく俺を地面に下ろす。ついでに両肩も、がつく
りと落とす。

「っーむ、残念無念。また駄目かあ……」

「いや、それ以前に、娘じゃあるまいし、パパなんて呼ぶわけがないだろう」

この中年男をパパと呼ぶくらいなら、舌を噛んで、俺は死ぬ。

俺は路上に置きっ放しになっている買い物袋を指差した。

「……とにかく。焼肉じゃなくて、今日は家でビーフシチューを作るから、材料を忘れないようにしろよな、バカ親父！」

背を向けて、さっさと家への帰り道を歩き出す。

「ああ、そうか。危うく忘れるところだった……って、ちょっと待て！ 北斗、お前今何て！？ おい、やけに足が速いぞ！ 今行くから少し待って！ 北斗！ 北斗ってば！ 頼む、今の台詞ワンモア！ ワンモアプリーズッ！」

それから家に帰り、バカ親父が、姉さんに俺の夢の話をする時、腹を抱えて笑われた。

五月十五日土曜日。決闘前日の早朝。

俺は沙耶と共に、必殺技の特訓の為、自宅近くの河原まで来た。

一皮剥けて成長した彼女は、必殺技の完成度が、以前とは段違いであり、ここに着いて特訓を始めてから現在に到るまで、未だに一度も失敗していない。つまりは、必殺技の成功率、百パーセントである。

威力も桁違いと言っていい程で、一発ストレートを繰り出す度に川を流れる水が向こう岸まで真つ二つに割れ、天空に舞い上がった水飛沫が、台風がやって来たかのような突風と共に、豪雨となって降り注ぐ。

俺は最初の一発で、バケツをひっくり返したかのように水飛沫を被って、びしょ濡れになり、一旦帰宅。今は着替えの入れたバッグを持ち、傘を差して、沙耶の横から特訓の様子を見守っている。

もはやほとんど教えることがないレベルなのだが、沙耶が細かい粗を見つけたら教えて欲しいと言うので、必殺技のモーションを目で追い続けている。

「ラブ」

右手の拳に全身のエネルギーを一点集中。

「ファイヤーアア」

大きく腕を引いて、力の限り、

「パアアア　ンチッ！！！」

放つ。

例の掛け声も健在である。何度も聞いたせいか、ラブファイヤーパンチという響きがしっくり来てしまっている自分がいたりいなかたり。なるべくなら慣れたくないところである。

再び降る雨を傘で受け止めながら、俺は沙耶に声を掛ける。

「必殺技、どうやら完全に自分の物にしたみたいだな」

ピンクツインテールから雫を垂らしながら、彼女は笑顔に向けて来る。必殺技を放っている本人もまた、びしょ濡れだ。

「うん！　明日はついにミストちゃんとの決闘だからね。見てて、

北斗くん。今度こそ格好良く必殺技を決めて見せるから！」

屈託のない、気持ちの良い笑顔。迷いはもう感じられない。

俺も頷いて見せる。

「その息だ。だけど、もし怖くなったら、一人で抱え込んでないで、俺に言うこと。教えたよな？」

すると、沙耶は元気よく「はい！」と手を挙げた。

「今、正直怖いです！」

「早いな！……まあ、黙っているよりは全然いいけど。ちなみに言っておくと、俺も正直怖いぞ、明日の決闘は。怖いし……不安だ。緊張つてやつだな、多分」

未だかつてない緊張だと思う。親父が死んだ後は、自分は天才だとひらすら言い聞かせてやってきたから、十四歳でスーパーロボットパイロット試験を受けた時にも、ここまでの緊張を感じたことは

なかった。

沙耶が驚いたように言う。

「北斗くんでも、やっぱり緊張したりするんだね」

「自分でも驚いてる。何でなんだろうな」

俺がそつ口になると、彼女はやけに嬉しそうに微笑む。

「えへへ」

「何だ、その笑顔は。俺が理由で笑ってるようにしか思えないんだが」

「いや、北斗くんがさ、数日前からよく笑うなあ、と思って。ボク、何か凄く嬉しいんだ」

「また俺、笑って……！」

頬に触れたところで、俺は未佳の言葉を思い出す。

ウチはさーやんみたいに喜べへん……！ ほーやんと笑い合えへん……！

「北斗くん……？」

はっとなつて前を見ると、沙耶が俺の顔を覗き込んで来ていた。表情から考えていることを読み取ったのか、彼女は真剣な目をする。

「ひょつとして、未佳ちゃんのこと？」

「……」

「昨日は結局、一度も部屋から出て来てくれなかったもんね」

ビーフシチューの材料を片手に帰宅した昨日の夜、不安そうな面持ちで俺を出迎えた沙耶は、未佳が帰って来るなり、二階に上がって、自室に籠ってしまったことを教えてくれた。

奈美もやって来て、「何があった」と平静に聞いて来たが、俺は何も答えることが出来なかった。

俺は恐れていたのだ。

少女合体が成功した後、俺がどんな行動を取るか。未佳のことを

話す際に、沙耶と奈美に真実を知られるのが、怖かったのだ。

決闘への怖さや不安は、現在の状況が大きく割合を占めているので、まず間違いなかった。

見上げる天気曇りであるように、俺の心にも分厚い雲が押し掛かっている気がする。

昨日の夜も、一人で色々と考えた。

未佳の気持ち、親父との約束、自分の気持ち。沙耶の笑顔の意味、奈美の拒絶する意味。それらがぐるぐると頭の中を回って、こんがらがって、結局何もまとまらないまま、答えが出せないまま、今に至る。

サヤナミカが家に来てからの様々な変化が今、一つの大きな壁となって、俺の前に立ちちはだかっている気がする。

親父が死んでから、ずっと迷わず突っ走って来たけれど、俺はついに立ち止まってしまった。

これからどうしたらいいのか、俺はどうすべきなのか、分からない。

不意に、沙耶が俺の手を取った。

「え……？」

顔を上げると、彼女は太陽のような笑顔を湛えている。

圧縮ナノマシンで構成されているとは思えない程、柔らかく、温かな手。握られていると、何だかとても安心する。

そして、何故かとても懐かしい。

「大丈夫だよ」

沙耶は優しく言う。

「北斗くん、一昨日ボクに、一緒に頑張ろうって言ってくれたよね？ だから、北斗くんもさ、怖かったり、不安になったら、ボクに相談してよ。ボクじゃ頼りないかもしれないけど、話くらいは聞いてあげられるよ？」

ツインテールを揺らし、小首を傾げる。

「沙耶、お前……」

一緒に頑張ろうと自分で言っておきながら、俺はその意味を、本当は全然理解していなかったのかもしれない。というより、俺は沙耶を信じ切れていなかった。

沙耶の為に助けたんじゃない。俺が自身の為に、一方的に沙耶を助けようとしていただけだ。

スーパーロボットはパイロットを守る存在。パイロットもまたスーパーロボットを守る存在。

俺は、そのどちらも理解出来ていなかったのではなからうか。

彼女は、俺の手首のSRコマンドーを見る。

「あ……そろそろ戻らないと、朝食の時間がなくなっちゃうね。奈美ちゃんも自主練習から帰って来る頃だろうし、行こうか、北斗くん」

沙耶はもう一度微笑んで、堤防の方へ歩き出す。

「沙耶！」

俺は堪え切れず、彼女を呼び止めた。

「うん？」

彼女の表情は、あくまで柔らかだ。

俺は目を逸らす。

「どうして……未佳のことを何も訊かない……？ 気にならないのか？」

「北斗くんが黙ってるってことは、何か理由があるんでしょう？ だったら、ボクは訊かない。未佳ちゃんのことには心配だけど、北斗くんが話すまで待つよ」

大きな瞳が俺を映し出す。弱気になろうとも、喧嘩になろうとも、その瞳の色だけは、いつも変わらない。

今まで聞かなかったのは、その色の変化を、俺が恐れていたからだ。

「沙耶……どうしてお前は、俺をそんなにも信じられるんだ？ 一年前に、自身を慰めてくれた相手だからか？」

「再会した時はそう思ってたよ。でも、今は違う」

「じゃあ、一昨日、優しい言葉を掛けてやったからか？」

沙耶は黙って、首を横に振る。

俺には分からない。

「だったら、何で！」

「簡単だよ。北斗くんは、ボクと、奈美ちゃんと、未佳ちゃんと、一ヶ月以上も一緒に過ごして来た」

一点の曇りもない表情で、彼女は言った。

「家族じゃないか」

先程、沙耶の手に触れた時、柔らかさや温かさと共に懐かしさを感じたのがどうしてなのか、分かった。

親父が俺を養護施設から引き取った時、初めて触れた手と、同じ感じがしたからだ。

「君の下の名前、北斗って言うんだろう？」

「俺と家族にならないか？ 今ならもれなく、お姉ちゃんも付いて来るぞ？」

「何で君なのかって？ それはだな、俺の家族は皆、名前に方角が入ってるからだ。俺の名前が西矢で、西。今は亡くなってもういないんだけど、奥さんの名前が東子で、東。娘の名前が南で、そのまま……って、五歳の子にこんなことを言っても仕方がないか。……えっ、それくらい分かるって？ おお、北斗は頭がいいんだな！」

「とにかく、俺と家族になろう！ 無愛想がなんだ！ そんなの関係ない！ 俺は君を息子にしたいんだ！ カモン！」

「諦めない！ 俺は諦めないぞ！ 君がオツケーと言っただけで、何度でも来るからな！」

「おっしやああああ！ オツケーとなったら、すぐ行こう、我が家に行こう！ 南も喜ぶぞ！」

それまで、家族なんていらなと思った。

自分は産まれるなり、養護施設の前に捨てられたのだから、家族

という存在を必要としない人間なのだと思っていた。

だから、最初はうっとおしかった。義理の父も姉も家事能力が皆無だと知って、養護施設に帰りたかったこともあった。

でも、次第に家族というものに慣れていって、それまで冷え切っていた心が、温かくなっただけでなく、それまで感じていなかった怒り、優しさ、喜び、悲しみ、他にも数え切れない、感謝し切れない程の、たくさん。

俺は全部、家族から貰った。

「沙耶」

閉じていた瞳を開いて、俺はそれをピンクツインテールの少女に向ける。

「何？ 北斗くん」

「俺、今までお前を騙してた」

腰を折って、沙耶に深く頭を下げる。

「すまん」

姿勢はそのままに、俺は続ける。

「俺は本来、お前に信頼されるような人間じゃない。傲慢で、自分勝手な男だ。俺は自分の目的さえ達成出来るなら、お前達を切り捨てるつもりでいた」

「うん」

「何をどう騙してたのかは、後でちゃんと説明する。でも、俺は今、行かなくちゃならない。午後の合体練習までには全部終わらせて、戻って来る。それまで時間を欲しい」

顔を上げて、真正面から沙耶を見る。

彼女は破顔すると、告げた。

「最低だね」

「……弁解の余地もない」

「でも、最低だろうと何だろうと、ボクが北斗くんのことを大好きなのは変わらないよ」

「沙耶……」

「絶対に分かってないだろうから言っとくけど、マジ惚れなんだからね、ボク！」

今度は怒った顔をして、人差し指を突き付けて来る沙耶。普通逆だと思っただが。

その時、俺は初めて、自分で意識して笑うことが出来た。

「気付いたんだが、沙耶、お前って意外と可愛いんだな」

「気付くの遅くね!？」

沙耶も微笑む。

そんな彼女を見ているだけで、俺の悩みなんて吹き飛んでしまう。ちっぽけに思えて来る。

「沙耶、頼みがある」

「うん！」

俺は傘と着替えの入ったバッグを彼女に手渡す。

「学校に行ったら先生に、白坂北斗と、陸花未佳は、今日も欠席だと伝えておいてくれないか」

「分かった」

「朝食は昨日のビーフシチューの残りとライス。サイドディッシュにレタス、卵、トマトのサラダを付けてみた。ビーフシチューは絶対に温めてから食べることに。風味が損なわれるからな。家の合鍵は、リビングの電話の横に置いてある。登校する際には、戸締りと火の元をちゃんと確認してから家を出ること。出来るな？」

「任せておいて！」

「じゃあ……行って来る！」

俺は走り出した。

堤防を駆け上がったところで、後ろから声が掛かる。

「北斗くん！」

振り返ると、沙耶が、ぱつと握り拳を空に掲げて、言った。

「行ってらっしゃい！」

「……行って来ます！」

答えてから、俺は堤防の反対斜面を駆け下りる。

そのままの勢いで、住宅街へ続く道路に足を踏み出した。

耳元を風が吹き抜けて行く。仄かな温かさを感じて、空を見上げれば、覆っていた雲が所々裂け、朝日が差し込み始めている。

街へと降りる幾つもの淡い光条。

俺はその中を全力疾走する。身体が内側から熱くなっただけで、行くのを感じる。

住宅街に入る。ジョギングの途中だったのか、道端にいる近所の田中さん家の奥さんを追い越すと、「あら、北斗ちゃん、そんなに急いじゃってどうしたのー？ 何かの駅伝にでも出場するのかしらー？」と訊いて来る。

「いいえ、違います！」

小走りで、「そうなの、残念ねー。北斗ちゃんが出場するのなら、私張り切って応援しちゃうのにー」と笑う奥さん。

「とにかく、奥さんもジョギング頑張って下さい！」

俺は手を振って、先を急ぐ。

五分くらい全力疾走を続けていると、白坂家が見えて来る。

その時だった。

門を開けて、道路に出て来る金髪癖つ毛の少女を視界に捉えた。

昨日のことがあって、やはり顔に精気は感じられない。しかし、身に纏っているのは、高校のセーラー服。片手にはスクールバッグ。

手首のSRコマンドーを見れば、時刻はまだ朝の七時半であり、学校の朝のホームルームが始まる八時四十分まで、朝食を取っても余りある時間帯だ。

ここから導き出される解答は、簡単である。

陸花未佳は、俺達と顔を合わさず、先に学校へ逃亡するつもりなのだ。

「未佳ああ ツー!!!」

そうは問屋が卸さない。俺は絶叫する。

彼女は「にゃッ!？」と肩を震わせて、丸くした瞳をこちらに向けて。俺が走って来るのを見て、逃げるように走り出した。

「ちよつ……未佳、止まれえええ　　ッ！！！！」

「あにゃあー！」

吹き抜ける風に黒いスカートを翻しながら、逃亡犯はひた走る。

「何で逃げる！」

「にゃうあー！」

「俺の話を聞け！」

「ひにゃあー！」

「その鳴き声には、幾つのバリエーションがあるんだあああ！」

「にゃにゃにゃー！」

通り掛かる人々の驚きの視線を浴びながら、住宅街の中で追い駆けっこを繰り返す。もはや未佳は逃げることを考えているらしく、既に学校へのルートを外れ、俺を撒くべく狭い路地を見つけ、入り込んで行く。

少女の姿をしても、やはりスーパーロボットというだけあって、尋常じゃなく速い。

いや、それだけじゃなく、ひよっとすると未佳のハートドライブ属性である雷も関係しているのか。

ハートドライブは炎、氷、雷といったものを操るだけでなく、極のミストリアが、自身の実体と作り出した幻影とを入れ替えることが可能なように、スーパーロボット自体に効力をもたらすものもある。

「くっ……！！」

俺の五十メートル走のタイムは、六秒ジャストで、かなり速いと自負しているが、それでも未佳にどんどんと距離を離されて行く。

まさに稲妻のごとき速さ。このままでは、見失うのも時間の問題だ。

けれど、今はどんな手段を持ってしても、彼女に追いつかなくてはならない。

未佳が右前方にある路地に入る。

「伊達に　　」

俺はそれを確認してから、疾走の勢いそのままに、右横の民家のコンクリート塀に狙いを定め、

「十四歳で」

壁面に突っ込み、足を着いて、地面と垂直に駆け上がる。

「スーパーロボットパイロットの資格を取ってねえええ！」

跳躍。コンクリート塀の上に着地し、民家と民家の間を横切るようにして走る。

「失礼します！」

この辺りの地理ならば、十二年暮らしている俺の方にアドバンテージがある。未佳が折れた曲がり角の先は一方通行で、更に右に折れるようになっていいる。つまり、俺がここを突っ切れば、出る場所は……彼女の前方！

民家に遮られていた視界が開けると、左からやって来る金髪癖っ毛の少女が、前方の道路を通過しようとしているのが見える。

彼女は背後を警戒していて、まだ俺の存在に気付いていない。俺は太ももに溜まり始めた疲労を堪え、スピードを上げる。

未佳がこちらを見ると同時に、俺は左足に全ての力を込める。

「これで……チエックメイトだあああ！」
走り幅跳びのごとく踏み切って、跳んだ。

急ブレーキを掛けて、反転しようとする未佳の目の前に、スライディングで着地する。

ぐわしと彼女の手首を掴んだ。

「捕まえたぞ！」

「に、にゃああ……！」

彼女が何とか逃れようと腕を引っ張るが、俺は両手で押さえ、阻止する。

「未佳！ どうして俺から逃げようとする！」

「離して！ 離してや、ほーやん！」

ふるふると首を横に振る金髪癖っ毛の少女。彼女はその馬鹿力で、俺を引きずりつつもなお、逃げようと足を動かす。腕を引っ張る。

俺としては、ここで行かせるわけにはいかない。

「理由を聞くまでは、絶対に離さん！」

「嫌なんや！ だって、ほーやん、今、何か行動を起こそうとしてる！ ウチはそれが凄く怖い！ それでもし」

「未佳ッ！」

俺は掴んでいた両手を離し、代わりに彼女の頭を挟んで、こちらに向かせる。

「俺の目を見る！」

「……！」

彼女と視線を合わせる。じっと、瞳の奥を見つめる。

どのくらい経っただろうか、それまで強張っていた未佳の身体から、徐々に力が抜けて行くのが分かった。

俺は瞬きをして、挟んでいた手を退ける。

金髪癖っ毛の少女は、もう逃げようとはしなかった。

「……落ち着いたか？」

「う、うん」

俺が尋ねると、未佳は戸惑いつつも、頷く。

だから、今度は俺が彼女の手を取って、走り出す。

「えっ……ほーやん！？」

「走るぞ、未佳！」

朝の住宅街の中を、道行くサラリーマン、スポーツバッグを肩に掛けた学生、主婦を追い越しながら駆け抜けて行く。

「ほーやん、どこに行くん！？ 学校？ でも、ほーやんの格好、

ジャージ……！」

「今日も学校は休む！ 当然、未佳もだ！」

「ええっ！？」

セーラー服の少女の手を引きながら、住宅街を抜ける。と、そこで自主練帰りの奈美と遭遇した。

青いジャージ姿の彼女は、俺達を見ると、怪訝そうに眉を顰める。

「貴様……。それに……未佳？ 二人一緒に何をしている？ 朝食

はもう済んだのか？」

俺は止まらずに足踏みをしながら、「いや、まだまだ。だけど、行かなくちゃならない場所がある」と答える。

奈美は俺のグレーのジャージを一瞥する。

「どういうことだ？ 学校では……ないようだが」

「奈美にも後で説明するよ。朝食は用意してあるから、沙耶と一緒に食べてくれ！」

彼女の横を通り過ぎ、手を振る。

「あ……そうだ、奈美！」

言っておかねばならないことを思い出して、ライトブルーポニーテールの少女に振り向く。

「何だ？」

と眉間に皺を寄せたままの彼女に、俺は深く頭を下げる。

「今ですまなかつた！ それと」

顔を上げて、言った。

「今度、一緒に、ナポリタンスパゲッティの美味い店に行こう！」

「は？」

切れ長の瞳をぱちくりさせる奈美を残し、未佳と共に再びランニングに戻る。

市街地の大通りに出る。

車が横を行き交う中、金髪癖つ毛の少女を引っ張りながら歩道上を突き進む。

途中、何気なく未佳の顔を見た。

期待と不安が入り混じった瞳に、俺の姿を映している。そういえば、京極に決闘を申し込んだあの日、俺が合体練習のことを切り出した時も、彼女はこんな瞳をしていた。

やがて、俺達は地球防衛局第一支部の正面玄関前に辿り着く。

屋内に入ろうと、足を踏み出したところで、未佳の腕に力が籠もる。玄関前に根を生やすかのごとく、足を止めている。瞳の中の不

安な色が、濃さを強めている。

俺は金髪癖っ毛の頭に手を置いて、撫でた。

「大丈夫だ、未佳」

戸惑いを見せつつも、彼女は防衛局の中に入って来てくれる。

彼女の手を引き、ロビーを通り、歩いてスーパードット開発部棟へ向かう。

行き先は、開発部総責任者である白坂南の研究室。

中に入ると、奥の方で椅子に座り、デスクトップパソコンで作業をしている姉さんの後ろ姿があった。黒髪は腰くらいまでの長さになり、綺麗に整えられているし、白衣も染み一つないが、その他は酷く散らかっている。

床や、パソコンの置いてある机の上には、資料の紙束が散乱し、栄養ドリンクの空瓶が何十本も並べられている。

「姉さん」

「ん？」

声を掛けると、白衣の女性はキーボードを叩いていた指を止めて、椅子を回転させて振り返る。

俺と、横にいる未佳を見て、姉さんはニヤリと笑った。

「やあ、おはよう、弟君、未佳。二人共、こんな朝早くにどうしたのかね？ 土曜日も、確か午前中は学校があるのではなかったか、と記憶しているのだが」

俺は未佳にアイコンタクトを取ってから、手を離す。姉さんのところへ歩いて行き、前に立つ。

「学校は自主休講にした。朝早く来たのは、どうしても今、姉さんに頼みたいことがあるからだ」

「ほう……それで？ その頼みたいこととは、何だい？」

「俺の、サヤナミカとの契約書を渡してくれ」

俺の言葉に、姉さんは眉の角度を上げる。いつもと異なる、強く、はっきりとした声色で訊いて来る。

「何故かね？」

「その契約書は、何一つ平等じゃないからだ」

姉さんの稀に見せない真剣な眼差しに、俺もはつきりと答える。

「それは、姉さんが俺を騙して結ばせた契約書だ。姉さんは、契約を結ぶ前に、サヤナミカが合体ロボットであることしか俺に教えていなかった。俺は、実際にサヤナミカに会うまで、彼女達が人型インターフェイスに変身出来ることさえも知らなかった。それから、姉さんは当初、俺にテストパイロットとしての契約を持ち掛けていたはずだ。契約する際も、契約書には、確かにテストパイロットとしての契約を結ぶ記述がしてあって、テストパイロットは強制ではなく、任意で契約を破棄することが出来るということになっていた。ところが、いざサインを試してみたらどうだ。契約書はいつの間にか本契約の物にすり替わっていて、俺の意思では契約が破棄出来なくなっていた。これが本当に平等と言えるのか？ 違うだろう」

「この議論は前に何度もしたはずだがね。……言っただけで、私も何も騙してなどいない。契約書もすり替えてなどいない。最初から本契約の契約書だった。君はその記述を読んだ後で、契約書に直筆でサインをした。その証拠として」

姉さんは白衣の懐に手をつ込み、四つ折りの紙片を取り出す。

「この契約書がある。目の前にあるのが真実だよ、弟君。他のことは君の推測に過ぎず、何の証拠もない。サインも本物だ。印刷じゃない」

契約書を開いて、ボールペンで書かれたサインの部分を指差す姉さんに、俺は問う。

「姉さんは、死んだ親父に誓って、それが真実だと言えるのか？」
ぴくりと姉さんは眉を動かす。

「ほう、そう来るか。ならば、私はこう答えよう。父上に誓えるかと問われたなら、ノーコメントだ。しかし、仮に私が嘘を付いていたとしても、私の手元には、弟君の直筆のサインが書かれた契約書がある。これが私の手元にある限り、君が何を言おうとも、サヤナミカとの契約は成立している」

「確かに……その通りだ」

俺は頷いてから、姉さんに二度目の問いを向ける。

「けど、その契約書に書いてあるサインは、本当に俺のものか？」

「……いきなり何を言い出すんだね、弟君」

微かだが、姉さんの瞳が揺れたのを見逃さない。

「ロボット工学が発展し、姉さんがディザスターの核を研究して、ハートドライブを開発したおかげで、スーパーロボットの持つAIは、人間に限りなく近い思考を持つことが出来るようになった。姿だってそうだ。圧縮ナノマシンで身体を構成したスーパーロボットの人型インターフェイスは、人間と見分けがつかない。運動の際の細かい筋肉の伸縮でさえも再現している。そこで俺は、スーパーロボットの世界的権威である姉さんに、ある質問をしたい。姉さんに科学者としての誇りがあるのなら、嘘を付かず、真剣に答えろ」

俺は、スーパーロボット開発部総責任者、白坂南に、三度目の問いを投げ掛けた。

「ハートドライブを搭載したスーパーロボットの人型インターフェイスが、他人の書いた文字を見た場合、それを自身のメモリーに保存し、筆圧、筆跡を含め、完全に模写することは可能か否か」

しばし、姉さんと視線が交錯する。俺は瞬きをせず、目を逸らさない。

先に瞳を閉じたのは、姉さんだった。

「……可能だ。弟君の言う通り、ハートドライブ搭載型のスーパーロボットは、他人の文字程度ならば寸分変わらずに模写することが出来る。だが」

瞳を開いて、再び俺と視線を合わせる姉さん。

「この契約書のサインが模写されたものだとは断定出来る証拠はあるのかね？ 少なくとも一度、君は契約書にサインを書いている。それは間違いないだろう？」

「ああ、間違いない。そして、俺が持っている証拠は何もない。だから、これは俺の推測だ」

「だったら、残念だが」

「でも、俺の推測が正しければ……俺のサインを模写した本人が、この部屋にいるはずだ」

姉さんが瞳を見開く。

俺は、研究室の入口の所に立って俯いている、金髪癖っ毛の少女に視線をやる。そして、尋ねた。

「姉さんが持つている契約書にサインしたのは、お前じゃないのか？ 未佳」

直筆サインのトリックは、本当はずっと前から解けていた。けれど、誰がサインを模写したのかが分からない限り、俺が姉さんを論破することは今まで敵わなかった。

おそらく、模写したのはサヤナミカの内の子か、更に言えば、沙耶か未佳のどちらかだろうと思っていた。奈美は根本的に俺のことを認めていないから、確率は限りなく低い。だとすれば、可能性があるのは残りの二人。

最初は沙耶だと推測していた。俺のことを最初から慕ってくれていたし、姉さんが頼めば、彼女は筆を取るのではないかと思っていた。

けれど、違ったのだ。口には出さなくとも、俺のことを慕ってくれている少女がもう一人、ここにいた。

以前ならば、訊いてもシラを切られていただろう。だから、訊かなかった。

だが、今の彼女は嘘を付かない。俺はそう信じている。

背後から姉さんの声がする。

「おい、弟君。君は自分のスーパーロボットを疑うのかね？ 仮にも一ヶ月、行動を共にして来た、自身のパートナーを」

「姉さんには訊いてない！ 黙ってる！」

一喝する。俺は続けて、未佳に言う。

「……昨日、未佳は俺に言ったよな。自分はもう二度と捨てられたくないって」

彼女は顔を上げない。

「お前はただ、信頼出来るパイロットが欲しかったんだろう？ いても側に居てくれる、パートナーが。自分の練習を見てくれて、自分のことを叱ってくれて、自分のことを褒めてくれて。喧嘩しても仲直りして、一緒に笑い合える存在が」

奈美が一人で何でもやるうとするならば、未佳はその逆だ。一人では前に進めなかった。

「だから、姉さんに協力して、俺を自分の下に留まらせようとしたんじゃないのか。今度こそ、パートナーを手放さない為に」

ぐつと握り締められる、金髪癖つ毛少女の拳。

俺は告げる。

「言っておくが、俺はそんな策略程度じゃ繋ぎ止められないぞ。俺には親父と誓った夢がある。親父を超える天才パイロットになって、天国の親父に届くくらい有名ななるっていう夢が。……未佳、お前に教えておく。策略で足枷を嵌めることは出来ても、信頼まで手に入れることは絶対に出来ない！」

「うっ……くっ……！」

嗚咽と共に、未佳の瞳から涙が零れ出す。

俺はもう一度、彼女に尋ねる。

「姉さんの持つてる契約書にサインしたのは、未佳、お前だな？」

「……ごめん……なさい……！」

口元を押さえて、未佳は頷いた。

背後の姉さんに視線を向けると、黙って俺に契約書を差し出して来る。

俺はそれを受け取ると、真つ二つに破く。分れた二枚を重ねて、さらに破く。何度も破って、研究室のゴミ箱のところへ行き、捨てた。

「これで俺は、サヤナミカのパイロットでも何でも無くなった。そうだな、姉さん？」

「……ああ、その通りだ」

「姉さんは俺を騙して、俺にサヤナミカを押し付けて、俺の一月を奪った。そうだな？」

「全て私が謀ったことだ。未佳に罪はない」

姉さんは瞳を瞑って、握った両手を額に押し付けている。

「姉さんが何と言おうと、未佳も俺を騙していた。そのことに変わりはない」

未佳は立ち尽くし、涙を流し続けている。

俺はそんな彼女に言う。

「だけど、俺も同じように、未佳を騙していた」

こちらを向く金髪癖っ毛の少女の瞳を確かめてから、続ける。

「俺が合体練習を切り出したのは、お前らをさっさとサヤナミカに合体させて、こうして契約書を破いて、今みたいな状況になることが目的だった。俺はずっと、そのことをお前達に黙っていた。お前達の信頼を弄んで、騙していたんだ。……思えば俺は、一度だってお前達と向き合ったことがなかったように思う。結局は全部、自分の為だった。信じてるなんて言うておきながら、本当に信じているのはお前達じゃなく、自分の技量だった。そりゃあ、ハートドライブの出力も上がらないし、合体も成功しないよな。信頼関係なんて、見せかけだったんだから」

「ほーやん……」

「それでもやっぱり、俺は親父との約束を果たしたいんだと思う。

俺は親父に大切なものを一杯貰ったのに、結局親父には何も返せなかったから。せめて俺が、親父の息子として恥ずかしくないよう立派に育って、夢を叶えることが、親父への感謝を示す方法だと思うんだ」

涙に濡れた顔で、未佳は頷く。

「知ってた……！ 知ってたんや、本当は……！ けど、それを知ってても……ウチはほーやんに言い出せなかった……！」

「ああ、だから、お相子だ。そして、俺とお前は、これでようやく対等の立場になれた。……パイロットとか、スーパーロボットとか、

そういう煩わしいものも取り去って、俺とお前を繋ぐものは、一つだけになった」

「ウチとほーやんを繋ぐ……もの？」

「一ヶ月一緒に暮らした、家族としての関係だ」

それは、沙耶が教えてくれた、どんなことがあるうとも消えない、見えなくとも、確かにそこにあるもの。

未佳が胸の前に置いた手を、きゅっと握る。

「家族……」

「互いに騙し合って、秘密を抱えて、気持ち隠して。俺はお前達のパイロットを止めたら、その後にお前達がどうなるうが構わないと思っていた。何も残らないものだと思っていた。だけど俺は今、この瞬間」

俺もまた、自身の胸の前に手を置いて、握る。

「お前達と一緒に、明日の決闘に勝ちたいと強く思っている」
それから、今度は白衣の女性に視線を移す。

「姉さん」

「あ、ああ。何だね？」

呆気にとられたような顔をしている姉さんが、目を瞬かせる。

「頼みがある。新しい契約書を出してくれないか」

「え？」

「頼む」

俺が目を見て言うと、姉さんの表情に、ニヤリとした笑みが戻って来る。

「分かった。少し待っていたまえ」

姉さんは、パソコンが乗っている机の引き出しを開け、中から一枚の書類を取り出す。白衣の胸ポケットからペンを抜き、さらさらと書類に文字を書き連ねて行く。

「出来たよ、弟君」

二分と経たず、俺にそれを、ボールペンと共に手渡した。

書類の最上段に書いてある文字は『スーパーロボット正式契約書』

。スーパーロボット名は『少女合体サヤナミカ』。責任者名は『白坂南』。

そして、残っている空欄は一つ。俺の名前が入る場所だ。

俺は未佳に、それを見せる。

「俺は今まで、逃げていた。姉さんに騙されて、お前達を押し付けられたことも、お前達の気持ちからも。親父との約束を言い訳にして、ずっと逃げていた。逃げ続けて、俺は危うくまた、大切な物を失うところだった。しかも、今度は自分の手で。だから、未佳、俺はこの場でお前に誓う。俺はもう、何からも逃げない。親父との約束は果たす。だが、俺はお前達のパイロットを続ける。俺はサヤナミカを駆って、天才パイロットになる」

未佳の瞳に、俺は言う。

「だから、お前も逃げるな未佳。信頼出来るパイロットが、パートナーが欲しいなら、逃げないで、真正面から、正々堂々と、自分の力で手に入れる。お前には、自分の想いを伝えることが出来る言葉があるはずだ。お前はとうしたい？俺は……その程度の勇氣すらも出せない奴のパイロットになるつもりはない！」

「ウチは」

金髪癖っ毛の少女は言い掛けて、涙を拭う。

彼女は叫んだ。

「ウチは、ほーやんにパイロットになって欲しいッ！！！」

「よし！」

俺は契約書を机の上に置き、ボールペンを走らせる。しっかりと自分で『白坂北斗』と名前を書き込んで、姉さんに渡した。

「いいんだね、弟君？」

「もちろん」

「……では、確かに、契約書を受け取ったよ。この瞬間から、弟君はサヤナミカの正式なパイロットだ」

俺は振り返り、意識して未佳に笑い掛ける。

「だとさ、未佳」

すると、彼女は緊張が一気に抜けたのか、その場に崩れ落ちるように、座り込んでしまう。

けれど、そこでようやく、彼女は屈託のない笑顔を見せたのだった。

背中に負ぶさったセーラー服少女の重みを感じながら、俺は白坂家への復路を辿っている。

何故俺が未佳を背負っているのかと言えば、彼女の緊張が弛み、歩けなくなってしまうたからであり、どうして白坂家に向かっているのかと言うと、腹を空かした俺が、未佳に「どこかの店に、何か食いに行くか？」と訊いたところ、「ウチ、ほーやんのビーフシチューが食べたい！」という答えが返って来たからである。

防衛局に向かう時まで曇っていた空は、今は疎らになって、太陽の眩しい輝きと、爽やかな青色に満ちている。時刻は午前九時。

大通りの歩道を歩いていると、俺の頭の上に顎を乗せた金髪癖っ毛の少女が、口を開く。

「ごめんな、ほーやん。ウチ、重うない？」

「いや、重い」

「何でやねん！」

「ペしこーん！ とスーパーロボットの馬鹿力で頭を叩かれる。

「痛っ！？ おまつ、少しは加減しろよ！ 天才たる俺の大事な脳を保護する頭蓋骨にヒビが入ったら、どうすんだ！」

「乙女に対して重いつか言うからや！ そこは普通、大丈夫、重くないよ、ハニー！ とか格好つけて言うところやる！？ ウチ、ごつつう傷つくわ！」

「重いもんは重いんだよ！ 凄く疲れてんの！ 朝っぱらから俺が、どんだけ走ったと思ってるんだ！」

ちなみに、未佳がスーパーロボットであることは、彼女の重さに

関係ない。圧縮ナノマシンで構成されたスーパーロボットが人型インターフェイスに変身する際には、身体のサイズと共に、重量もまた見た目相応にまで減少するのだ。これは圧縮ナノマシン一体一体の情報が圧縮、変化し、小さくなる為で、質量が圧縮されているわけではないからである。

再び、のしつと頭上に顎を乗せられる感覚。

「ほんま、おおきにな、ほーやん……」

「ちよっ……いきなり、しおらしくなるなよ。調子が狂うだろ？」

「うん、ごめん……」

俺の身体の前に回された腕に、そつと力が込もる。

特等席に居座っている御猫様に、俺は声を掛ける。

「なあ、未佳」

「にゃ？」

「昨日の朝、お前は俺の体温が高いつて言ってたけど……お前も多分、体温高い方だと思っぞ」

「そっなんやらか？」

「ああ。俺の背中は今、ぽっかぽかだ。冬はホッカイロ要らずだな、コレ」

御猫様は「にゅふふ」と笑って、

「だったら、今年の冬は毎日、ウチがこうしてほーやんに負ぶさつたる」

「ホッカイロって大事だよな！俺は今、ホッカイロの偉大さを痛感した！」

ぐりぐりと御猫様が顎を押し付けて来る。

「にゃー、それはどういう意味や、ほーやん？ウチが重いとしても？」

「言っていない言っていない。ただ、毎日ちょっと熱っ苦し……痛あ！？」

ぺしこーん！と頭をシバかれた。

そんなやり取りを繰り返している内に、自宅の前に辿り着く。

「未佳、俺のジャージのポケットから、家の鍵を取って、玄関開けてくれるか」

「分かった。どっちや？ 上着？ズボン？」

俺が「ズボンの右ポケット」と答えると、そこから未佳が目的の物を抜き取って、ドアノブの鍵穴に差し込んで、捻る。

玄関の扉が開いて、家の中に入った。

「ここまでで大丈夫や、ほーやん。負ぶってくれて、おおきにな」
「よし、じゃあ、下ろすぞ」

未佳を支えていた両手を離すと、彼女は玄関の石畳の上に、すんと着地する。

二人で靴を脱ぎ、リビングに向かう。

金髪癖っ毛の少女は食卓の椅子に腰掛けて、「ウチももう、お腹ぺこぺこやわ」と言いつつ、みょーんと伸びをする。

俺は家の鍵を据え置き電話の横に置いてから、ダイニングキッチンに立って、ガスコンロの上に置いてある鍋の蓋を開ける。

「おっ、未佳、ビーフシチューがまだ残ってるぞ。沙耶か奈美が気を利かして、残しておいてくれたみたいだな」

「ほんまに？ 良かったあ。ウチ、ほーやんの作るビーフシチュー、めっちゃ好きやねん」

「亡くなった親父の親父の好物がビーフシチューだったんだ。で、色々試した結果、今の作り方がベストだったことになって。……いわゆる、こだわりの一品ってやつだな」

ガスコンロの火を点けて、温め始める。

その間に冷蔵庫を開けて、中を調べると、ラップに包まれた、レタス、卵、トマトのサラダが二皿置いてある。取り出して、食卓の上に並べた。

それから、茶碗を二つ手に持ち、炊飯器を開けて、ライスを盛り付け、これも食卓へ。

最後に、温め終えたビーフシチューを底の深めな二皿に盛って、スプーンとフォークと共に、未佳の前に持って行く。

「まあ、こんな感じで、今日の朝食だ。主に昨日の残り物だけでも……」

俺が向かい席に腰を下ろすと、未佳は首を横に振る。

「ウチ、昨日は部屋に籠もって、食べてへんかったから……ごっつう嬉しい」

昨日の夜、未佳の部屋を訪れたことを思い出す。扉をノックして、夕食がビーフシチューであることを伝えたが、彼女は「いらへん！」と怒鳴り声を上げて、今朝まで、部屋から一歩も外に出て来なかった。

未佳は昨夜、どんなことを考えて、時を過ごしていたのだろうか。彼女は手を合わせて、静かに「いただきます」と言葉にする。

「おう、召し上がれ」

スプーンを手に取る未佳に、俺も言う。

彼女は牛肉、ニンジンと一緒にスープをすくって、口にする。表情を綻ばせた。

「美味しい」

それを見て、胸の中が温かくなって行くのを感じる。

さて、俺も腹が空いているし、朝食を頂くことにしようと手を合わせたところで、驚いた。

未佳が瞳から、ぼろぼろと涙を零していたのだ。

「み、未佳、どうした？ まさか、ビーフシチューが傷んで……」
慌てて立ち上がる俺に、未佳は再び、ふるふると首を横に振る。

「違うんや……！ ただ……ごっつう……温かくて……！」

「未佳……」

金髪癖っ毛の少女は、涙を流しながら、ビーフシチューをすくっては食べる。

俺は席に着き、彼女が一皿食べ終えるまで、見守り続けていた。

第三章 / 譲れないもの・3

「 というわけで」

沙耶と奈美にブイサインを作って、俺は言った。

「名実共に、俺はサヤナミカの正式なパイロットになったんで、これからもよろしく頼む」

場所は、地球防衛局第一支部の演習場。昼に学校が終わり、校門から出て来た沙耶と奈美を拾って、第一支部の食堂でランチを頂き、決闘前最期の合体練習をするべく、屋外に出ての第一声が、それだった。

理解に忙しい沙耶と奈美の横で、未佳は、にこにここと微笑んでいる。

先に言葉の意味を理解したのは、沙耶。

「ぱあっと花の咲くような笑顔になって、俺の胸に向かって飛び込んで来る。」

「北斗くううん！」

「はっ……殺気！」

身の危険を感じて、回避すべく胸を捻るが、恐るべきことに、俺の反応よりも沙耶の突進の方が速い。

スーパーロボットパイロットとして鍛えた動体視力が測定する、その突進スピードは、実に

「時速五十キロオーバごはあ!？」

ノンブレイキの乗用車に跳ねられたかのような衝撃が身体を襲い（というか、実際に身体が宙に浮いた）、コンクリートの地面に背中から着地する。

一瞬、本気で意識が飛び掛けた。胸と背中が痛過ぎて、呼吸困難でむせる。これは逝った。俺のアバラとか背骨とか、絶対に逝った。ハートドライブ出力が短期間で大幅に上昇したせいか、日に日に沙耶の突進の威力が上昇している気がしてならない。もはやただの

殺人タツクルである。

……そうだ、今度から防弾チョッキを着るようにしよう。

仰向けに倒れている俺の腹に、馬乗りになった沙耶は、背景の青空で輝く太陽にも負けない眩しさの笑顔を浮かべる。

「おかえり、北斗くん」

「……どちらかと言うと、あの世に行つてらっしやいな状態になりかけたけどな、今」

俺も笑ってみせる。

すると、ピンクツインテールの少女は、おもむろに唇の先を尖らせて、

「では、ここでボクが、北斗くんにお祝いのちゅーを……」

「今の掛け合いから、どうしてそうなる!?!」

沙耶は構わず、瞳を閉じ、「ちゅー」と顔を近付けて来る。

俺がいつもの目覚ましチョップを食らわせようとしたところで、横から入って来た奈美が、沙耶を押し退ける。

俺のジャージの襟首を掴んで、馬鹿力で捻り上げて来た。

「貴様……一体、どういうことだ!?! 我には何がどうなってるん

だか、さっぱり分からんぞ!」

「分かつてる。ちゃんと説明するから、落ち着け、奈美……ぐるじい」

立ち上がった俺は沙耶と奈美に、未佳のこと、親父との約束のこと、俺がサヤナミカを騙していたこと、一度サヤナミカのパイロットを止めた上で、再びパイロットの契約を結んだこと等、包み隠さず全部話す。

その上で、もう一度、深く頭を下げた。

「二人共、今まで騙していてすまなかった。だけど、俺はこれから気持ち新たに、お前達と一緒に頑張つて行きたいと思っている。サヤナミカのパイロットとして、高みを目指しながら、この街を、地球を守って行きたい」

沙耶は、快く笑顔で頷いてくれる。

「うん！ これからもよろしくね、北斗くん！」

「ありがとう、沙耶。よろしくな。頼りにしてるぞ」
手を差し出して、握手する。

一方、奈美は予想通りの拒否反応を見せる。

「ふざけるなッ！」

鬼のような形相で、再び掴み掛かって来た。

「貴様、我がいつ、どこで貴様を認めたと言った！？ それをあるうことか、私の許可もなく、勝手に事を進めおって……！ 我々を騙していたなら、なおさらだ！ 即刻、契約を取り消せ！」

「それは出来ない」

「貴様……！」

切れ長の眼光が、切っ先を鋭く尖らせる。

俺は目を逸らさず、それを受け止める。

「確かに、ちゃんと奈美に話をしなかったのは、悪かったと思ってる。だが、俺は、親父に誓った約束と、同じくらい大切な物を見つけたから、改めてお前達との契約を結んだんだ。お前に拒否されたくらいで破棄する程度の覚悟なら、最初から契約なんて結んじやいない」

「自分勝手な理屈を並べて、行動を正当化するな！ それのどこに私の意思がある！？ 関係のない我を巻き込むな！」

「関係ない？ それは違うだろ、奈美。お前は単体のスーパーロボットじゃない。サヤナミカという、三人で一体のスーパーロボットなんだ。自分だけ関係ないなんて、それこそ自分勝手な言い訳だ」

「くっ…… 我は望んでこうなったわけじゃない……！」

露骨な怒りに身体を震わすライトブルーポニーテールの少女だが、俺の胸倉を掴んでいた手を離す。

俺は彼女に言った。

「前にも言った通り、俺はお前の理想のパイロットにはなれないし、なるつもりもない。どんなに取り繕っても、俺は俺だからな。けど、サヤナミカの正式なパイロットを務めるに当たって、お前に認めて

貰えるようなパイロットになるつもりでいる。だから、文句があるなら、今みたいにどんどん言ってくれ。互いに納得が行くまで、話し合って行こう。……というか、あれだ。ぶっちゃけ、友達になるう！」

「なっ……!!」

驚いたように切れ長の瞳を見開く奈美。彼女は怒鳴り声を上げる。「どうして我と貴様が、友達などという関係にならなければならぬのだ！ 本気で馬鹿なんじゃないのか!？」

「俺は馬鹿じゃない、天才だ！ あっ、心配しなくても、奈美は俺の家族だぞ。別に仲間外れにしたとかそういうわけじゃなくて、奈美とは家族でありながら、友達という信頼関係をだな」

「そういう意味じゃない！ ついでに言うと、貴様と家族になった覚えもない！」

「まあ、そういう細かいことは置いといて」

「置いとくな！」

「俺と奈美に必要なのは、ズバリ友情だと思うんだ」

「……」

奈美が沈黙した。あ……視線が冷たい。

彼女は首を横に振って、ポニーテールを揺らす。

「……もういい。馬鹿らしくして、怒る気も失せた。ひとまずこの件は、明日の決闘が終わるまで保留にしておいてやる」

「ありがとう、奈美」

「っ……!!」

礼を告げると、ギロリと鋭い視線が返って来る。とりあえず、今日のところは、これ以上刺激しない方がいいかもしれない。

手首のSRコマンドーを見ると、時刻は午後の二時過ぎ。そろそろ、事前に頼んでおいた姉さんが演習場にやって来る頃だ。

「弟君」

声が見ると、ノートパソコンと測定器を抱えた白衣の女性が、こちらに歩いて来る。

俺は右手を振って応え、三人娘に向き直った。

「それじゃあ、姉さんも来たことだし、これから、決闘前最期の合体練習の臨みたいと思う」

俺は、沙耶、奈美、未佳が横一列に並んだのを確認してから、続ける。

「泣いても笑っても、これが最後の練習だ。今日、サヤナミカへの合体が成功しなかった場合は、明日の決闘は、事前に打ち合わせをしておいた通り、沙耶をメインにしたコンビネーションで、ミストリアに挑むことになる。どちらにせよ、今まで学んだことの全てを、この合体練習にぶつけてくれ」

「分かった！」

「元より、手を抜くつもりなどない！」

ピンクツインテールと、ライトブルーポニーテールの少女が、それぞれ頷く。

それから、俺は金髪癖つ毛の少女に視線を移す。

「未佳はどうだ？ 行けそうか？」

彼女はしつかりと俺の目を見て、答える。

「大丈夫や、ほーやんはウちらと一緒に居てくれる。だから、ウチはもう、強くなるのが怖くあらへん！」

「……そっか」

自然と笑みが零れるのが、自分でも分かる。未佳も笑って、にかつと八重歯を見せた。

俺は指示を出す。

「よし！ それじゃあ、各機変身！」

「……了解！」

三人娘が全長十五メートルのスーパーロボットに変身し、合体練習が開始された。

俺は、姉さんのノートパソコンに映し出されるハートドライブ出力の棒グラフを小まめに確かめながら、拡声器を口元に当てて、合体シークエンス中のモーションの粗を指摘して行く。

「サヤ！ 変形は早いが、俺から見て、角度がやや右にズレてる！ ミカはサヤに合わせようとして、動きが固くなってる！ 焦らなくていいから、もっと動きを滑らかに！ ナミはいい感じだ！ 後はサヤとミカの動きに合わせて、柔軟にジョイントのタイミングを判断しろ！」

ハートドライブ出力が一般機を超えたサヤに加え、ミカの変形も素早くスムーズになり、合体の動きも段々と成功を予感させるものになりつつある。

パイプ椅子に腰掛けている姉さんが、ニヤリと口の端を吊り上げ、ノートパソコンの画面を指差した。

「見たまえ、弟君。ミカの数値の部分」

「どれどれ……おお！」

サヤが百五パーセント、ナミが四十八パーセントであるのに対し、ミカのハートドライブ出力の棒グラフは、五十六パーセントにまで伸びていた。

昨日記録した過去最低値である十七パーセントから復活を遂げた上で、以前までの過去最高値を上回る高出力である。ついにミカもスーパーロボット平均出力の五割の壁を超えたのだ。

俺は小さくガッツポーズをする。

「どうやら、ミカは、今朝の弟君の行動にハートドライブを揺さぶられたようだね」

姉さんの台詞に違和感を覚え、俺は訊き返す。

「ハートドライブを揺さぶられた……？」

「物の例えだよ。つまり、心を動かされたってこと」

「ああ、なるほど」

昨日の夕方、ミカが俺に本心を打ち明けた時、彼女は、俺に離れて欲しくないということ吐露すると同時に、合体したい、強くなりたいということも言っていた。

「ミカ！」

拡声器で指名すると、レモナイエローのネコミミロボットが、尻

尾を反応させて、丸める。

「にゃ？ どないしたんや、ほーやん？」

『お前のハートドライブ出力が、たった今、五十六パーセントを記録した。どうやら、本当にふっ切れたみたいだな』

「ほんまに！？ よっしやあ！ めっちゃ嬉しい！」

大きくガッツポーズをし、飛んだり跳ねたりして、全身で喜びを表現するミカ。

元々、彼女も強い向上心を持っていたのだ。孤独の恐怖がそれを邪魔していただけで、悩みから解き放たれた今、彼女のハートドライブ出力は、サヤに並ぶくらいまで伸びるはずだ。

と、喜ぶミカの横で、ナミが驚きの声を上げる。

「馬鹿な……！」

俺はライトブルーの機体に拡声器を向ける。

『ナミのハートドライブ出力は、四十八パーセントだ！ もう少しで、ナミも五割の壁を越える。気合いを入れてけ！ 他の二人に出来たんだ！ お前に出来ないはずがない！』

「うるさい！ 言われなくとも分かっている！ 貴様は早く次の指示を出せ！ ミカにもサヤにも、すぐ追い付いてやる！」

『よし、その意気だ！ 次行くぞーッ！』

その後、休憩を挟みながら、二時間、三時間と合体練習を繰り返す。

ミカのハートドライブ出力は少しずつ伸び続け、順に五十九パーセント、六十一、六十四、六十八、七十一、七十六、七十九、八十三、と棒グラフの上限を増やして行く。

ナミも、サヤだけでなくミカに追い抜かれたことで、火が点いたらしく、本当に気合いで五割を上回ってみせ、現在五十八パーセントという数値を記録していた。ここまで来ると、ナミの意地も称賛に値するレベルである。彼女は誰にも頼らず、自力でここまで来たのだ。絶対に折れない、屈強な精神。サヤナミカの中で最も強い心の持ち主は、間違いなくナミだろう。

この調子ならば、ひよつとして今日中に、合体出来るのではなからうか。

期待を抱いて練習を続けていると、それまで順調だったミカのハートドライブが、ある時、限界が来たかのように、八十六パーセントという数値で、出力の上昇を止めてしまう。

『ミカ！ 頑張れ、もう少しだ！ もう少しでハートドライブ出力が一般機平均を越える！』

拡声器で激励をすると、ミカは疲労に肩を上下させながらも、

「もう一度や！ ほーやん、指示を！」

と合体の定位置に並ぶ。

しかし、それ以降、何度練習をしようとも、ミカの出力は八十六パーセントに固定されたままで、上昇することはなかった。

日も暮れ始め、俺はSRコマンドーで時間を見る。午後の六時前。これ以上無理に続けた結果、三体の身体を構成する圧縮ナノマシンやハートドライブに不具合が出て、明日の決闘に差し支えるようなことがあつては、今日までの努力が水の泡だ。

俺は目の前で行われている合体シークエンスが終わったところで、拡声器を取る。

『三人共、ストップ！ 残念だが、今日の合体練習はここまでにしよう！』

レモンイエローのスーパーロボットが、声を上げる。

「まだや！ ほーやん、もう一度！ あと少し……あと少しで、越えられるはずなんや……！」

『ミカ、今日のところは切り上げよう。気持ちは分かるが、その為に作戦を二段構えにしておいたんだ。無理をしないで、明日の決闘に万全の状態で臨むことを最優先に考えるべきだ。それに、焦らなくても、合体練習は今日で終わるわけじゃない。決闘が終わってから、また幾らでも練習出来る。そうだろう？』

彼女は悔しそうに鋼の拳を握り締めたが、少しの間があつた後、頷く。

「……分かった」

『よし……三人共、おつかれ！ 人型インターフェイスの姿に戻っていいぞ！ 撤収する！』

ロボットモード解除の指示を出す。

その時だった。

「はーっはっはっはっはー！」

本来ならば、明日になってから聞くはずであったらう笑い声が、俺の耳に入って来た。いや、相手側の立場からすれば、このタイミングで来るのは当然と言える。俺だって、そうするだろう。

振り返ると、紫色のスーツを着たオールバックの男、京極霧夜が、いつものごとくバラの造花を啜え、こちらに歩いて来ていた。

横にはもちろん、無表情な紫髪の長身メイドさん、ミストリアの姿がある。

「……どうも」

「あつ、どうも」

京極と共に、俺の前までやって来た彼女が、丁寧に頭を下げるので、ついついこちらも合わせてしまう。

バラの造花を左手で弄びながら、京極が一步前に入る。彼は、ふつと鼻で笑った。

「やあ、白坂。君達の合体練習、離れたところから、少しばかり拝見させて貰ったよ」

「決闘の前日に視察とは、ご丁寧なことで。それで？ 何か成果はあったのか、京極」

「ああ、あったとも」

京極も、俺と同じく、十四歳でスーパーロボットパイロットになった男だ。サヤナミカのことを馬鹿にしても、舐めて掛かるようなこと、手を抜くようなことは一切しない。そういう隙のない男であることは、俺が一番よく知っている。

彼は右手の人差し指、中指、薬指の三本を立てて、俺に見せつけて来た。

「今日の視察で分かったことが、三つある」

「三つ？」

「一つは、明日の決闘で、サヤナミカが合体することは、まずあり得ないということ」

これは想定範囲内だ。明日の戦闘開始時にはバレることだから、知られて特に困ることはない。

だが

「二つ目は」

「北斗くん！」

京極が言い掛けたところで、人型インターフェイスの姿になった沙耶が、未佳、奈美と一緒に走って来て、俺の横に立つ。怯むことなく、京極に力強い視線を向けた。

オールバックの男は不敵な笑みを浮かべ、沙耶にバラの造花を向け返す。

「二つ目は、ピンクの彼女が、二日前とは比べ物にならない程に成長していること。おそらく、今回の決闘で白坂が乗り込むのは、彼女だろう？」

「……」

「だとすれば、ミストを破る為の策は彼女にあるってことだ。例えば、一点突破の必殺技とかね。ああ、そうだ、言っておくけど、カウターを当てるなんて甘いことは考えない方がいい。自身のスーパーロボットの弱点くらい、把握しているつもりだよ」

やはり、ラブファイヤーパンチは見切られている。こめかみを嫌な汗が伝う。

ただ、分からないのは、三つ目だ。これ以上、何かあるというのか。俺には考えが及ばない。

だから、京極に尋ねた。

「三つ目は、何だ？」

オールバックの男は、俺の目を見て、答える。

「君の目だよ、白坂」

「俺の……目？」

「今日の視察の最大の目的さ。果たして、君に戦う気力が残っているのかどうか、僕はそれを確かめに来たんだ。安心したよ。僕はてつきり、二日前の宇宙怪獣の件で、決闘に臨む闘志なんか完全に削がれて、フヌケになってしまったんじゃないかと思っていたからね。いや、元々フヌケだったか」

「誰がフヌケだ、おい」

真顔で言つてのける京極にムカツと来るが、彼は構わず続ける。

「ところがどうだ、今の君の目は、闘志に満ち溢れている。僕に決闘を申し込んで来た時よりも、ずっとね。まあ、合体もロクに出来ないスーパーロボットごときに僕が負けることはあり得ないが、明日の決闘は、全力で行かせてもらうとするよ。獅子は兎を狩るにも全力を尽くす。そして僕は、兎に噛み付かれるような真似はしない」
京極の瞳が真剣なものに変化する。熱くも、冷静な、覇気すらも纏った視線。

俺は直感的に悟る。

……このままじゃ、サヤナミカは負ける。

「じゃあ、僕はそろそろ失礼するよ、白坂。明日はせいぜい楽しませてください」

紫色のスーツの男は、再びバラの造花を啜えと、「……失礼します」とお辞儀する無表情なメイドを連れて、演習場を去って行く。俺のところへ近付いて来た未佳が、思い詰めた瞳で、ジャージの袖を引つ張つて来る。

「ほーやん、ウチ……」

「心配するな、未佳」

わしわしと金髪癖っ毛の頭を撫でる。

「俺が何とかする」

今夜中に何か、新たな策を思い付かなくては。

未佳にああ言ったものの、なかなか良い策は思い付かない。

「んー」

白坂家の暗い自室で、デスクの明かりだけを点け、ボールペン片手にメモ帳を格闘するが、何度ペンを走らせても、結局は丸めた紙屑に変わってしまう。

先程考えたのは、奈美のハートドライブ属性である氷を最大限に活用した策で、決闘開始と同時に、奈美にアイスブリザードを使用させ、演習場の地面をスケートリングのように凍らせるというもの。大型のスーパーロボット、ミストリアの重量ならば、幾ら分身しようとも、実体が存在する場所の氷が重さに堪え切れず、砕けて足跡が残るはず……のだが、分身が十体、加えて高速で実体交換されようものなら、俺でも見切れる自信がない。むしろ、足跡が残るということを京極に利用される可能性もある。

「あー、駄目だ、思い付かん！」

もっとシンプルで、相手に利用されず、どちらに転んでも良い作戦を考案しなくてはならない。以前のように俺一人で戦うなら、多難しい作戦でも、技量さえあれば何とかなるだろうが、今回は三人娘と共に、四人で戦うのだ。

多少融通の利く策でなければ、見切られた際に、一つの小さな穴からダムが決壊するかのごとく、あっという間にコンビネーションを崩されて、敗北してしまうだろう。

だが、融通の利く策と言っても、こちらの切るカードの枚数が、余りにも少な過ぎる。

最も強力なカードであるところの沙耶は、既に京極に見切られている。ジョーカーとなるラブファイヤーパンチの存在も気付かれている。実質、手札は全てオープンされたと言っても、過言ではない。せめて未佳の出力が、今日の合体練習で百パーセントを越えていたならば……いや、それは言うまい。

奈美のカードは余りにも不確定要素が強過ぎる。そもそも、俺の

意思で場に出させて貰えるのかどうかすらも怪しい。

だとすると、やはり……見切られていると分かっているとしても、沙耶を切り札にして、ギリギリまで必殺技の存在を隠しつつ、根本的な技量で、京極を上回るしかない。ミストリアの分厚い装甲を貫くには、ラブファイヤーパンチが不可欠なのだ。

手首のSRコマンドーを見ると、午前の二時を回っている。

「タイムアップ……か」

決闘は今日の午後一時から。徹夜は戦闘時の集中力に響くので、何としても避けたい。

ここまで来たら覚悟を決めて、当初の予定通り、沙耶のカウンター狙いで行くでしょう。

俺はボールペンのキャップを閉め、携帯のアラームを午前七時にセットしてから、デスクの明かりのスイッチを切り、ベッドに横になる。

毛布を被って、目を瞑った。

しかし、今日は朝から全力で走ったせいとか、全身に疲労が回っているはずなのに、意識は妙にはつきりとしていて、眠れない。

こうしてベッドで横になっても、明日の決闘のことばかり考えてしまう。

俺は間違いなく、緊張していた。

何でこんなに緊張するのか、自分でもよく分からない。未佳に付いての不安は取り除かれたはずなのに、胸がどきどきしている。

俺は……そんなにも、明日の決闘に勝ちたいんだらうか？

ふと、一つの疑問が脳裏を過る。

もともとは、勢いで掴み掛かった俺の責任で、京極と決闘することになってしまった。奈美にも馬鹿と言われた通り、軽率な行動だったと思う。だから俺も、最初は乗り気じゃなかった。

けれど、奈美の秘めたる悔しさを知って、俺は彼女に、サヤナミカに勝たせてやりたい気持ちになった。

敗北に打ちのめされながらも、強くなりたいと願う沙耶の姿に、

一緒に戦ってやりたくなかった。

孤独の恐怖の震える未佳を見て、俺は自分の中の大切な物を見つけた。

「そうだ……俺は、サヤナミカと一緒に勝ちたいんだ。」

「彼女達と、一緒に。」

何気なく目を開けた。目は暗闇に慣れて、カーテンの隙間から差し込む月明かりに、ぼんやりと自室の形が見て取れる。

ふと、部屋の扉が開けられるのが、視覚と聴覚で分かった。

誰かが、そつと室内に忍び込んで来る。ゆっくりと俺の寝ているベッドの方に近付いて来る。

「……誰だ？」

「……」

返事はなかった。ただ、闇におぼろげに浮かぶシルエットと、雰囲気で、理解する。

「未佳か？」

「……にゃあ」

聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で鳴いて、未佳は俺の足元の方から、もそもそとベッドに潜り込み、俺の背中 窓側の方に顔を出す。

「彼女は俺の背中に身を寄せて、抱き付いて来る。」

「ちよっ……未佳、さてはお前、また寝惚けて……！」

「違うんや」

「腹部に回された手に、ぎゅっと力が込められる。」

「え？」

「ウチは今日、自分の意思でここに来たんや。……ほーやんの側で眠りたくて」

「そこで俺は気付く。」

「未佳、お前……震えてるのか？」

「……」

彼女は答えない。けれど確かに、ふるふると微かな震えを背中に

感じる。

静かな暗闇の中、金髪癖っ毛少女の小さな声だけが、俺の耳に届く。

「ウチな……どうして今日、ハートドライブ出力の伸びが八十六パーセントで止まったんか、自分で心当たりがあるんや」

「……何かまだ、悩みがあるのか？」

「うん……」

俺は末佳の手の甲に触れる。どうして、彼女はこんなにも震えているのだろうか。何かを怖がっているかのようだ。

「話してみ」

「ウチ……ほーやんと一緒に暮らすようになってから、よう同じ夢を見るようになったんや」

「夢？」

「そう、夢。その夢はな、最初は夢なのかどうかすらも分からへん。目覚めると、朝で、いつもと同じ自分の部屋なんや。ウチはベッドから起きて、一階のリビングに降りる。だけど」

金髪癖っ毛の少女は言う。

「いつもなら、エプロンを付けて、朝食を作っているはずのほーやんが、何処にもいない」

彼女曰く、その夢の中は、俺 白坂北斗が存在しない世界なのだそう。場所は白坂家。しかし、いつもならば洗濯物を干しているはずのベランダ、寝起きして、学校の宿題に勤しんで、趣味のライトノベルを読み耽っている私室、何処を探しても、俺の姿はない。「だから、ウチはさーやんとなーやんを起こして訊くんや。ほーやんは何処にいるんや、って。けどな、二人共、ウチが幾ら真剣に尋ねても、首を傾げるん。ほーやんって誰？ って真顔で答えるんや。ウチはそこで、ようやくこれが夢の世界なんだって気付く。ウチはその度に、ごつつう怖くなるんや。もしもこの夢から覚めた時、本当にほーやんがいなかったらどないしよう、本当はこれが現実で、ほーやんがウチらの傍にいてくれる世界の方が夢だったら、どない

しよつて……」

「じゃあ、ひよつとして、一昨日、仮眠室のベッドに忍び込んだのは……」

「うん……」

寝惚けていたというのは嘘で、その夢を見て、彼女は怖くなったのだらう。

「……それで、今日も、同じ夢を見たのか？」

「ほーやんが、ウチらと一緒に居てくれるって教えてくれたのに……ウチはやっぱり怖いんや……。心のどこかで、今日の出来事は夢なんじゃないかって、疑ってる……」

不安げな声を出す未佳。

なので、俺はため息混じりに言ってやる。

「そうか、残念だったな」

「ほ、ほーやん？」

「お前が信じられなかるうが、何だろうが、これは紛れもない現実だ。今更お前がどんな夢を見ようとも、俺がサヤナミ力の正式なパイロットになったことに変わりはない。俺はお前の目の前にいる。知っての通り、俺は約束とか、契約とか、一度決めたことには、とことん執着するタイプなんでな。だから、意地でも消えてやらねえよ」

「そうやったね……」

俺の背中に、こつんと未佳の頭が当たる。

「ほーやんはウチらの側に居てくれる。せやから、ウチも、ほーやんを信じなきゃあかん。ウチだけ逃げてるわけにはいかないんや。今よりもっと、強くならんへんと……。その為に、今日だけでええ。」

ほーやん、もう一度だけ、こうして側で眠らせてくれへんか……？

朝になって、ほーやんが隣に居てくれたなら、ウチはきつと大丈夫やから……」

「それで未佳のハートドライブ出力が全開になるなら、安いもんだ。俺の背中くらい、幾らでも貸してやるよ。別に減るもんでもないし

な。不安になつたら、目を開けてみればいい。俺は天才的に寝相がいいから、朝まで微動だにせず、ここに在るぞ。仮に、宇宙人にキヤトルミューティレーションされようとも、UFOを撃墜して、すぐここに戻つて来る。だから、心配せずに寝る。お前が目を覚ました時、必ず隣に居てやるから」

「うん……！」

安心したのか、それとも眠くなつたのか、未佳はそれ以上何も言わない。

くつ付いた背中が、ぽかぽかとホツカイ口のように温かい。そのせいか、決闘前日の緊張もどこかへ行つたようで、次第に俺の臉も降りて来る。

途切れ気味になる思考で、俺は何気なく思つたことを訊いてみる。

「なあ、未佳……」

「にやあ……？」

「明日の決闘、勝ちたいか……？」

「勝ちたい……ほーやんと一緒に……」

「そう、か……」

未佳の奴、やっぱ温つけえな……。本当……猫みたいだ……。

俺の意識は、心地良いまどろみの中に沈んでいった。

「北斗くん」

誰かが俺の名前を呼んでいた。

「北斗くん。北斗くんってば」

身体が揺すられている。

「北斗くん！ 起きないと、ちゅーしちゃうよ！」

……うるさいな、少し静かにしてくれ。俺はまだ眠い。

「いや、待てよ、これはひよっとしてチャンスってやつじゃ……？
今ならば、北斗くんに、ちゅーをし放題……！ うわっ、何かボ

ク、猛烈に興奮して来た！」

何だろう、思考は回らないのに、起きなければ危険だと、身体が訴えている気がする。

「で、では、せつかくだし、一回目はマウス・タワー・マウスで……！」

マウス？ ネズミ？ いや、唇か？ トワーって、何て意味だっけ……？」

「ちゅー」

「真剣白刃取りッ！」

ぱちいんっ！

「ひでぶっ！？」

身体が反射的に俺の両手を動かし、迫り来る何かを挟んで受け止めた。十四歳でスーパーロボットパイロットになるまでに、様々な武道を習得した結果得た防衛能力が、無意識の内に発動したらしい。それにしても、両手が挟んだ物は、やたらと張りがあって、柔らかい。ぷにぷにしている。何だろうか、これは？ 受け止めた時に、爽快な音と、昔の少年漫画に出て来るような悲鳴が聞こえたが……。

「ん……」

未だ漂う眠気で重い、瞼を開く。

目の前に、潰れた饅頭みたいになっているピンクツインテール少女の顔があった。

俺は彼女に問う。

「お前……何してんだ……？」

「……いえ、何も」

両手で挟んでいた物は、沙耶の頬っぺただった。試しに押ししたり引っ張ったりしてみる。ぐにーん。

「沙耶……ふと思ったんだが……」

「はひ？」

「お前……凄く（肌が）綺麗なんだな」

「ふああああああっ！？」

沙耶の顔がみるみる赤くなって、ぼんっ！と頭のとっぺんから湯気を噴出した。

「熱っ!?!」

同時に、引っ張っていた頬っぺたが、熱した金属のごとく高温になって、思わず両手を離す。いや、金属で合ってるのか。沙耶の身体は、圧縮ナノマシンで出来てるわけだし。あるいは、彼女のハーフトドライブ属性が炎だからかもしれない。

いずれにしても、今の熱さで完全に目が覚めた。

自室のベッドの上で仰向けに寝ていた身体を起こし、室内を見渡す。ベッドの脇には、何故か顔を赤くしている沙耶が立っている。

「……………って、沙耶!? 何でお前、俺の部屋にいるんだ!?!」

「おおお起こしに来たんだよ! 決闘の当日だっていうのに、北斗くんが全然一階に降りて来ないから!」

「は?」

枕元に置いてある携帯電話を取って、開く。時刻は朝の五時七分。寝る前にセットしておいたアラームが鳴るのは、午前七時であるから、まだ二時間も早い。

「何だ、脅かすなよ。決闘は午後の一時からだぞ? 一瞬、寝過ごしたかと思っただじゃないか」

良く見れば、カーテンから差し込む光も、まだ光量が弱い。

しかし、沙耶は口先を尖らせる。

「寝過ごしてるよ、特訓の時間には!」

「特訓? ……あっ!」

すっかり忘れていた。必殺技の特訓のこと。昨日の早朝の出来を見る限り、ラブファイヤーパンチは、ほぼ完成した物だと思っていたし、合体練習が決闘前最期の訓練になるものだと思い込んでいたが、そう言えば、今朝はどうするのか、全く考えていなかった。

「まさか、北斗くん、忘れてたの…………?」

「すまん…………頭から完全に抜け落ちてた」

「酷いっ! ボクはちゃんと時間に遅れないように準備してたのに

！
よく見ると赤色のジャージ姿である沙耶は、ぶんぶん両腕を振り回して来る。

「ちよっ、危ないから止める！ お前の拳は生身の俺にとっては凶器なんだって、凶器！ つーか、さっきからお前、やたらと顔が赤くないか？」

「そ、それは……北斗くんがさっき、変なことを言うから……！」

「ん？ 俺、何か言ったっけ？」

「言ったよ！ 僕の頬っぺたを触って！ ひよっとして……それも覚えてないの？」

「あー、すまん。沙耶の頬っぺたが異常に熱かったのは記憶にあるんだが、起きてすぐだったせいかな、それより前に何を言ったかまでは」

「ほ……北斗くんのバカアアツ……！」

彼女は、両腕どころか、全身を凶器に変えて暴れ始める。

もそもそと俺の隣 ベッドの窓側の方で、毛布を被った何かか動いた。声を上げる。

「にゃー……」

猫のような声だった。

「え？」

目を丸くする沙耶。

「あ」

俺は背中から冷汗が溢れ出すのを感じる。そうだ、この部屋には、もう一人いたんだった。

沙耶は頬の筋肉を引き攣らせる。

「ま、まさか……！」

彼女はベッドの毛布を掴み、勢いよく剥ぎ取る。

金髪癖っ毛の少女が、俺の寝巻きの裾を掴み、隣で眠っていた。

……何だろう、天才パイロットたる俺でも、さすがに予知能力は所持していないが、この先のオチが読める。

ベッドの脇から、部屋ごと燃やし尽くさんばかりの、渦巻く熱気を感じる。

恐る恐る沙耶の方に視線を向けると、ピンクツインテールがゆらゆらと赤のオーラを帯び、浮き上がっていた。こめかみには青筋が立って、瞳には紅蓮の輝きが灯っている。

「北斗くん、これはどういうことかな？ 懇切丁寧に説明して貰えと、ボクとしては凄く有難いんだけど。というか、説明すべきだよな」

怒った時の鈴音さん並に恐怖を感じた。むしろ、ハートドライブにより、怒りが炎となって具現化してる分、身の危険も合わせ、リアルな恐怖を肌を感じる。

「お、落ち着け、沙耶。これには、マリアナ海溝のチャレンジャー海淵よりも深い理由があつてだな……」

「どんな理由があると、必殺技の特訓を忘れて、決闘当日の朝に、未佳ちゃんが北斗くんの部屋で寝てることになるのかな？」

「えーっと……」

未佳の寝顔を見やる。完全に安心し切っている表情だった。

どうやら、俺のいない世界には、迷い込まずに済んだようだ。

俺は沙耶に視線を戻す。

「あー、すまん、沙耶。やつぱり、理由は話せない」

「っ……！ へえ、そうなんだ。だったら、二人まとめて……！」

彼女は怒りで顔を真っ赤に染め上げ、両手を頭上に掲げて、一昨日の朝と同じく、巨大な火球を作り出す。

……これは俺、死んだかもしれない。

火球を片手に移し、ピンクツインテールの少女は振り被る。

俺は覚悟して、瞳を閉じる。

部屋が一つ、跡形もなく消し飛……ばなかった。

「あれ？」

それどころか、火球が飛んで来ることもない。

瞳を開けて、沙耶を見る。

彼女は、火球を振り被つたまま、怒りを堪えるように自らの頬を膨らませていた。

「むううう……!!」

「沙耶……?」

顔は真つ赤なままだったが、ピンクツインテールの少女は手の平から火球を消失させ、ゆつくりと腕を下ろす。

「本当なら、部屋ごと吹き飛ばしてやりたいところだけど……!!」

北斗くんが理由を話さないのには、ちゃんと理由があるんだろうし、それに、今日は決闘の日だから……!!」

拳を握り締めながら、悔しげに口から言葉を絞り出す沙耶。

「万が一、北斗くんが腕を怪我して、ボクの操従が出来なくなったら困るし……!!」

寝る前に、未佳も決闘に勝ちたいと言っていたのを思い出す。

それと同じように、沙耶もまた、今日の決闘に強い思い入れがあるのだ。

そつだ……勝ちたいと願っているのは、俺だけじゃない。

「沙耶」

「何さ?」

不満そうなジト目をこちらに向ける彼女に、俺は言った。

「ありがとな」

「え?」

「後で、俺を煮るなり焼くなり、好きにして構わない」

沙耶は大きな瞳をぱちくりさせていたが、やがて、「うん!」と力強く頷き、

「じゃあ、煮る!」

高らかに宣言した。焼くのより怖え!

それはともかくとして、俺は未だ隣で寝息を立てている、金髪癖つ毛の少女の肩を揺する。

「んん……」

彼女は緩慢な動きで、上半身を起き上がらせる。

「何や、もう朝なん……?」

寝癖でライオンのたてがみと化した頭を掻きながら、糸目を擦った。

「未佳」

俺が呼ぶと、はっと彼女は瞳を開いて、顔をゆっくりとこちらに向ける。

視線が合ったところで、俺は軽く右手を挙げ、挨拶した。

「よっ、おはよう」

未佳は瞬きもせず、しばらく俺を見つめていたが、おもむろに口を開く。

「居て……くれた……!」

「当たり前だ。そう簡単に消えてたまるか」

「本当に、居てくれた……!」

「ぐっすり眠れたか?」

「ほーやん!」

金髪癖っ毛の少女が抱き付き、胸にぐりぐりとおでこを押し付けて来る。

ベッド脇の沙耶は、頬を膨らませる。

「むー」

未佳がそれに気付いて、顔を上げる。

「あれ、さーやん? どうしてここに?」

「それはこっちの台詞だよ!」

俺は、抱き付いているライオン頭の少女に尋ねる。

「未佳、それで、調子はどうだ? 出力百パーセント、行けそうか?」

彼女は、にかつと微笑んで、

「今度こそ大丈夫や。ウチは、ほーやんを信じられる。ぶつつけ本番になるけど、必ず百パーセント以上を出して見せたる!」

「分かった。それなら」

もはや迷うことは何もない。俺は沙耶と未佳、それぞれにアイコ

ンタクトを取る。

「 今回の決闘……俺は、お前達二人に懸けることにする」
彼女達は、互いを見合ってから、こちらに顔を向け、頷く。

「うん！」

「任しとき！」

俺はベッドから起き上がり、クローゼットの前に行って、開ける。

「よし。そうと決まったら、早速、決闘の下準備を始めるぞ」

「準備つて？」

首を傾げる沙耶に、クローゼットから取り出した、グレーのジャージを見せる。

「特訓だ。着替えて、河原に向かう」

俺は、未佳に視線を移して、言った。

「決闘までの八時間、有効に活用しないとな」

地球防衛局第一支部の演習場には、ガラス張りの観覧室が設置されている。

稀にスーパーロボット同士が戦闘演習を行うことがあるが、主にその関係者が演習を見る為に使用することが多い。高さは地上から二十五メートル程の高い位置にあり、防衛局の施設内から、あるいは演習場に隣接するエレベーターから行き来することが出来る。

一昨日の朝、美容院に行き、髪伸び放題じゃなくなった悪魔、白坂南は、第一支部の近所の駄菓子屋で新たに仕入れて来たフェラムネを啜え、一定の高さの音を響かせつつ、観覧席へと続くエレベーター脇の壁面に寄り掛かっていた。

見上げれば、快晴の青空が広がっており、やや西よりになった太陽が、暖かな日差しを演習場に降らせている。

白衣のポケットから携帯を取り出し、液晶画面を開く。時刻は十二時五十分。

演習場の中央に立つ、紫色のパイロットスーツを着た京極霧夜は、銀髪のメイド少女と共に、何をするわけでもなく、かれこれ十分以上、虚空を見つめ続けている。

南はフェラムネを吹くのを止め、カリッと奥歯で噛み砕く。エレベーター脇のボタンを押した。

しばらくして、エレベーターの扉が開き、彼女は中に乗り込む。扉が閉まってから十数秒して、観覧室に着く。

そこには、サヤナミカの開発に携わっていた研究員がちらほらと確認出来て、その他の見知らぬ顔は、おそらく京極コンツェルンの関係者か何かだろう。南のことを知っているらしく、挨拶をしに来たスーツの男が、名刺を取り出す。それを見ると、やはり『京極工業スーパーロボット開発部』と印字されていた。

面倒だと思いつつも、南は白衣の胸ポケットから自身の名刺を一枚抜き、スーツの男に渡す。

そんな感じで、他の京極コンツェルン関係者とも名刺交換を終え、ようやく見知った研究員のところへ行くことが出来た。

「やれやれ……」

南は肩を竦めながら、一面強化ガラス張りで、演習場を隈無く見渡すことが出来る、最前列の席に腰を下ろす。

斜め後ろの席に着いている男性研究員が、苦笑した。

「ご苦労様です、白坂博士」

「全くだよ。これだから、責任者つてのは嫌なんだ」

「物は考えようです。責任者だからこそ、自由が利く場合もあります」

「それはサヤナミカのことを言いたいのかね？」

演習場に目を向けたまま、南が背後に尋ねると、「その通りです」と返ってくる。

「僕は正直、サヤナミカの開発には反対でした。何故なら、サヤナミカが合体することに、特別な意義が感じられないからです。白坂博士のことは尊敬していますが、サヤナミカの開発には、明らかに

私情が、白坂博士のエゴが混ざっていた。いや、エゴそのものと言つてもいいでしょう」

「サヤナミカを作ったのは、ハートドライブの共鳴効果を証明する為だよ」

「確かに、ハートドライブには、未知の可能性がまだまだ秘められています。しかし、共鳴効果を証明するだけならば、合体させる必要はありません。双子のハートドライブを作り出して、同じ人格を持たせれば、それだけで事足りたはずです。それなのにあなたは、合体させることに、それも三体合体に拘った。三つのハートドライブに、それぞれ異なる人格を与えてまで」

「……」

南は答えない。

男性研究員は、彼女を怒鳴るわけでも、非難するわけでもなく、至って平静に続ける。

「白坂博士は、とにかくハートドライブの出力増強に拘ってしましたよね。サヤナミカに異なる人格を与えたのは、異なる人格が心を通わせた時にこそ、大きな共鳴効果を生み出すと考えたからじゃないませんか？ 三体合体を選択したのも、より大きなハートドライブ出力を得たかったからでしょう？」

「後者は合ってるよ。だが、前者には、別の理由もある」

「何です？」

「サヤナミカは、ただのスーパーロボットじゃない」

南は斜め後ろの席を振り返り、答える。

「私の、大切な娘達でもあるんだ」

男性研究員は、ふっと表情を崩して、笑った。

「白坂博士のそういうところ、僕は尊敬してます」
それから彼は、演習場に目を向ける。

「だから……僕も影響されたのかもしれない」

「ほう、何をだね？」

「僕、休憩時間の度に、ここから見ていたんですよ。サヤナミカ、

博士の義弟さんと一緒に、一週間ずっと練習してきましたよね。宇宙怪獣に敗れても、諦めずに」

南も五日間に渡る合体練習の様子を思い出しながら、強化ガラスの外に向き直る。

「……ああ。そうだな。開発者の私でさえ、驚かされることの連続だったよ。合体練習だけじゃなく、他のことでも」

「何かあったんですか？」

「いや、こつちの話だ。気にしなくていい」

再び彼女が携帯を開くと、時刻はまもなく午後の一時を示そうとしている。

背後の方で、自動ドアが開く音がする。

見ると、司令のネームプレートを付けた三つ編みの女性、羽柱鈴音が観覧室に入って来るところだった。

南は、近付いて来る彼女に手を振る。

「やあ、スズ。公務の方はしなくても大丈夫なのかい？」

鈴音は、南の隣の席に座る。

「問題ないわ。午前中の内に、急ぎの仕事は全て終わらせて置いたから」

「相変わらず、仕事が早いね。私とは大違いだ」

「あんたの場合は、仕事が遅いんじゃないかと、仕事に没頭して、家に帰らないだけでしょ。……ところで、肝心のサヤナミカがまだ到着していないようだけど」

鈴音の言う通り、演習場に立っているのは、京極霧夜とミストリアだけであり、北斗とサヤナミカの姿は何処にも見えない。

南は、涼しげな顔で言う。

「どうやらそうみたいだね」

「そうみたいって……大丈夫なの？ もう演習開始の時刻になるわよ？ 万が一遅れでもしたら、そのまま不戦敗になる可能性だって

……」

「大丈夫さ」

髪伸び放題じゃなくなった悪魔は、ニヤリと口元を歪める。

「何しろ、ウチの弟君は天才だからね」

「……ブラコンね」

「失礼な！ 私は一人の女として、心の底から弟君を愛している！」
「なお悪いわ！」

そんな会話をしていると、南の視界に三つの機影が映る。

「おっ、来たみたいだよ」

ブースターで空中を飛翔し、演習場に降り立つ、全長十五メートルの三機。それぞれ鮮やかなピンク、ライトブルー、レモンイエローの三色に彩られた機体は、間違いなく、南が開発したスーパーロボットである、サヤとナミ、そしてミカ。

彼女は手元の携帯の液晶を見た後、それを白衣のポケットに入れた。

「午後一時ジャスト。……さて、いよいよだ」

ついに、サヤナミカとミストリアの決闘が幕を開ける。

第三章 / 譲れないもの・4

「サヤ、外部音声を聞いてくれ」

俺は機体を演習場の中央に着陸させた後、コクピットのモニターに表示されているデジタル時計が、十三時になったのを確認してから、ウィンドウに映っている、ピンツインテールの少女に言った。

『了解。外部音声の回線をリンク。準備オツケーだよ、北斗くん』
「よし。あー、テスト。聞こえるか、京極！」

サヤの機体前方で腕を組み、こちらを見上げている、紫色のパイロットスーツの男に呼び掛ける。

彼の口が動き、

『そんな大声を出さなくても、聞こえているよ、白坂。耳障りだから、音量を下げてくれないかな』

嫌味つたらしい声がコクピット内に流れて来る。

なので俺は、サヤに指示を出す。

「サヤ、外部スピーカーの音量を上げてくれ。五割増しくらい」

『うん、分かった』

『ちよつと待てえええ！』

見ると、京極が耳を塞ぎながら、騒いでいる。

「何だよ、うるさい男だな」

『うるさいのは君の声だ！ 外部スピーカーの音量を下げろ！ 変な嫌がらせは止めて、正々堂々と勝負しないか！』

「甘いな、京極。勝負は戦う前から始まっているんだよ。そして、俺は正々堂々、真正面から嫌がらせをしている！ ボクシングとかの格闘技で、試合前にやる、舌戦と同じだ。お前は、俺のスーパーロボットを酷

く馬鹿にしてくれたからな。これはそのお返しだ、キザ野郎」

『白坂、貴様あ………！』

オールバックの男は、腹立たしげに顔を歪める。

俺はトドメとして、サヤの操作を借り、左手は腰に、右手の平は上にし、親指以外の四本の指を同時に動かして、挑発のポーズを取る。

「心配しなくても、ちゃんとスーパーロボット同士の戦闘でも勝つてやるよ。ただ、スピーカーの音量が気になって、戦闘に集中出来ないというなら、考えてやらないこともないが、どうする？」

『ふざけるな！ ミストツ！！！』

こめかみに青筋を立てて、京極が隣のメイドさんの名を叫ぶ。

ミストは、無表情な顔を主人の方に向ける。

『……はい、何でしょう、マスター』

『ロボットモードに変身しろ！ このフヌケ男を、力で黙らせる！』

『……了解しました』

平坦な口調で答えた彼女は、突然、ふわっと風船が浮き上がるように、大きく後方に数十メートル程跳躍し、着地。

メイド服のスカートをそっと両手で摘まみ、持ち上げて、お辞儀をする。

『……変身と、それに伴う掛け声、失礼致します』

そう言って、顔を上げた彼女は、

『参ります』

両手を重ね合わせ、印を結んだ。

『チェンジ、ミストリア！ ロボットモード！』

透き通った、張りのある声が響き、鮮やかなパープルの光が彼女を包み込む。

身長百七十後半の長身である紫髪の少女は、巨大化にもそれを反映させ、あつという間にサヤ、ナミ、ミカの全長を追い抜き、三人娘のおよそ三倍、全長四十メートルの巨軀を誇る、パープルカラーの西洋甲冑を纏った、忍者のごときスーパーロボットと化す。

黒いゴーグルの奥の黄色いアイカメラが輝き、首に巻いた黒いマフラが風になびく。

重装甲タイプのスーパーロボット、ミストリア四式。

鋼鉄の彼女は、巨大な足を進ませ、こちらに近付いて来る。

俺達とミストリアとの数十メートル開いていた距離が近くなるにつれ、見上げる角度が大きくなり、四十メートル超という巨大さを、改めて実感させられる。

『……マスター、ロボットモードへの変身を完了致しました』

京極の近くまで辿り着いた彼女は、従者の機嫌を窺うように、片膝を着いて、頭を垂れる。

『よし！ ミスト、コクピットハッチを開放！ 搭乗する！』

『……了解しました。マスター、私の手に』

ミストリアが巨大な手の平を京極の前に差し出す。

オールバック男はそれに飛び乗る。

巨大な手の平が腹部に移動するのに合わせ、腹部装甲が上に開く。その奥には更にハッチがあり、左右にスライドし、コクピットを露わにする。

京極が中に乗り込み、二重のハッチが閉じて行く。

ミストリアのアイカメラが一際強く輝いて、紫色の巨軀を立ち上がらせた。

俺達と対峙する全長四十メートルのスーパーロボットは、まるで目の前に、一つの山がそびえているかのようだ。

ふと、サヤの身体が震えていることに気付いた。俺はウィンドウのピンクツインテールの少女に、声を掛ける。

「サヤ、怖いのか？」

『うん、怖い……！』

「心配するな、俺が付いてる。それと、今日まで練習して来た、自分の力を信じる。身体のサイズは小さくても、お前のハートドライブ出力は、他のスーパーロボットにも負けない」

ウィンドウ内の沙耶が深呼吸をすると、サヤのボディーも震動を止める。

彼女はウィンドウ内の自分の頬を、ぴしゃりと両手で叩いた。

『……これで大丈夫！ 後は……全力を尽くすだけ！ 行けるよ、

北斗くん！』

「ああ。なら俺は、お前を信じる！」

ミストリアの外部スピーカーから、京極の笑い声が響く。

『はーっはっはっはっはー！ 立場が一気に逆転したな、白坂。今度は僕が君を見下ろす番だ』

俺はモニターを覆い尽くさんばかりの巨軀を見上げて、言う。

「巨大な鎧を得た途端、急に機嫌が良くなったようじゃないか」

『機嫌……？ 最悪に決まってるだろ、そんなもの』

京極の言葉には、強い怒気が込められていた。彼は吐き捨てるように、続ける。

『ずっと最悪だった。機嫌が最悪なのは、逆れば三年前からだ、ここ一ヶ月は過去最悪の極みだ。秀才の僕に唯一並ぶ男が、そんなちっぽけで情けないスピーカーロボットと慣れ合って、墮落していった。ここ最近で君は変わったよ、悪い方向にね。少し前の君は、もっと冷静沈着で、何事にも動揺しない、ム力つく男だったが、確固たる信念を持っていた。それが、今やスピーカーを大音量にして、嫌がらせをして来るような矮小な男に成り果てた。見るに堪えないんだよ。腹が立つ』

「俺の目指している先は、今も昔も変わらない。ただ、そこには、俺一人では辿り着けないんだと気付いた。確かに俺は、変わったのかも知れない。一ヶ月の間、墮落していたのも真実だ。だけど、今の俺は、自分が間違った方向に行ったとは思っていない！」

親父と一緒に居た時の温かさ。今の俺には、それが感じられる。

きっとそれは、サヤ、ナミ、ミカと一緒にいるからなんだろうと思う。

一度失った何かを、俺は思い出しつつある。

この温かさは、俺を邪魔するものだろうか？

絶対に違う。

だって俺は、この温かさを知ったからこそ、親父のような、スピーカーロボットパイロットになろうと思ったのだから。

ミストリアが巨腕を左右に広げる。

『分かっているさ。今更言葉を交わして、どうなるものでもない。第一、元より分かり合うつもりなどない。だから、僕は今日、この戦いに勝利することで証明してみせよう。君がいかに墮落し、変わり果てたか……そして、僕がいかに君より優れたスーパーロボットパイロットであるか!』

両腕の甲から鋼鉄のブレードが展開すると同時に、ミストリアの頭部が防衛局の施設の方を向く。

『管制塔、演習場の防護フィールドの展開を!』

京極は、姉さんや鈴音さんが見ているであろう観覧室とは別に、演習場の隅に立っている塔型の施設に呼び掛ける。

『了解、防護フィールドを展開します!』

管制塔の外部スปีカーが返答し、演習場の周囲の地面から、高さ百メートル程の支柱がせり上がる。特殊合金で出来ており、数は四本。

それぞれの支柱から薄い光のヴェールが伸び、支柱同士を繋ぎ、演習場の周りを四角に囲う。まるで、ボクシングやプロレスのリングを定めるかのよう。

この防護フィールドは、流れ弾等が演習場より外へ出るのを防ぐ以外に、戦闘演習における行動可能範囲を制限する意味合いもある。演習場の広さは一キロ四方。障害物は一切無し。

「サヤ、一時的に外部スปีカーとのリンクを切断」

『了解!』

サヤに頼んで、通信の音が外に漏れないようにしてもらおう。

俺は、ウィンドウに映っているポニーテールの少女　サヤの左横に立っているライトブルーの機体に最終確認をする。

「ナミ、作戦は、ここに来る前に伝えた通りだ。お前はミカと一緒に、ひたすらミストリアの分身と思われる奴に攻撃を浴びせてくれ」
『つまり、我は目の前の敵に集中すればよいわけだな?』

「ああ。ただし、敵の攻撃には気を付ける。実体交換による不意打

ちが、いつ来るか分からない。まともに喰らえば、パワーに物を言わせて、そのまま捻じ伏せられる。とにかく、敵の攻撃をかわすことが最優先事項だ。いいな？」

『……よかるう。私も、同じ轍は踏まん。貴様の命令を聞くのは不本意だが、この前のような醜態を晒すよりは……遥かにマシだ！』
「それから、ミカ」

俺は、金髪癖っ毛の少女が映っているウィンドウに視線を移す。
『にゃ？』

サヤのように緊張しているわけでもなく、ナミのように闘志に満ち溢れた表情をしているわけでもなく、やけに落ち着いた様子で、ぱちくりと瞬きをするミカ。

「お前は、何というか……いや、落ち着いてるのはいいんだけど、逆に落ち着き過ぎというか。……大丈夫なのか？」

『えっ？ ああ、ごめんな、ほーやん。変に心配かけてしもうたみたいやね。ただ、今、凄くハートドライブが穏やかなんよ。戦いの前やのに、自分でも不思議なんやけど。何と言ったらええかな、そう……ホツカイロや』

「ホツカイロ？」

ウィンドウの彼女は、にかつと八重歯を覗かせる。

『ハートドライブがぽっかぽかに温まってるってこと。ほーやんと一緒に居るからかもしれへんね』

……そういえば、猫って生き物はマイペースなんだったな。姉さんも言ってたっけ。

俺は瞼を閉じて、サヤと同じように、深呼吸をする。

ゆっくりと息を吐き、目を開けて、三人娘に告げた。

「よし！ 行くぞ、三人共！」

『うん！』『承知！』『にゃあ！』

再び外部スピーカーの回線を開き、機体を構えさせると、管制塔のスピーカーからも、最終確認が来る。

『それでは、ミストリアとサヤナミカの両者とも、準備が出来たよ』

うなので、これより戦闘演習を開始したいと思います。戦闘演習のルールに則り、どちらかのパイロットが搭乗している機体の損傷率が、五十パーセントを超過した時点で、演習は終了とします。よろしいですね?」

「はい!」

「問題ありません!」

俺と京極が答えると、どのくらいだったかも分からない、数秒だったか、数十秒だったか、しばしの間、沈黙が辺りを支配する。

「では」

やがて、その支配を突き破り、演習場に、ゴングの代わりとなる言葉が響いた。

「 演習開始ッ!!!!」

先に動いたのは、ミストリアだった。

巨大な手の平を重ね合わせ、先日の宇宙怪獣との戦闘で見せた、あの印を結ぶ。

「白坂、早速で悪いが、僕は最初から全力で行かせて貰うよ。昨日も言った通り、獅子は兎を狩るにも全力を尽くす。そして僕は、兎に噛み付かれるような真似はしない! ミスト!」

「……はい、参ります」

京極の呼び掛けに応じ、ミストリアの黄色いアイカメラが発光する。

「幻影の舞」

何枚重ねにもしていた薄い紙を剥がして行くがごとく、ミストリアの背後から、第二のミストリア、第三のミストリアが現れ、やがて、最初のミストリアと合わせ、総勢十体となる。

三人娘の三倍近くもある巨人が、十体である。それらが全て、こちらを見降ろしているのだ。モニター越しの俺にさえ、尋常じゃない威圧感が伝わって来る。まるで山脈を見上げているかのような気分だ。

だが、サヤは震えていなかった。ウィンドウの彼女は、必殺技の

練習をしている時のように、凜とした表情をしている。

ナミは「ふん」と相変わらず不敵な笑みを浮かべ、右手を手刀の形にする。

ミカも戦闘体勢になる。腰を屈め、両手をコンクリートの地面に着け、四足歩行の構えを取る。

対峙する十体のミストリアのブースターが、唸りを上げた。

『行くぞ、白坂！』

京極が言うや否や、その中の三体が飛び出し、サヤ、ナミ、ミカにそれぞれブレードで襲いかかって来た。

すかさずブースターを噴射して避ける三人娘だが、三体のミストリアは巨体に似合わぬ素早さで、更なる斬撃を繰り出す。

それに呼応するかのように、三人娘が技名を叫ぶ。

『ファイヤーブレード！』『フリーズランス！』『サンダークロウ！』

サヤは、右手で握り拳を作り、それを柄代わりにして、炎の刀身を伸ばす。

ミストリアが放つ上からの斬撃を、ブースターで横にかわす。そのまま地面を砕くはずの一撃が、溶け込むようにコンクリートに吸い込まれるのを見て、サヤはミストリアの懐に飛び込む。

『はああッ！』

ファイヤーブレードで、眼前のミストリアのボディーを横一線に薙ぐ。

分厚い装甲が紙切れのように裂け、ミストリアの幻影は霧が風で吹き飛ぶように、消滅した。

ナミは、あらかじめ構えていた手刀を腕ごと凍結、肘から先を氷で覆い尽くし、氷柱のように長く、鋭い槍を作り出す。ナミの十八番の技にして、メインウェポンの氷槍である。

彼女は先日、宇宙怪獣に敗北した鬱憤を晴らすごとく、ミストリアの攻撃を最低限のステップで避けると、一気に突っ込んで、攻勢に出る。

『見切った!』

腕が分身して見える程の、氷槍の高速乱れ突きを放つ。

彼女の言った通り、ミストリアの幻影に無数の穴が穿たれ、風穴だらけとなったボディーは形を保つことが出来ず、崩れ去った。

一方のミカは、四足歩行の体勢から、腕力と脚力、加えてブースターの勢いを利用し、ミストリアの攻撃を逃れて飛び上がって、空中でムーンスルトをする。

両手は既に電撃を帯び、白く発光している。ミストリアが上空を見上げる前に、ブースター全開で急降下、

『うにゃあッ!』

両手の指先を食い込ませるようにして、ミストリアを縦に引き裂く。霧散する幻影。

結果として、本物は一体もない。京極は慎重な男であるから、全力とはいっても、まずは様子見のつもりなのだろう。

「どうした、京極! 幻影だけを突撃させて、自分は高見の見物か!」

俺が外部スピーカーで煽ると、両腕を広げたポーズで並び、待機している残り七体のミストリアから笑い声がする。

『はーっはっはっはー!』

声は最初、中央のミストリアから聞こえたが、

『煽っても無駄だよ、白坂』

次は右から、

『僕は焦って、決着を急ぐような真似はしない』

今度は左から、声がする。実体交換して、本物を悟られないようにする為だろう。

声の位置は留まることなく、しかし京極の話は続く。

『チェスや将棋と同じさ』

『いきなり敵のキングを取ることは出来ないし』

『焦って手を進めれば、逆にこちらの間隙を作ることになる』

『今のは、君達が、サヤナミカがどの程度の実力を持っているのか』

測る為の、言わばジャブみたいなものさ」

「それに、ミストリアの幻影は、最大九体までならば、幾らでも分身して、作り直すことが出来る」

その言葉通り、中央のミストリアが印を結ぶと、新たに三体の分身が増え、元の十体に戻る。

「ミストリアにとって、分身は、チェスで言うポーン、しかも、いつ何時でも盤外から呼び出すことの出来る、不死身の歩兵なのさ」

「それを倒した程度で、粹がって貰っては困るな」

「しかし、どうやら、腐っても鯛、腐っても白坂北斗のスーパーロボットとあって、完全に無能というわけでもないらしい」

「ピンクのお嬢さんだけじゃなく、ライトブルーとレモンイエローのお嬢さんも、思ったより出来るようだ」

「だから、次は」

俺の、パイロットとしての直感が、告げる。

「三人共、気を引き締める！ 来るぞ！」

「十体全員で行かせて貰う！」

ブースター点火と同時に、十体のミストリアが一斉に突撃を開始、乱戦にもつれ込む。

ナミとミカに向かって来たのは、それぞれ四体ずつ。

「この程度！」

ナミが氷槍の右腕を構え、真正面から迎え撃とうとするのが、モニターに見える。

「ナミ、言っただけだ！ 避けることを最優先に考える！」

「くっ……！」

明らかに反撃を繰り出そうとしていた彼女は、氷槍を引き、ブースターで後退しつつ、四体のミストリアの攻撃を凌ぐ。

ミカにも襲い来る、四体のミストリア。ミカならではの柔軟な動きで、空中を舞い、斬撃の雨を潜り抜ける。

それぞれ四体ずつ……計八体を彼女達に割いたということは、どうやら、京極はまず、ナミとミカから潰すつもりらしい。

いや、待て。本当にそうか？ ……違う、逆だ！

「サヤ！ 気を付けろ！」

ウィンドウのピンクツインテールの少女に言う。彼女に迫って来るのは、二体。

サヤは一体目の斬撃を避ける。先程と同じ要領で、懐に飛び込み、切り裂く。そのミストリアは幻影であり、靄のように揺らめく。

問題は二体目だった。消えかけた幻影を両断するようにして、サヤにブレードを振り下ろして来た。

『うあっ！』

炎の剣の前に構えて、敵のブレードを受け止めるサヤ。二体目のミストリアは本物で、鏝迫り合いになる。

京極は笑う。

『はーっはっはっはー！ さすがに一撃では仕留められないか、白坂！』

「当たり前だ！ 舐めるな！」

『だが、こうしてパワー勝負に持ち込めた。ミストリアのハードドライブが京極工業製の出力強化型なのは、知っているだろう？ 故に、純粋な出力で、ミストリアに並ぶ者は存在しない！ どちらにしても、チェックメイトだ！』

腕のブレードに、上方からの力を込め、サヤを押し潰そうとするミストリア。

『ぶぐう……！』

炎の剣にもう片方の手も添えて、堪えるサヤだが、押し返し切れず、足の膝が次第に折れ曲がって行く。

ビキィッ！ と足元のコンクリートにヒビが走り、沈み込む。

「サヤ！」

このままではマズい。ここは予定より早いが、ミカに頼るしかあるまい。

「待ってる、今」

『駄目だッ！』

サヤが怒鳴る。ウィンドウの彼女は真剣な眼差しで俺を見て、言った。

『まだ駄目だ！ ボクのは心配ない。だから、北斗くんは、自分のすべきことに集中して！』

「だけど、お前……！」

『だけでもへつたくれもない！ 北斗くん、さっき言ったよね。ボクを信じるって。だったら、信じて。信じて、前を見て。ボクはボクのすべきことをやる。必ず遣り遂げてみせる。だから、今は……』

「……分かった。お前に任せる。自分の力で……ミストリアを押し返してみせる！」

『うんっ！ 押し返す!!!』

サヤは笑顔で頷く。

コクピットの会話を聞いていたのだろう、京極が『はっはっはっはっはー！』と嘲笑する。

『何を馬鹿なことを言っている？ 気合いでなんとかなる問題ではないさ。聞こえてなかったのか？ ならば、もう一度言おう。ミストリアのハートドライブは、京極工業が開発した、最新の出力強化型』

『ぶぐうううううううううう　　ッ!!!』

『何い!?!』

京極の唱える理屈を跳ね飛ばし、サヤが気合いの一声を上げ、ミストリアのブレードを押し返し始める。

地面の亀裂が広がって陥没、クレーターに変わろうとも、ピンクツインテールのスーパーロボットは屈せず、炎の剣に力を込める。

『ふぁーいーいーとおおー！』

完全にサヤの膝が伸び、まともな鎧迫り合いの形にまで持ち返す。京極が齒痒そうに、自らが駆るスーパーロボットに言う。

『ええい、何をやっているミスト！ こんな小さなロボットに、パワーで押されてどうする!』

「……申し訳ありません、マスター。しかし、これ以上、どうやっても押し切ることが」

「いっばあああああああああああつッ!!!」

直後、サヤが叫びと共に、炎の剣を思いっきり振り抜いた。

「ぐあッ!?!」

ブレードの腕を弾いた勢いで、ミストリアの巨体を宙に浮かせ、吹き飛ばす。

サヤの勢いはまだ止まらない。右手に炎の剣を残したまま、左手で火球を作り、それを宙に放り投げる。

「ファイヤーボール」

炎の剣をバットのごとく振りかぶり、落ちて来た火球を強打、

「ライナアアア ツ!!!」

ミストリアに向かって撃ち出した。

空中で体勢を立て直し、着地するパープルカラーのスーパーロボットに、炎の剛速球が走る。

「喰らうか! その程度の攻撃、実体交換で容易くかわして……何!?!」

ミストリアは火球の直撃を受け、四十メートルの巨体を、爆炎が包み込んだ。

やがて、漂っていた黒煙が消え去ると、両腕を身体の前で交差させた防御姿勢のミストリアが姿を現す。

さすがに重装甲タイプのスーパロボットとあって、堅い。見たところ、ダメージを受けている様子はない。

だが、攻撃を当てたことに変わりはない。俺は京極に言ってやった。

「実体交換が出来なくて、残念だったな」

「……」

「サヤとお前が鏝迫り合いをしている間、ミカとナミが何もしていないで見ていたとも思ったのか?」

レモンイエローと、ライトブルーのスーパロボットが、サヤの

両脇を固めるように並ぶ。

ミカとナミを取り囲んでいたミストリア八体の幻影は、既に彼女達の攻撃によって消滅しており、演習場に存在しているのは、対峙する本物のミストリアと、三人娘だけになっていた。

「まずは俺達が一ポイント先取だ、京極」

『ふっ……』

ふと、京極がぐもった笑い声を洩らした。今までの誇張するような笑い方とは異なり、心の底から可笑しいとでも言いたげな笑い。

『ふはははははははは！ それでこそ……それでこそ、白坂北斗だ！ ふははははははははは！』

ミストリアが防御姿勢を解除し、印を結ぶ。

『面白い……！ 僕と君、どちらが上か、決める戦いとして申し分ない。ミストツ！ 幻影の操作はもうしなくていい！ ここからは、本体も幻影も、全てのコントロールを僕が引き受ける！ お前は、ハートドライブ出力の安定に努める。幻影の舞、真の恐ろしさ、連中にとくと見せてやるッ！』

『……了解しました。私は後方に下がり、マスターの補助に徹します』

話を聞く限り、どうやら今までは、ミストリアが幻影を操作、京極が本体を操作、と分担して行っていたらしい。

俺は三人娘に告げる。

「注意しろ、三人共……今度の幻影は、一筋縄では行かないぞ」

ところが、いつまで経っても、ミストリアが動き出す様子はない。印を結んだ体勢のまま、沈黙を保ち続けている。

長く、不気味な沈黙。

さすがに様子がおかしいと思い、俺はカマを掛けてみる。

「どうした？ 仕掛けて来ないのか、京極！ 怖気づいたか？」

『いいや、怖気づいてなどいない。それに……もう仕掛けている』

「何を」

直後、金属の軋む音が響いた。

はっとなつて、俺は音の聞こえた方向のモニターを見る。

ライトブルーの機体、ナミの右肩の関節部分が、鋼鉄のブレードで、背後から貫かれていた。

ウインドウのポニーテール少女の瞳が、驚愕に染まる。

『なっ……！？』

ナミのライムグリーンのアイカメラが、背後の敵影を捉える。

四十メートル超のパープルカラーのスーパーロボット、ミストリアが、圧倒的な威圧感を漂わせて、そこに立っていた。

普通ならば気付くはずだが、太陽の傾いている方向の関係で、ミストリアの影は、俺達の背後の方に伸びている。それにしたって、ナミが貫かれるまで、音も、気配もしなかった。これではまるで、瞬間移動だ。

印を結んだ体勢のミストリアは、未だ俺達と距離を開けた前方に立っている。

「やられた……！ ナミ！ 退避しろ！」

ミストリアが刃を振り上げる。ナミの右腕がもげて、宙を舞い、演習場の地面を転がる。

『くっ！』

その場を離れようと、ブースターを点火するナミ。

しかし、ミストリアはそれを見逃さない。振り上げたブレードの刃を返し、

『遅い！』

ナミの頭部目掛けて、上からの斬撃を繰り出そうとする。

『しまっ……！』

攻撃を防ごうにも、彼女の武器である氷槍、フリーズランスは、右腕ごと斬り落とされてしまっている。京極がナミの右腕を狙ったのは、その為だろう。

鋼鉄の刃が、彼女に迫る。

『ナミちゃん！』

サヤが二体の間に割って入った。ファイヤーブレードで、ミストリアの攻撃を受け止める。

ナミはその隙に、ブースターで距離を開け、何とか退避に成功する。

俺はレモンイエローのスーパーロボットに呼び掛ける。

「ミカ！」

『了解や！』

ネコミミ型の排熱口のファンを開き、ピンクのアイカメラを光らせ、四足歩行の構えを取り、ミカはミストリアに突っ込む。電撃を帯びた爪を振りかざした。

ミストリアが紙のように切り裂かれ、消滅する。

「実体交換……！」

俺は額から嫌な汗が伝うのを感じる。

身代わりの術とでも言うべき、速さと変則さ。

そして、サヤとミカに、巨大な影が差す。

『遅いと……言っているだろう！』

ミストリアがブレードで薙ぎ払う。

サヤとミカは、サイドステップで間一髪回避する。

幻影は霧が晴れるように薄れて消え、離れた所にいるミストリアが、結んでいた印を解いた。

『ふはははは！ どうだ、白坂。これこそが、ミストリアのハートドライブ属性「幻」の真骨頂！ 実体交換の、真の使い方だ！』

分身と自分の頭の中で決め付け、幻影は実体から分かれるようにして発生するものだと思っていた。しかし、実際は違う。

「幻影は、京極、お前の思い通りの位置に出現させることが出来るのか……！」

『その通りだ。といつても、出現させられる場所の限界距離は存在するがね。せつかくだ、戦闘に支障はないから、教えておいてあげよう。ミストリアは実体から半径一キロ以内の好きな場所に、九体までの幻影を出現させることが出来る。つまり、この演習場内なら

ば、どこへでも自在に幻影を配置することが可能なのさ!」

先程のナミの右腕を斬り落とした攻撃は、気配のない幻影を俺達の背後に発生させ、印を結んでいた本体と瞬時に実体交換、ナミの右肩の間にブレードを差し込んだ、というわけだ。

それはまさに

「驚きが隠せないようだね。まさに、瞬間移動みたいだろう? ミストリアは、元々この戦術を想定して造られたスーパーロボットなんだ。スペックの比重をパワーと防御力に置きつつも、ハートドライブ属性「幻」による、幻影の自由配置と、実体交換で、高速戦闘をも可能にする。それが我がミストリア。剛と柔を合わせ持つ、最強のスーパーロボットだ!」

京極工業は 京極コンツェルンは、何と驚異的なスーパーロボットを産み出したのか。

ミストリアが過去、一度たりとも宇宙怪獣に敗北していないのも頷ける。

西洋甲冑を着た忍者のようなデザインは、決して伊達ではないということだ。

だが、ミストリアがいかに強力な機体であるとしても、彼女を自在に操れるのは京極くらいのもだろう。彼の特異体質と、優れた操縦技術があつてこそ、ここまでの戦闘能力を発揮出来るのだ。

改めて、目の前の大型スーパーロボットが、強敵であることを知る。

腕一つを失ったナミが、左腕にフリーランスを展開し、ミストリアの方に向き直った。

「結局……何も変わらないというわけだ……」

右肩の関節の断面は、スパークを起こしている。迂闊に動くと、関節部が爆発を起こしかねない。

俺はウィンドウの彼女に言う。

「ナミ! 後方に下がれ! その傷じゃ、これ以上の戦闘は無理だ!」

「戦闘は無理？ 勝手に決め付けるな。別にボディーを貫かれたわけじゃない。攻撃に必要な武器を一つ、持って行かれただけだ」

「武器じゃない、持って行かれたのは、お前の腕だ！ 痛みは感じないかもしれないが、ダメージを受けてることを自覚しろ！」

モニターには「ナミ、損傷率十六パーセント」の表示が出ている。ウインドウの彼女が顔を上げ、切れ長の瞳を俺に向けた。

「黙れ、へボパイロット」

「！」

「貴様の言うこと聞いて、この様だ。何だ、これは？ 先日宇宙怪獣の戦いと、何も変わっていないではないか。この上、貴様の指示に従って、後方に下がるだと？ 冗談ではない！ 我は貴様を信用しない。最後に頼れるのは……自分だけだ！」

ナミがポニーテールブースターで加速し、ミストリアに向かって突撃する。

「ナミッ！」

「うおおお ツ……！！」

フリーズランスを前方に構え、ブースターの推進力をそのまま攻撃力に換え、矢の如く突っ込む。

しかし、ミストリアは、印を結ぶどころか、かわす素振りも、防御する素振りさえも見せない。

京極は呟く。

「愚かな……」

ミストリはただ、目の前を見つめ、その場に立っている。

「くたばれえええ！」

ナミのフリーズランスの切っ先が、ミストリアに突き刺さった。

が、切っ先は紫色の胸部装甲を少しも抉れることなく、表面に当たっただけで、その動きを静止していた。装甲表面のバリアーを貫くことが、出来なかったのだ。

「馬鹿な……出力が足りてない……！？」

「馬鹿な、だと？ 何を言ってる、当然の帰結だろう。パイロット

の命令も口々に聞けない出来損ないの不良品風情が、僕を倒せるとでも思ったのか？ だとしたら、甚だ遺憾だよ。君は戦いの舞台上がる資格すらない。邪魔だ、そっちがくたばれ』

京極はつまらなそうな声で、ミストリアの脚部を動かし、ナミを蹴り飛ばした。

『がっ……………！』

ライトブルーの機影が、装甲の破片を散らせて、宙を舞う。

『ミカ！ ナミを！』

『分かつてる！』

俺が指示を出す前に、ミカは四足歩行の獣のごとく走り出していた。ナミがコンクリートの地面に叩き付けられる前にキヤッチする。蹴られた際の衝撃のせいかな、ナミとのリンクが途切れ、ウィンドウは消滅してしまっている。

ミカに抱きかかえられたナミは、ぐったりとして動かない。

想像以上のパワーで蹴り飛ばされたらしく、脇腹辺りの装甲が砕け、内部構造が露出し、バチバチと漏電を起こしている。

『う……………！』

苦しげに呻くナミ。

ミストリアがミカとナミを見て、『下らないな』と首を横に振った。

『まさか、パイロットの命令を聞かずに特攻したスーパーロボットを、戦力を分断させてまで助けるとは。』

白坂、僕には君の行動意図がイマイチ理解出来ないよ』

『訂正しろ』

『何？』

『ナミを出来損ないの不良品と呼んだことを訂正しろ！』

気付けば、俺は怒鳴っていた。

京極が腹立しげに言葉を返す。

『……………それが理解出来ないと言っているんだ。何故、君はサヤナミ力を庇う？ それだけの技量がありながら、何でそんなスーパーロ

ボットのパイロットをしている？ 君ならもつと、自分の力を発揮出来るスーパーロボットに乗り換えることが出来るはずだ。いや、誰だって普通はそうする。それなのに、どうして君はそんなところに甘んじている？』

「最初は、俺もそう思っていた。何で自分はこんな奴らの面倒を看なくちゃならないのかって、散々目の前の状況を呪ったよ。だが……そんなの、パイロットの勝手な言い分だ。スーパーロボットは、パイロットの道具じゃない。自分の意思を持った、パートナーなんだ。こいつらは、自分で強くなりたいと願った。そして俺は、そんなこいつらと強くなりたいと思っただ。決して甘んじてるわけじゃない。俺は……自分の意思でここにいる！」

『スーパーロボットは、パイロットと心を重ねてこそ、真の力を引き出せる。それすらも出来ないスーパーロボットを、お前は自らのパートナーをして認めるといふのか？』

「認めるさ。いや……今は、互いに認め合う努力をしている真つ最中だ。ナミは、自身がスーパーロボットであることを誇りに思っている。確かにあいつは、俺の言うことを聞かない。だけど、あいつはいつだって全力だ！ いつだって全力で強くなろうと足掻いている！ そんなあいつを、出来損ないの不良品なんて、絶対に呼ばせない！」

『それが下らないと言っているんだッ！！！！』

京極の怒号と同時に、ミストリアが印を結んだ。

ミカとナミから離れた位置に居て、孤立しているサヤの周囲に、九体の幻影が出現する。ミストリア本体と合わせ、十体で円状にサヤを取り囲む様は、まるで支柱の太い檻に閉じ込めるかのようだ。

『実際に目の前の状況を見る、白坂！ そのライトブルーの機体が独断先行したことで、君の乗る機体は孤立し、こうして十体のミストリアに取り囲まれる羽目になった。これは、ミストリア必勝の型だ！ 未だかつて、この型から逃れた宇宙怪獣は存在しない！ それでもなお、君は彼女を庇えるのか！？ 庇えはしないさ！ 庇え

たとしても、それは偽善だ!』

「……だったら、掛かって来い。この型を崩して、ナミに頭を下げさせてやる!」

俺はウィンドウの、ピンクツインテールの少女に目を向ける。

「サヤ! あれを使う!」

『うん! ナミちゃんの仇も、まとめて討つ!』

幻影の檻の中央で、サヤがファイヤーブレードを消失させ、代わりに腕を引く。

それは、一週間、早朝に特訓を繰り返してきた、必殺技の構え。

『はあああ……!』

ピンクカラーのボディを中心に、炎が渦巻く。炎はボディから、右腕の握り拳に集中して行く。

京極が笑った。

『ふはははははは! やはり来たな、カウンター狙い、一撃必殺、一点集中の必殺技! 無駄だ、当てられはしない! 教えてやるう、我が必勝の型は、カウンターを防ぐ為の型だ! そして、これから放つ必殺技「百花繚乱」は、カウンターを繰り返す暇も、隙も与えない!』

先日の消える宇宙怪獣を、一瞬で八つ裂きにし、爆散させた技だ。だが、俺は退かない。この戦い、俺はサヤナミカを信じると決めたのだ。

『これで終わりだ、白坂! 必殺奥義、百花繚乱ツ……!』

十体のミストリアが両腕のブレードを構え、一斉にブースターを点火し、円陣の中央にいるサヤに突撃する。

サヤは動かない。右拳にエネルギーを集中させることだけを考えている。

ここが第一のタイミング。

「ミカ! 今だ! 全力で走れツ……!」

俺はレモンイエローのスーパーロボットの名を呼んだ。

京極はそれを聞いてもなお、ミストリアの突撃を止めない。

『今からあの距離では間に合わん！ 僕の勝ちだ！』

「いや、間に合う！」

二十本のブレードの刀身が、サヤを貫こうとした、その瞬間。

爆音と共に、衝撃波が空気を揺らし、外部から飛び込んだ稲妻のごとき速さの機体が、逆に九つの幻影を切り裂き、一つの実体にタツクルを喰らわせた。

『何だと！？』

『にやああああ！』

飛び込んだ機体は、もちろんミカ。

ミストリアはタツクルに吹き飛ばされつつも、ブースターで体勢を立て直し、後退する。ミカはスライディングして火花を散らし、十数メートル先で停止。

すると京極は、ミストリアの常時両腕に展開していたブレードを、収納させる。

『やはり、レモンイエローの機体をギリギリまで温存していたか！
ハートドライブ属性「雷」で、稲妻のごとく加速する。随分と反則臭いじゃないか！』

それを言うなら、ミストリアの『幻』の方がよっぽど反則臭い。

『だが！』

ミストリアは右腕を引いた。それはまるで、対峙しているサヤと同じ技を繰り出すかのような構え。

『僕は秀才だ。その程度の予測、戦う前から出来ている！ ミストツ、豪華絢爛を使う！』

『……了解しました、マスター。これより、豪華絢爛を発動します』
メイドさんの淡々とした口調に導かれて、ミストリアの右腕に異変が起きる。

ただでさえ巨大な紫色の腕だが、それが更に巨大化を始めたのだ。質量は増え続け、最終的に元の三、四倍の大きさと化する。

本当、ミストリアの『幻』の方がよっぽど反則臭い。

『君が隠し玉を用意して来ることは読んでいた。だから、僕も隠し

玉を用意させて貰った。それがこの必殺奥義「豪華絢爛」だ。君の機体が放とうとしている技と原理は同じだよ。ミストリアのハートドライブ出力の全てを右拳に集中させている。腕が巨大化して見えるのは、ハートドライブ属性「幻」によるものだ。視覚的にそう見えるだけで、実際の腕の大きさは変わっていない。しかし……この技の威力は、巨大化した腕に相当する！」

ブースターで、四十メートル超の身体と、技名に恥じぬインパクトを持った、ハンマーのごとき右腕を浮かす、ミストリア。

『これが、我がミストリアの、対カウンター用カウンター奥義。敵と同じ技をぶつけ、パワーで押し切る！ 先程の鏝迫り合いでは遅れを取ったが、今度はそうは行かない！ 二度も奇跡は起こらない！』

京極の言葉には、絶対的な自信が溢れている。

俺は決着が近いことを感じ取る。サヤの必殺技と、ミストリアの必殺技。双方の技がぶつかり合った果てが、この決闘の終局となるだろう。

ミストリアが、ミカの方に顔を向ける。

『どうやら、そのレモンイエローの機体は、スピードを強化しただけのようだからね。例え、ミストリアに攻撃がクリーンヒットしても、大したダメージは与えられまい。故に、この攻撃は止めることは敵わない！』

そして、ミストリアのアイカメラが、サヤに向けられる。

『白坂！ この一撃で、君のピンクの機体にダメージを与え、戦いを終わらせる！ 行くぞッ！！』

俺は、ウィンドウのピンクツインテールの少女に言う。

「サヤ！ この一撃に、全てのエネルギーを乗せる！」

『うんッ！！ ラブ』

ミストリアがブースターで加速、巨大な右腕を振りかぶる。

『ファイヤアアア』

サヤも、弓を引き絞るように右腕を振りかぶり、ミストリアを迎

え討つ。

両者の距離は、三十メートル、二十メートル、十メートルと一気に狭まり

『パアアア　　ンチッ！！！』

『豪華絢爛ッ！！！！』

壮絶な轟音と共に、互いの拳を激突させた。

凄まじい衝撃波が巻き起こり、演習場を取り囲む防護フィールドを震撼させ、スパークさせる。

十数倍はあろうかという巨大な拳に、サヤは負けじと自身の拳をぶつけ、押し返そうとしている。

ここが、第二のタイミング。

俺はサヤとの外部スピーカーのリンクを切断、ウィンドウの金髪癖っ毛の少女に声を掛ける。

「ミカ！　準備はいいか？」

あくまで落ち着きながら、しかし瞳には闘志に満ちた炎を燃やしながら、彼女は頷く。

『いつでも行けるで！　ほーやん、指示を！』

「よし、ミカ、加速準備！　位置について　」

レモンイエローのネコミミロボットは、クラウチングスタートの構えを取る。

「よーい　」

両手の指はコンクリートの地面に着けたまま、腰を地面と水平にする彼女。

俺は操縦桿を引き、機体脚部と背部のブースターを点火しながらも、ブレーキのペダルを踏み、ギリギリまで溜める。

「ドンッ！！！！」

俺は自らが駆るスーパーロボット・ミカを、激突する二体のロボットに向かって、疾走させた。

遡ること、決闘の七時間半前。午前五時半。

俺は、ジャージに着替えた沙耶と未佳を連れて、白坂家の近くにある川原に来ていた。

「余り時間がないから、要点だけを伝えるぞ」

俺が二人に伝えたのは、三つのこと。

「一つは、俺が乗り込む機体を、沙耶から未佳に変更する」

「えー!?」

「えっ、ウチ?」

不満そうな大声を上げたのが沙耶で、不思議そうな声を上げたのが未佳である。

沙耶は「何で何で何でー! 北斗くん、ボクのこと嫌いになつた!? 嫌いになつたの!」と涙目で飛び付いて来る。

俺は彼女の頭に手を置き、

「違う。好きとか嫌いとか、そういうことじゃなくて、決闘で勝つ為にどうしても必要なことなんだ」

「必要なこと?」

「そうだ。俺が今日の決闘で沙耶に乗ることは、京極にバレている。ラブファイヤーパンチの存在もだ。当然、カウンター対策は万全だろっ」

「じゃあ、勝てないじゃん! 今日までの、ボクの早起きと、特訓の意味は!?!」

シヨックを受けたらしく、取り乱す沙耶。

「落ち着け。裏を返せば、京極は俺が沙耶に乗ると思っ込んでいるということだ。だから、例えば俺が未佳に乗っつていようと、サヤの外部スピーカーから俺の声が流れてさえいれば、京極は俺が沙耶に乗っているものと勘違いをする。戦闘演習のルールは、『パイロットが搭乗している機体の損傷率が五十パーセントを超過した時点

で終了』と決まっている。ということは」

「ミストリアは、ボクを狙って攻撃を仕掛けて来る……?」

「そういうことだ。京極は隙のない男だが、俺が沙耶に乗っていると思っっている内は、必ず未佳に背を向けるタイミングが発生する。」

例えば、必殺技を放つ瞬間」

「そうか、分かったよ、北斗くん！ その瞬間に、背後から未佳ちやんで攻撃するんだね！」

「正解。ただ、それだけなら別に、俺がわざわざ未佳に乗らなくとも、沙耶に乗って、未佳に指示を出していれば事足りる。しかし、これは前にも説明したが、ミストリアは重装甲を持つスーパーロボットだ。生温い攻撃では、装甲を貫くことはおろか、装甲表面のバリアーに阻まれて、傷一つ付けることが出来ない。そこで、未佳には、要点の二つ目。決闘までの七時間で、二つの必殺技を覚えて貰う」

黄色のジャージを着た、金髪癖っ毛の少女に、俺は右手の人差し指と中指を立てて見せる。

当然の反応として、未佳は目を丸くした。

「ふ、二つも!? 無理や! 決闘まで、あと半日もないんやで!」

「未完成でもいい。だからこそ、成功率を上げる為に、決闘の時、俺が未佳に乗ってサポートをするんだ。それに、俺の予想が正しければ、未佳、お前はもう、必殺技の一つを習得しているはずだ」

「え?」

首を傾げる彼女に、俺は言う。

「未佳は、五十メートル走、何秒で走れる?」

「わ、分からへんけど……走るの好きやで、確かに。あつ、同じくらい、家でごろごろしてるのも好きやけど……」

「じゃあ、今から、ハートドライブ出力を足に集中させる感じで走ってみてくれるか。手を使って、四足でもいい。タイムウォッチを持って来たから、五十メートル離れて、俺の前まで走って来てくれ」

「と、とりあえず、全力で走ればいいんやね？ 四足でええんやろ？」

「ああ。ただし、その場合には、両手にもエネルギーを集中させるのを忘れずにな。五十メートルの距離感は、自分で分かるか？」

「一応、スーパーロボットやから、それくらいは……」

俺との位置を確かめつつ、未佳は後ろ歩きで離れる。

「四十八……四十九……五十。うん、これできっちり五十メートルやね」

「よし、じゃあ、俺の前まで走って、しっかりと停止してくれ。出来るか？」

「分かった。やってみる！」

それから、彼女はクラウチングスタートのポーズを取る。

俺は右手にストップウォッチを持ち、指とボタンを密着させる。

「未佳、準備はいいか？」

「いつでもええで！」

「なら、行くぞ、よい……ドン！」

俺は視線を自分の足元に向けて、ストップウォッチを押す。

ズザザッ！ と音がして、瞬間移動のように目の前に出現した金髪癖っ毛に手を置き、俺は同時に、もう一度ストップウォッチのボタンを押した。

猫のように、両手両脚を地面に着いた状態で座り込んでいる未佳は、驚いた様子で俺を見上げて来る。

「ほ、ほーやん……ウチ、めっちゃスピード出た……！」

「だから、言っただろ？ お前はもう、必殺技の一つを習得してるはずだつて。お前のそのスピードは、今日の決闘で、強力な武器になる。ちなみにタイムは、肉眼の大雑把な計測だが、一秒ジャスト。時速に直すと――」

頭の中で暗算する。一秒で五十メートルだから、六十秒で三千メートル。つまり、一分で三キロメートル。一時間では、百八十キロメートルだ。

「時速百八十キロ。スーパーロボットになって、歩幅が約十倍になるから、単純計算で、時速千八百キロ。重量の増加とか、造波抗力とか、実際にやってみないと分からないが、頑張れば、音速を超えられるかもしれないぞ?」

「お、音速の壁って、破る時、痛いんかなあ……?」

思考がマヒ気味になっているのか、的外れなことを口にする未佳。俺は、彼女の頭をわしわしと撫でてやる。

「ともかく、上出来だ。これだけ速く走れるってことは、両手両足にしつかりと、ハードドライブのエネルギーを集中させられてるってことだからな。もう一つの必殺技も、七時間の練習で、なんとかなるはずだ」

「むー」

ふと、背後から声がした。くいつくいつとジャージの裾が引つ張られる。

振り返ると、沙耶が頬を膨らませていた。

「未佳ちゃんが一気に二つも必殺技を覚えて、結局、ボクの出番はないわけ?」

俺は首を横に振る。

「そんなことはないぞ、沙耶。言ったる? 今回の決闘、俺はお前達二人に懸けるって」

「だけど、未佳ちゃんの必殺技で、ミストちゃんに攻撃するんでしょ? だったら、ボクにおとり以外の意味なんて……」

肩を落とすピンクツインテールの少女。

そんな彼女に、俺は三本指を立てて見せた。

「要点の三つ目。これを担うのが、沙耶、お前だ」

「!」
「言つとくが、未佳と同じくらい重要だから、これが出来ないのと、俺達は負けるかもしれない。いいか、よく聞けよ。ミストリアはおそらく、ラブファイヤーパンチと同じ、一点集中型の必殺技を、隠し玉として使ってくる」

「なっ……!! どうして!?!」

「ミストリアは、重装甲・重火力タイプの機体だ。俺達が一点集中の必殺技を使つて来ると分かっている以上、カウンターに対する力ウンターとして考えられるのが、同一の必殺技。そして、もしも一点集中型の必殺技同士が衝突した場合、ハートドライブ出力の高い方が勝つ」

「ちょ、ちょっと待って! そんなことされたら、ボク、確実に出力負けしちゃうよ!」

俺は「そうだな」と頷いて見せる。その上で、言った。

「だから、耐えてくれ。俺と未佳が背後から必殺技を喰らわせる、その時まで」

「あ……!!」

意味を理解したらしく、沙耶は瞳を大きくする。

俺は続ける。

「ハートドライブ出力を一点集中させている間は、ミストリアは分身することも、実体交換することもない。装甲表面のバリアーも消えて、完全な無防備となる。そこへ俺達が必殺技をクリーンヒットさせて仕留める。……これは、沙耶と未佳、どちらが欠けても成し得ない作戦だ」

「……分かった! ボク、ミストちゃんの必殺技を、なるべく長く凌いでみせるよ! いや、むしろ押し切ってみせる!」

力強く頷く沙耶。俺は、彼女の頭にも手を置く。

「よし、その息だ。もしもミストリアの必殺技を押し切ったら、今までの恨み辛みを、ありったけ込めた拳で」

ストップウォッチを持っている方の手で握り拳を作り、同じく沙耶が作った握り拳と、軽くぶつけ合った。

「ミストリアのどてっ腹を、思いつきりぶち抜いてやれ!」
「うん!」

ミカの機体が激しく振動し、コクピット外からの音声が聞こえなくなっただことで、俺は音速の壁を突き破ったのだと知る。

ぐわつと視界が狭くなった瞬間、俺はウィンドウの金髪癖っ毛の少女に言う。

「ミカ！ 急減速と同時に、ミストリアの真上に向けて、跳躍！

第二の必殺技を使うぞ！」

『了解や！ 行くで、ほーやん！』

身体に激しいGが掛かる。ミカが急減速しているのだ。

同時に開ける視界。ミストリアはもう目の前。

ミカがブースター全開で、ジャンプする。周りに空の青が広がり、モニターの高度メーターを見れば、示す数字は、地表から百四十二メートル。

遙か下方に見える、拳を激突させている二体のスーパーロボットの姿。

俺はその片方、紫色の機体に狙いを定める。

「よし、ここまででいい！ ミカは全エネルギーを右足に集中させることだけを考えてくれ！ 機体の操作は俺に任せる！」

『頼むで、ほーやん！ はあああ！』

俺は操縦桿を握り、ミカの右足を上に振り上げる。ボディーから右足へ、進む青白いイカツチ。電は増大を続け、レモンイエローの脚部の一点に収束して行く。

俺は外部スピーカーをオンにして、叫んだ。

「京極ツ！！！」

ミストリアが顔を上げ、黒いゴーグルの奥のアイカメラを黄色く光らせる。

『何！？ 白坂、まさか……貴様ああッ！！！！』

京極が怒りの叫びを上げるが、もう遅い。

俺はパートナーであるネコミミのスーパーロボットに呼び掛ける。

「やるぞー！ ミカー！」

『うにゃあ!』

「必殺ッ!」

右足を天高く掲げたまま、機体を重力加速度に乗せ、急速降下。

『スターライト 』

俺はミカの言葉に乗せるように、真下のミストリア目掛け、溜めに溜めた雷のエネルギーを、

「『フオオオ ルッ!!!』」

ハートドライブ出力一点集中の踵落としを、解き放った。

天から落ちる稲妻のごとく、ミストリアの右肩に振り下ろす。

首に巻かれた漆黒のマフラーを焼き切った。パープルカラーの装甲に電撃が走り、亀裂が走る。そして、ミカの踵がついに、装甲にめり込んだ。

ミストリアはサヤと拳を衝突させている為、防御することも、反撃することも出来ない。

俺はミストリアのパイロットに告げる。

「これで終わりだ、京極ッ!!!」

京極の怒号が、演習場に木霊する。

『白坂ああああああああああ ツ!!!』

京極霧夜は、十四歳まで、敗北という二字を知らずに生きて来た。

正確には、敗北という単語は知っていても、実際に負けたことは、一度もなかった。

産まれてすぐに英才教育を受け始め、五歳になる頃には、小学生レベルの勉強は全てつつがなくこなせるようになっていた。

彼は何でも出来た。様々な武道を習い、運動神経も、常人の枠を

飛び抜けていた。

十二歳で、某国の工科大学の博士号を得た。まさに秀才と言っべき少年だった。

十三歳の時、彼は父親に連れられて、京極工業のスーパーロボット開発の現場を訪れ、スーパーロボットに興味を持った。

父親に頼んで、彼は特別に、スーパーロボットに乗せて貰った。最初はもちろん、テストパイロットに操縦方法を教えて貰っていたが、それからわずか数十分にして、彼は自在にスーパーロボットを操って見せた。

余りの異常な上達ぶりに、専門の医師によって、彼の身体が調査された。

「霧夜様は、特殊な体質をお持ちです」

医師はそう言った。

「異常なまでの空間把握能力を持っているのです。それはつまり、スーパーロボットを、手足の延長のように扱えるということ。パイロットになれば、霧夜様は間違いなく大成することでしょう」

彼はやはり秀才であった。

彼は、京極コンツェルンを継ぐことが決まっていたが、同時に、スーパーロボットパイロットになることも決めた。

だがそれも、彼にとっては余興に過ぎなかった。若くして優れた能力を持っていた為、彼は人生に退屈していたのである。スーパーロボットパイロットになることは、彼にとって、一時的な退屈凌ぎでしかない。そう思っていた。スーパーロボットパイロット試験を受ける、その日までは。

十四歳から受けられるスーパーロボットパイロット試験は、彼にとって、大した難関ではなかったが、そこでちょっとしたサプライズがあった。

そもそもこのスーパーロボットパイロット試験、十四歳の少年が受けること自体が前代未聞なのだが、その年はあるうことが、同い年のパイロット志願者が、もう一人いたのである。

霧夜は楽しくなって、ちょっとした企みを思いついた。

もう一人の志願者の少年に、自分の圧倒的才能を見せつけてやるのだ。

場合によっては、相手が深く傷付き、スーパーロボットパイロットを諦めることになってしまいかもしれないが、それもまた一興。彼は自分が楽しければ、別に何でも良かった。

ところが、実際試験を行ってみると、霧夜が想定していたものは、全く逆の構図になってしまった。

京極霧夜は、試験において、もう一人の志願者の少年、白坂北斗を、何一つ上回ることが出来なかったのである。

皮肉にも、深く傷付くのは、彼の方であった。

何しろそれは、十四年間の人生で初めて味わう、敗北という名の屈辱。彼のプライドは、スーパーロボットパイロット試験を通じて、ズタズタに引き裂かれた。

結局、その年は、霧夜と北斗の二人が試験を通過して、新たなスーパーロボットパイロットとして選ばれた。

成績は、北斗がダントツの一位で、霧夜は大きく離され、二位だった。

それから今に至るまでの京極の人生は、白坂北斗の名を出さずに語ることは出来ない。

三年間、霧夜は、ひたすら自身のスーパーロボット・ミストリアの強化に勤しみ、時間を忘れる程に、自らのパイロット技術も研鑽を重ねて来た。京極家の人間としてのプライドは少なからず残っていたので、北斗の前では、いつだって余裕ぶって見せたが。

現われる宇宙怪獣に対しては、全身全霊を賭けて、叩き潰して来た。

だが、決して白坂北斗のスコアを上回ることには出来なかった。

だからこそ、ついこの間、月ごとのスコアブックを見た時は、霧夜は愕然とならざるを得なかった。その月の宇宙怪獣撃破数一位の霧夜に対し、なんと北斗が撃破数ゼロで、最下位にまで転落してい

たのである。

ようやく念願が叶ったというのに、霧夜は不思議なことに、微塵も嬉しさを感じることが出来なかった。

むしろ、怒り狂いそうになった。というか、こめかみの血管が音を立てて、切れた。

「何をやってるんだ、あの男は……！」

すぐに京極コンツェルンの資金を使って、探偵を雇い、探りを入れた。

原因は特に苦勞することもなく、半日もすると、判明した。それほどに単純な原因だった。

一ヶ月程前、白坂北斗は、それまで乗っていたスーパーロボットの故障により、彼の姉であるスーパーロボット開発の世界的権威、白坂南が一年半前に製作した『少女合体サヤナミカ』という機体に乗り換えた。ところが、そのサヤナミカ、合体ロボなのにも関わらず、合体システムに問題があり、未だに一度も合体出来ていないというのだ。

要するに、北斗はハズレくじを掴まされたのである。それも、大ハズレの中の大ハズレを。

いや、だが、それならば、さつさと契約を解除して、また別の機体に乗換えればいいだけの話だ。

霧夜に疑念が浮かんだ。

何故、白坂北斗は、一ヶ月もの間、サヤナミカを手放さずにいるのか。

霧夜の知る白坂北斗は、例えるならば、ダイヤモンドのような少年である。それは、初めて会ったスーパーロボットパイロット試験の会場で、嫌という程思い知らされた。

北斗は、もともとの才能も飛び抜けているが、それ以上に、努力をして、磨き抜かれた才能を持っていた。加えて、強固な自分というものも所持している。彼はただひたすら、スーパーロボットパイロットになる為に、才能を磨き続けていた。

その白坂北斗が、一ヶ月もの間、何をもたついているのか。サヤナミカの人型インターフェイスは、外見だけは可愛い少女の姿をしているというが、それに絆されたわけではあるまい。

だとしたら、何故？

それを知るために、霧夜は、朝の登校時間を狙い、直接自分の目で見て、確かめることにした。

鮮やかなピンク、金、ライトブルーの髪色をした少女達と歩く北斗は、最初こそ、何一つ変わっていないように思われたが、霧夜がカメラを掛けて、

「さて、どうだか！ 蛙の子は蛙とも言っからね。結局、第一次、第二次東京決戦の英雄は死んでしまった。たまたまスーパーロボットに乗って、たまたま敵の宇宙怪獣と相打ちになったパイロットが英雄と呼ばれてるだけじゃないか。違うかい？ というか今現在、君は一体何をしてるんだ。そんな……るくに合体も出来やしないう出来損ないの不良品共と、何を悠長に遊んでいるんだ？」

と罵ると、北斗はそれまで見せたことのない目で、霧夜の制服のネクタイを引っ掴み、思いつき引き寄せて来た。

「っ……何を怒っているんだ、君は。親のことを馬鹿にされて腹が立ったのかい？ それとも……」

霧夜は内心、腸が煮えくり返っていた。

嘘だと思いたかった。だが、北斗は、本当にサヤナミカに絆されつつあったのだ。

スーパーロボットパイロット試験の時、自分のプライドをスタズタにした男がこうも変わり果てるのか。

感情に身を任せる目の前の男は、霧夜の知る白坂北斗ではない。

白坂北斗は、もっと冷静で、強固な自分というものを持っている男だった。

それがこんなにもあっさりと、脆く、崩れ去るといつのか。

失望した。許せなかった。腹が立った。だから

死んでも負けない、こんな奴に。

霧夜は、そう思った。

『白坂ああああああああああ　　ッ！！！』
それは、京極の執念の叫びだった。

ミストリアの豪華絢爛が、向くはずのないの必殺技が、俺の機体
ミカの方を向く。

まるで、京極の意思が、そのままミストリアの腕を動かしたかの
ように。

『きゃあッ！？』

サヤが、ラブファイヤーパンチを弾かれた勢いで、十メートル程
後退さる。

ミストリアはあろうことが、拳をぶつけ合っていた体勢から、ぶ
つけ合っていた拳を、裏拳としてこちらに放って来たのだ。

無理矢理で、強引だった。ミストリアの肘関節が悲鳴を上げ、亀
裂が走るのが見えた。

それでも、裏拳の矛先は、確実にミカを捉えていた。

「くッ！？」

操縦桿を操作して、離脱しようとするが、間に合わない。

裏拳は、エネルギーが集中したままで、巨大に膨れ上がったまま
だ。

喰らったら、一溜まりもない。防御しようとも、一撃で、ミカは
損傷率五十パーセントを超過してしまうだろう。

どうする、どうする、どうする。くそっ……ここまでか……！？
迫り来る裏拳がスローになって見える。

防御するしかない。そう思い、操縦桿を動かす。

その時だった。目の前を、ライトブルーの機影が横切った。

「ナミ！？」

見慣れたポニーテールブラスター。ボロボロのボディで、彼女

は左手を伸ばす。

その先には、ミカが装甲を砕いて露出させた、ミストリアの肩間接がある。

ナミはそこへ左手を突っ込んだ。

途端、バキバキと音を立てて、ミストリアの右肩が丸ごと凍りつく。

裏拳の攻撃が、俺とミカの眼前で、ぴたりと静止した。右肩の可動域に氷が引つ掛かったのだ。

京極が怒鳴る。

「貴様ツ……………！！！」

ライトブルーのスーパーロボットはそれで全力を使い果たしたらしく、外部スピーカーで呟きながら、ミストリアの肩からずり落ちる。

「……………そっちがくたばれ」

俺は、ミカのブースターを点火し、ナミを受け止めてから、ありつたけの大声で叫んだ。

「サヤアアア ツ！！！！」

ミストリアが裏拳にエネルギーを残していたということは、すなわち、拳をぶつけ合っていたピンクのスーパーロボットも同じはず。果たして、サヤは既にミストリアに肉薄し、燃え盛る右拳を振り被っていた。

「この恨みいい」

黄色いアイカメラを一際強く輝かせ、彼女は必殺の一撃を、思いっきりミストリアのどてっ腹に叩き込んだ。

「はらさでおくべきかああああああああああああ ツ！

！！！！」

サヤの拳がミストリアに突き刺さると同時に、爆炎が噴き上がり、演習場を覆い尽くした。

エピソード／北斗、後ろ後ろ！

それからのことを少し話そうと思う。

まずは、決闘を終えて、何週か経った日曜日のこと。

俺は、奈美と一緒に、住んでいる街から、駅二つ程離れた場所にある、有名なスパゲッティのレストランを訪れていた。店の名前は『デイズジェーロ』。イタリア語で『雪解け』という意味らしい。

何故この店なのかというと、インターネットでナポリタンの美味しい店を探した結果、偶然引っ掛かったのがこのデイズジェーロであり、なおかつ比較的家に近かったからである。

その日の奈美の格好は、身内の鼻屑目を別にしても、大変可愛いものだった。奈美はどちらかというと、可愛いというよりも、美しいと表現すべきタイプの外見をしているが、一応外出ということとで、本人なりに意識したらしく、チェック柄で水色地のトップス、下は黒のフリルスカートワンピースを着て来ていた。ライトブルーの髪は下して、氷の結晶を模したヘアピンを付けている。

俺なりに掛ける言葉を探したが、見つからなかった（というか、どれも恥ずかしい台詞で、言うのが躊躇われた）ので、外見については一切触れないでいたのだが、どうやらそれが不味かったらしく、奈美はあからさまに不機嫌そうな顔で、眉間に皺を寄せていた。

今は店の中で、俺達は向かい合わせにテーブルに着き、注文したナポリタン二つが来るのを待っている。

奈美は修復の終えた右腕で頬杖を着きながら、不満げに言った。

「何で我が、貴様と二人で、食事をしに来なければならんのだ」

どうやら、外見について触れないことを怒っているのではなく、そもそも俺と奈美の二人きりというシチュエーションに腹を立てているらしかった。

「いや、それはほら……この前、一緒にナポリタンスパゲッティーの美味しい店に行こうって、約束したし」

「約束などしていない。貴様が一方的に、我を誘っただけだ。勘違いも甚だしい」

「だけど、奈美も乗り気だったんじゃないのか？ こうして、店まで付いて来てくれたし。そんなオシヤレまでして」

「違うっ！」

奈美は、ばんっ！ とテーブルを叩く。何故かそっぽを向いて、「店に付いて来たのはつまり……あれだ、惰性だ、惰性！ オシヤレは、乙女として、外出の際には当然のことだ！ 大体、貴様が、二人で出掛けようなどと言うから……！ というか、よりによって何故ナポリタンスパゲッティなのだ！ 下らない！」

「えっ、だって……奈美は、ナポリタン、好きだろ？」

「我がいつ、そんなことを言った！」

「いや、言っではないけれど……俺が作った弁当、ナポリタンは残したことはないじゃないか」

京極との決闘前の一週間は、朝の特訓で忙しくて、余裕がなかったが、学校のある平日には大抵、手製の弁当を作って、持たせている。

奈美は「ふん」と鼻を鳴らした。

「我はスーパーロボットだぞ？ 好き嫌いなどするわけがあるまい。我はピーマンだろうと人参だろうと、問題なく食べられるぞ」

ちなみに沙耶は、ピーマンも人参も嫌いである。

「いや、そうじゃなくて。俺がお前らのパイロットになったばかりの頃、奈美は、俺の作った食事、そもそも口にしようとしなかったら？」

あの頃に比べれば、俺と奈美の今現在の関係は、相当マシになったと思う。

最初は、まともに口さえも聞いてくれなかった。その時は俺も、彼女達のパイロットであることが凄く嫌だったし、状況に絶望もしていたから、奈美に嫌われていようが、別にどうだって構わなかった。

「食事に手を付けないことも、『自分はお前のことが嫌いだ』という奈美なりの表現方法だったのだろう。」

「だが、俺は、彼女が俺を嫌うのは一向に構わないが、俺の作った食事に手を付けないことだけは、どうしても許せなかった。」

「食材が勿体ないし、何より、主夫精神というか、長年白坂家の食事を作って来た者として、譲れないプライドがあったのだ。」

「俺、それが悔しくてさ。朝昼晩と、何だったら奈美が食べるのかと作戦を立てながら、和、洋、中、ありとあらゆるバリエーションの食事を作ったんだ。で、その中で初めて食べてくれたのが、弁当の中に入れておいたナポリタンだった。」

「弁当箱が空にならなかったとはいえ、その時は、一品でも食べてくれて、してやったり！と純粹に嬉しくなったのを覚えている。」

「それから、奈美は少しずつ、俺の作った食事を口にしてくれるようになった。徐々に、日に日に食べてくれる量が増えていって、半月もすると、完食するのが当たり前になった。」

「だから、俺はてっきり、奈美はナポリタンが好きな物だと思っていたんだけど……違うのか？」

「あれは、妥協案だったのだ。」

「妥協案？」

俺が訊き返すと、奈美は椅子にもたれかかり、腕を組む。

「そうだ。それまで家庭的な料理だったのが、次第にこちらの機嫌を窺うような、高級レストランに出そうなメニューに変貌していったのだな。うっとおしいので、仕方無く、弁当を口にしてやることにした。それがたまたま、ナポリタンだったというだけだ。」

「う、うっとおしいって……」

何だろう、この虚しい気分は。結構、大変だったんだけどなあ……

…メニュー考えるの。

がっくりと肩を落としていると、ウェイターさんがやって来る。

「お待たせ致しました。こちらが、当店のスペシャルナポリタンスパゲッティになります。」

トマトケソースが絡められ、タマネギ、ピーマン、ベーコンが混ぜられたパスタが二皿、テーブルの上に並べられる。

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

ウェイターさんは、人好きのする笑顔を見せると、勘定紙を置き、別のテーブルの方へ去って行く。

俺は奈美に言う。

「まあ、とりあえず、ナポリタンも来たみたいだし、食べるとしようか」

テーブル隅に置いてあるケースから、スプーンとフォークを取って、彼女に手渡す。

彼女は、むっとして、俺からそれを奪い取る。

俺は自分の分のスプーンとフォークを持つと、フォークでナポリタンを巻いて、口に運んだ。

これはなかなか美味だ。材料は概ね同じであるから、トマトソースが自家製で、オリジナルのレシピが使われているということなのだろう。

……今度、俺も自分でトマトソースを作ってみるか。あつ、でも、奈美はナポリタンが好きなわけじゃないのか。うーむ。

「情けない声が聞こえた」

不意に、奈美がそう言葉を零した。

「え？」

見ると、彼女はナポリタンにフォークを差して、くるくると回している。

「先週の決闘の話だ。我が、ミストリア四式の攻撃を受けて、吹き飛ばされた時、貴様の乗ったミカが、私の身体を受け止めただろう。私のAIにはノイズが走っていたが、貴様の情けない怒鳴り声だけは、やたらはつきりと聞こえて来た」

「怒鳴り声……？ ああ、あれか。京極の奴、お前を馬鹿にしゃがったからな。ちょっと言い返してやったんだ」

「貴様は何も知らない」

奈美の切れ長の瞳は、ナポリタンを見つめたまま。

「我のことを、さも見透かしたように言うな。貴様に我の何が分かるというのだ」

「……そうだな。確かに、俺は奈美のことを何も知らない」

「だから、あの時は腹が立った。それだけだ」

「そっか」

奈美はフォークでナポリタンを巻き終わる。一皿分全て巻いた為、ナポリタンがフォークの先で、球状になっていた。

大きく口を開け、彼女はそれを丸ごと頬張る。

もむもむ、と口を動かして、しばらくして、飲み込んだ。

手元に置いてある紙ナプキンを取り、口を拭きながら、彼女は一言。

「高い」

切れ長の瞳で、ウェイターが置いていった勘定紙を一瞥する。

「これで九百八十円は高い。非経済的だ」

奈美は席を立ち上がり、俺に言った。

「帰るぞ」

「えっ!? ちょっと、待つ……俺まだ食い終わってない!」

急いでナポリタンを口に詰め込む俺を尻目に、彼女は店の出口へ向けて歩き出す。

途中、足を止め、振り返り、奈美は二度目の台詞を言った。

「貴様は何も知らない」

肩を竦めて、俺の食べているスパゲティを指差す。

「だから、教えておいてやる。ナポリタンは、イタリア料理ではない。日本料理だ」

「げっ、マジで?」

「それと、我は別に、ナポリタンが好きなのではないが」

奈美は背中を向けて、歩き出す。

「北斗の作るナポリタンは、嫌いじゃない」

俺は最後の一口を食べたところで、思わず静止してしまう。

一足先に店の外に出て行くライトブルーロングヘアの少女。
その後ろ姿を見つめながら、俺は思う。

……トマトソースのオリジナルレシピ、考えてみるか。
というか。

「あいつ、今、俺のこと……名前で呼ばなかったか？」

合体練習は、決闘を終えてからも継続している。

それは、沙耶と未佳が続けたいと言い出したからで、俺が奈美に
「お前もそれでいいか？」と尋ねると、彼女は「ふん」と鼻を鳴ら
して、腕を組みながら「好きにしろ」という答えを返して来た。

練習を行う時間は、基本、前と変わらず、平日の学校の放課後で
ある。

奈美とナポリタンを食べに行った翌日の月曜日も、高校の授業を
終えた後、俺達は演習場に集まっていた。

「じゃあ、今日も合体練習を始める。三人共、準備はいいか？」

俺がジャージの上着のチャックを上げながら訊くと、三人娘は各
々頷いてみせる。

「よし、見ててね、北斗くん！ ボク、今日こそは合体を成功さ
せてみせるよ！」

ピンクツインテールの少女、空木沙耶が、右拳を天に振り上げて、
「おー！」と笑顔で気合いを入れる。

「うちも準備出来てるで、ほーやん。出力も百パーセントを超えた
ことやし、後はひたすら練習を繰り返すだけや」

決闘後の一回目の測定で、見事、百パーセント以上のハートドラ
イブ出力を発揮することに成功した金髪癖っ毛の陸花未佳は、にか
つと八重歯を覗かせて笑う。

「誰に物を言っているのだ、北斗。我はいつだって準備万端だ」

相変わらず尊大な物言いの海川奈美は、不敵な笑みを浮かべなが

ら、肩に掛かったライトブルーポニーテールを、背中に退ける。

俺は彼女達に、いつも通りの指示を出す。

「分かった。各自、ロボットモードに変身。所定の位置に着いてくれ」

「了解！」「」

三人娘は圧縮ナノマシンを活性化させ、自らの身体を、それぞれのパーソナルカラーの光で包み込む。

光は一気に膨張し、全長十五メートルの人型を形作る。

やがて、光が弾け飛び、現れたのは、鮮やかな彩色を施された、三体のスーパーロボットだった。

変身を終え、演習場の中央に移動する、サヤ、ナミ、ミカに、俺は片手にぶら下げていた拡声器を向ける。

『よし、所定の位置に着いたな。じゃあ、始めるぞ！』

俺は右手首に付けたSRコマンドーに音声入力をする。

『合体許可！』

『少女合体！』『』

三体のスーパーロボットが各パーツに変形をし、ブースターで、空中に飛び上がった。

俺はすかさず拡声器で指示を飛ばす。

三機共、変形は上手く行っている。しかし、ジョイントの際に、位置がずれ、姿勢が不安定になって失敗してしまう。

人型に戻り、コンクリートの地面に着地する三人娘。動きのキレは決して悪くない。

「最近、ナミの調子も良くなって来たみたいだね」

そう言ったのは、隣でパイプ椅子に腰掛け、ノートパソコンを弄っている俺の姉、白坂南だった。

こうしてサヤナミカの合体練習を行うようになってから、姉さんはハートドライブ出力の測定にやって来て、俺の隣で駄菓子を食べるのが、日課になりつつある。

基本、姉さんは研究室に籠もりつきりで、家に帰って来ることが

ない為、以前はそんなに会うこともなく、用があっても電話で済ませていたのだが、ここ最近は顔を合わせない日がない。

「出力も七十八パーセントと、軌道に乗った感じだね。これならば、合体の成功もそう遠くは……うん？ どうしたね、弟君？」

姉さんと目が合つて、俺は顔を背ける。

「いや、別に……姉さんつて、実は結構暇なのかな、と思つてさ」

「まあ、暇と言えば、暇だし、暇じゃないと言えば、暇じゃない」

「どっちなんだよ。急ぎの仕事とかはないのか？」

「そうだな、切羽詰まつてる仕事は、今は特にない」

「じゃあ、今日辺り……家に帰つて来れば？」

「……」

横目で姉さんを見ると、再び目が合つた。きよとん、として様子で、髪伸び放題じゃなくなった悪魔は、目を瞬かせている。

やがて、姉さんはニヤリと口元を歪めた。

「それも悪くないかもしれん」

「じゃあ、夕飯は五人分作る。言つとくが、ドタキャンは無しだぞ。材料が余ると、勿体ないからな」

「それに、夜は弟君と添い寝も出来るしね」

「やつぱは帰つて来んな！」

「来るなど言われると、余計に行きたくなるのが、人間の心理というものだぞ、弟君」

口元を笑みの形にする姉さんは、珍しく目元も笑っていた。

それから合体練習をしばらく続けていると、今度は背後から嫌味な笑い声が聞こえて来た。

「はーっはっはっはっはー！」

振り返らなくても、もはや誰だか分かってしまうのが、俺の振り返ろうとする意志を阻害する。要するに、面倒臭い。

だから、俺は前を見たまま、拡声器で合体シークエンス中の三人娘に、指示を出し続ける。

『あー、サヤ、そこはもうちょっと丁寧になしてくれ。それから

ミカは 』

「……つて、無視するなあああ！」

余りにうるさいので、拡声器を下ろし、身体ごと後ろに向けると、そこにいたのは、やはり見慣れたオールバックと、真っ白な制服。いかにもキザったらしい、京極霧夜だった。

隣には当然、瞬きをしない紫髪のメイドさん、ミストリアの姿がある。彼女は相変わらず「……どうも」と抑揚のない声で言い、ぺこりと頭を下げて来る。

俺はため息を吐いて、京極に言った。

「何だ、負け犬。何か用か」

「誰が負け犬だ！ 僕は負けてない！ あの戦闘演習は引き分けになっただじゃないか！」

「往生際が悪いぞ！ 防護フィールドが爆発の衝撃に耐えられなくなっただけなのは、仕方がないとしても、そうしたらあの時点で、損傷率の高い方が負けに決まってるだろ！ ミストリア、ボロボロだったじゃねえか！」

「ふふん、だから、このままでは埒があかないと思って、僕は今日、これを持って来たのさ！」

京極は白い制服の胸ポケットから、折りたたまれた一枚の紙を取り出すと、それを俺に見せつけて来た。

何かと違って、目の前の紙をよく見ると、黒筆書きで『果たし状』と書いてあった。

「……つまり、あれか？ 京極、お前は俺に改めて、スーパーロボット同士での決闘を申し込むと？」

京極は高笑いをする。

「ふははははははははは！ その通り！ どうだ、白坂！ 名案だろう？ はつきりと白黒着かなかった勝負は、君にとっても不快だろうと思って、書道八段の僕が、筆を振るって果たし状を書いて来たのさ！ 刮目して読みたまえ！」

オールバック男が胸を張りながら、果たし状を手渡して来る。俺

はそれを受け取ると、京極に笑顔を作って見せる。

俺は果たし状を真つ二つに引き裂いた。

「ふざけんなああ！」

ビリビリに破いて、紙片を空に散らばらせる。

京極が雷に打たれたかのような顔をした。

「うわっ、白坂！ 何をする！？ 僕の自信作だぞ！？」

「何が果たし状だ、この野郎！ 名案でも何でもないわ！ この前の演習の結果をうやむやにしようとしてるだけじゃねえか！ 諦めて、素直に認めろ！ あの決闘は、お前の負けだ！」

「諦めたらそこで終わりだぞ、白坂！」

「言つとくけど、全然格好良くないからね、そのセリフ！？」

ふと、背後からサヤの声がする。

「ほ、北斗くん！」

そういえば、合体シークエンスの途中だったのを思い出す。おそらく、合体に失敗にし、次の指示がなくて困ったので、やって来たのだろう。

とはいえ、ここは一つ、京極にガツンと言ってやらねばならないので、俺は京極から視線を外さぬまま、サヤを制する。

「サヤ、ちよつと待ってる！ 今、取り込み中なんだ！」

「いや、ボク達の方も今現在、取り込み中というか……」

俺は構わず、オールバック男に人差し指を向ける。

「京極！ 大体、お前、ナミにまだ謝ってないだろ！ この前の演習中に、ナミを出来損ないの不良品呼ばわりしたこと、忘れたとは言わせないぞ！」

そこへ、ナミ本人が言う。

「そんなこと、今はどうだっていい！ いいからそんな奴は放って置いて、こつちを……」

ナミは焦っているようだが……いやいや、駄目だ。

俺は首を横に振る。

「駄目だ、ナミ！ はっきりと言う時には言つとかないと！ とい

うか、今じゃなく、後でいいなんて、そもそもナミらしくない！」「
「分かってるなら、今はこっちを優先しろ！」

続いて、未佳が声を震わせながら、訴える。

「ほ、ほーやん……お願いや、ちよつとでいいから、こっちを……」
切実な様子である。

俺はそれらを一蹴することにした。

「だーっ、うるさい！ とにかく、俺は京極に話があるんだ！ 後
にしてくれ！ ……で、話を戻すが、京極！ ……って、京極？」
改めて、人差し指を白学ランの男に向け直したところで、異変に
気付く。

京極が目を丸くして、斜め上方に視線を向けていた。

俺は彼の両肩を掴む。

「おい、呆けたフリをして誤魔化すな。とにかく、まずはナミを馬
鹿にしたことを謝って……」

「し、白坂！ そうじゃなくて……！」

「は？」

どうやら、京極の視線は俺の背後にある何かを見上げているよう
だった。

耳に届いたのは、三人娘のやりとり。

「も、もう無理……！ ボク、これ以上維持するの無理いいい！」

「ちよつ、待つのだ、サヤ！ まだ肝心の北斗が確認して……ぬお
っ！？ 暴れるんじゃない！ バランスが崩れる！」

「ほ、ほーやん、こっちを……お願いやから、こっちを向いてええ
え！」

まさか。

ようやくそこで思い到り、俺は振り返る。

ミストは瞬きをせずに、じーつと俺の背後を見上げていて。

姉さんも、パソコンの手を止め、目の前に立つ何かに対し、「へ
え……」と感慨深げに視線を向けていた。

俺が皆の視線に追い付いた時、そこには、三体のスーパーロボッ

トが、磁石の同じ極を近付けたみたいに反発し合い、綺麗に弾け飛ぶ姿があったわけで。

「きゃあ!？」

「ぐはっ!」

「にゃああああ!？」

サヤが地面に顔面スライディングをし、ナミが尻餅をつき、ミカがごろごろと地面を転がるのを見てから、俺はようやく、喉から声を出すことが出来た。

「え……」

三色のスーパーロボットは、すぐにがばっと起き上がって、俺の方へ這い寄って来る。

俺に巨大な顔を近付け、声を揃えて言った。

「北斗くん、見た!？」「見たのか、北斗!？」「ほーやん、見たん!？」

「えっと……」

たらたらと顔を流れる冷汗を感じながら、俺は問う。

「もしかして、俺……とてつもなく大事な瞬間を見逃した？」

演習場が、しばし沈黙に包まれる。

そして。

「バカアアア　　ツ!!!」「」

三人の少女の怒声が、雲一つない、どこまでも澄んだ青い空に響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8705j/>

少女合体サヤナミカ

2011年7月16日03時17分発行